
英雄予備軍冒険譚

かつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄予備軍冒険譚

【Nコード】

N7526W

【作者名】

かつぶ

【あらすじ】

飛竜が空を舞い、妖精が草原に歌う幻想の世界。人として生まれた少年ヤマトは、ノエルという少女と出会い、彼女を守ると心に誓う。やがて「冒険者」となった二人は、腕を磨いて経験を積み、互いに信頼を高めて行く。だが次第に離れて行く二人の實力 ヤマトは普通の人間。ノエルは特別で希少な存在「天使」であった。守ると誓った相手に守られるという矛盾に悩みながらも、がむしゃらに進むヤマト。周囲の期待に応えたいと思いつつも、ヤマトと離れたくないと思うノエル。そんな二人に、最大の試練が訪れる。――

オーソドックスな西洋風ファンタジー世界を舞台に繰り広げられる、
青春冒険活劇〜

序話：ダメ人間と失格天使（前書き）

戦闘シーンなど、残酷な描写が含まれている話がございます。その都度、前書きにて警告表示をさせて頂こうとは思いますが、苦手な方はご注意ください。

序話：ダメ人間と失格天使

大きな木の下で、年端も行かぬ幼い少女が泣いている。

愛らしい顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃ、白いワンピースは土で汚れて泥だらけ。長く綺麗な金髪には折れた枝が絡まり、膝小僧は擦り剥けて血が滲んでいる。

木から落ちたのだ。

しかし彼女は傷が痛くて泣いているのでは無い。

彼女の背中から生える一对の翼　真っ白な光を放つ美しい翼だ
その翼が、傷付いていた。発光する翼の所々が赤く染まり、一部が裂け、一部が折れていた。抜け落ちた羽は付近に散らばり、風に晒された端から細かな光の粒へと分解され、空へ昇って行く。

天使の象徴たる、純白の翼。

その翼が傷付いてしまった事に、少女は酷く心を痛めていた。翼を失えば天使ではいられない。飛べない天使など、天使では無い。傷付いた翼を羽ばたかせ、無理矢理飛ぼうと試みる少女。だが折れた翼は風を捕らえる事無く無意味に傷口を広げ、ただ光の粒を撒き散らすだけ。

少女の表情が絶望に染まる。泣き声が大きくなる。

（しょうがねえ奴だな……）

少年は呟く。

少女の泣き声は彼の耳に届いていた。早く助けてやらなくては。そんな気にさせる泣き声。早く彼女の元へ駆け寄って、手を差し伸べなければならぬ。

少女がまた羽ばたき、光の粒が舞う。そして更に泣き声が大きくなった。モタモタしてはいられない、早く行かなくては。少年は少女の元へと走る。早く、一刻も早く。悲痛な泣き声が少年を急かす。

胸が締め付けられる。

少女に近付くにつれて舞い散る光の量が増えてくる。少女から放出され、ゆらゆらと漂う光の粒。その一つ一つが明るく優しい光を放ち、触れればほのかに暖かい。まるで母の腕の中にいるような安らぎ……母を知らぬ少年でさえ、そう感じた。

だが捻くれ者の少年はその安らぎに反発するするように、あえてぶっきらぼうに言った。

（おい、もう泣くな）

少年の声に、泣いていた少女が顔を上げる。可愛らしい少女だ。ささくれ立った少年の心に、生まれて初めて大きく熱い物が宿る。

（泣いたってしょうがねえだろ？ ほら、元気出せよ）

汚い服で拭った手を、そっと差し伸べる。

高鳴る鼓動。その理由に少年は気付かない。

（そんなくらのケガなんかツバ付けときゃ治るって）

（で、でもっ！ 私、飛べなくなったら……）

（大丈夫だよ、ケガが治ったら飛べる。もし飛べなくても、飛べるようになるまで俺がずっと面倒見てやる。だから心配すんな）

（……うん）

そっと握り返される手。差し出された少年の手に、少女の手が重ねられる。柔らかく、暖かい手のひら……全ての痛みと苦しみが癒されてゆく、そんな気さえする。

（ありがとう）

言つて、少女が笑つた。まるで天使のような……いや、天使の微笑みだ。

（お、おう）

その笑顔が眩しくて、思わず目を逸らしてしまふ。くすくすと笑う少女。

（何だよ、笑うなつて。いま泣いてたと思つたらこれかよ……全く、しょうがねえな）

光溢れるこの場所で、少年は誓ふ。この少女を守る事を。二度と傷付かぬように、二度と涙を流さぬように。この笑顔を守り抜くと。

第一話：暗闇の中で（前書き）

戦闘シーンあり。残酷な描写がございますのでご注意ください。

第一話：暗闇の中で

深い洞窟。暗闇が支配するこの場所では、松明の明りなど螢火に等しい。しかしそれでも燃え盛る炎は自らの役割を果たし、洞窟の岩壁を明るく赤く浮かび上がらせる。

そこに響くのは足音、水音、激突音。澱んだ空気がふわりと動き、腐った水と湿った土の嫌な臭いが鼻腔へと流れ込む。それはべつとりと顔に付着した泥水の臭いだ。

「ちつくしよっ！」

水溜りに倒れこんだ少年が悪態を付き、片手で顔の汚泥を拭い捨てた。泥を擦った跡が日に焼けた肌に残る。

歳は十五くらいだろうか。多少目付きは悪いが、それなりに整った顔の少年だ。

簡素な革鎧を纏ったその身体は若干小柄で力強さは無いが、無駄が無くシャープで機敏な印象を与える。手にした短剣もまた薄汚れてはいたが、使い込まれた刀身は剣呑な輝きを放ち、切っ先の鋭さに衰えは無い。

着古した服を泥で汚した少年は倒れたままで頭を振り、黒髪から滴る泥水を散らせて視線を上げる……と、そこに鋭く尖ったツノの先端が迫っていた。

「うえっ!？」

情けない悲鳴を上げながらも身を捻り、突き出される角を辛うじて避ける。革鎧を掠めた角が硬い岩壁を穿ち、盛大な音と火花を散らす。

慌てて起き上がり、数歩後退して体勢を立て直す少年。汗ばんだ

手をスボンで拭いて短剣を握り直し、改めて視線を真正面へと向ける。

そこには赤銅色の肌をした、異形の怪物が立っていた。

遅しい人間の身体に雄牛の頭を付けたような外見。その頭部には鋭く尖った二本の角が生えている。身長は少年の倍。腕や脚、胴の太さは倍以上もある。

その怪物の名はミノタウロス。少年はこの凶暴な怪物を倒すために、暗くジメジメとしたこの洞窟へと足を踏み入れたのだ。

『ぶおおおおおーっ！』

ミノタウロスが吼えた。腹に響く重低音が洞窟の壁を震わせる。

ちよこまかと逃げまわる少年に業を煮やしているのか、怪物の爛々と輝く瞳には闘争心と怒りの色が見てとれる。

がつつ、がつつ。

岩と蹄とがぶつかる音が断続的に響く。ミノタウロスが地面を蹴る音だ。突撃前の牛が良く見せるこの動作の意味が、そのまま眼前の怪物にも通じる事を少年は知っている。

「この牛野郎……ちよつと優勢だからって良い気になりやがって。見てろよ」

呟いた少年は短剣を両手で握り、腰の横で構えた。片手で使う事しか想定されていない短剣の柄は短く、両手では持ち辛い。しかし贅沢を言える状況では無いだろう。

「さあ来やがれ、ケリつけてやる！」

少年が叫ぶ。それを合図としてミノタウロスが鼻息を噴き出し、頭を下げて姿勢を低くした……次の瞬間！

「うぐあッ!？」

巨大な岩石と勢い良くぶつかったかのような衝撃。少年は数メートルの距離を吹き飛ばされていた。地面に落下してもその勢いは衰えず、更に数メートルを転がって岩壁にぶつかり、ようやく停止する。

この時になって少年は自覚した。自らの予測が甘かった事を。ミノタウロスの突進がいかに恐ろしい物であるのかを。頭を低く下げた時こそ、牛頭人身の怪物が驚異的な瞬発力と比類なき突進力を発揮し、真の脅威となる瞬間だったのだ。

「ぐえっ、げほっ！ げほげほげほ……がはッ！」

肺から無理矢理追い出された空気が咳となって少年の口から飛び出す。同時に吐血。汚泥が鮮やかな赤で染まる。

血で汚れた口元を拭おうとして、右腕が妙な方向に曲がっている事に気付く。右足も同様に、膝の下で関節を無視して真横に折れ曲がっていた。他にも左の鎖骨に肋骨数本、指も何本か折れているようだ。

「げはっ！ ぐあ……痛ってええ」

ダメージを認識すると同時に、痛みがこみ上げてきた。咳き込む度に全身が激しく痛む。

見ればミノタウロスは既に体勢を整えていた。逞しい両腕を広げて真っ直ぐに立ち、少年を威嚇するかのように角をゆらゆらと揺らしている。その頭部からは、元々二本あった角の間に三本目の角が生え出していた。

マズい、このままじゃやられる。

今すぐ立ち上がり、ミノタウロスの追撃に備えなくては。しかしボロボロになった身体は思うように動かず、無理に動かそうとすれば激しい痛みを返してくる。

「くそっ……」

悪態をつき、少年は付近に目を走らせる。衝突の際に取り落とし、短剣を探しているのだ。

しかし松明が照らす範囲に短剣は転がっていない。それ以前に短剣が見つかったとしても、砕けた指では手に取る事さえ難しいだろう。

万事休す。

だが少年は諦めない。諦めるわけにはいかない。

挫けぬ強い意思で痛みを押さえ込み、ミノタウロスの動向に気を配りながら手探りで短剣を探す。汚泥に潜む石コロに指が触れる度に目の眩むような痛みが襲ってくるが、集中を途切れさせるわけにはいかない。再度突進を受けたが最後、そこに待つのは確実なる死なのだ。

「……ん？」

ミノタウロスを注視しながら短剣を探す内、少年はある事に気がついた。

怪物の頭から新たに生えてきた三本目の角。その一本だけが他の二本と形が違っている。見ようによっては十字架のようにも見える形、それは少年が今探している短剣の、柄部分の形状に酷似していた。

「もしかして……」

呟いた思いが、現実の物となる。

短剣だ。少年の短剣がミノタウロスの頭蓋に深々と突き刺さっているのだ。

『ぶほっ、ぶほ、ぶっ……ほっ………』

ミノタウロスの荒かった鼻息が途切れ途切れとなっていく。頭の揺れが大きくなり、身体が傾き、膝が折れる。やがて呼吸が途絶えた時、雄牛の巨体は地鳴りと共に汚泥の中へと倒れ落ちた。

「へっ、へへ……やった！　ざ、ざまあ見やがれ……げぼげぼっ！」

咳き込みながらも、血まみれの口元を歪ませる少年。

怪物とはいえミノタウロスも生き物には違いない。頭に剣を突きたてられては無事で済まなかったようだ。倒れた後はピクリとも動かず、せいぜいが時折り手足を痙攣させるだけ。白目を剥き、口からは長い舌がだらしくはみ出している。

「よし、あとは戦利品を持つ……げほっ、げぼ……げぼっ！」

辛うじて強敵を屠った少年。しかしその代償は大きい。

咳き込む度に吐き出される血は、時間と共にその量を増やしている。食道か、肺か、内臓のどこかに損傷を負ったのかもしれない。

「ちょっと……や、やばいかな……」

治療しなくては。腰のポーチに入れてある治療用の薬を飲みさえすれば急場は凌げるはずだ。

辛うじて動く左手でポーチを探り、細いガラス瓶を探り出す。透明な瓶の中には薄水色の液体が封入されており、揺れ動く度に淡い

光を発する。これが魔法の傷薬、通称『ポーション』。飲めばたちどころに傷を塞ぎ、体力を回復させる。少々値は張るが、荒事に関わる者にとっては必須とも言える薬だ。

「痛っ……よっ、んぐぐっ！」

複雑な紋様が刻まれた蓋を開けようと指先に力を込める。しかし思いのほか蓋は固く閉められており、また折れた指が自由にならない事もあって、なかなか開ける事ができない。

「このっ。開けよ、開け……げぼっ！ も、もうちょっと……う、げぼっ」

苦しい。喉に溜まった血に溺れてしまいそうだ。指先が痺れて感覚があやふやになり、靄がかかったように目が霞む。体中の痛みがまるで他人事のように感じ始める。それはつまり魂が肉体を離れ、温かな身体が冷たい肉塊へと変わってゆく瞬間でもあった。

「まずい……死ぬ」

朦朧とする意識の中、少年は死を間近に感じた。いつの間にか視界は暗闇に閉ざされ、指先には何の感覚も無い。一瞬でも気を抜けば深い暗闇の中へと引きずり込まれ、二度と戻ってこれなくなる。その確信がある。

「死ん……で、たまる……」

見えない目を開き、感覚の無い身体を動かして死に抗う少年。ポーションを飲みさえすれば、少しでも回復できれば。

しかし流れ出しす血液と共に抗う力も、強固な意思も、彼に宿る

様々な物が流れ出し、土へ吸い込まれて行く。

「……………」

間もなく、少年の思考が途絶えた。意識は深い暗闇の中へ。

そこには何も存在せず、何も感じない世界があった。空気も水も光も闇も無く、上下左右さえ無い、ただの空間だ。この空間で待っていればその内お迎えが来て、いわゆる『あの世』へと連れて行ってくれる。少年の魂はその事を知っていた。

そして魂の知識に違わず、お迎えがやってくる。

流れるようなブロンドヘアーに透き通るような肌。光り輝く純白の翼を背中に備えた、愛らしく幼い少女。彼女こそが神の使い、天使。自ら発する輝きを反射して頭上に浮かぶ光の輪は、彼女が本物である事の証明だ。

彼女は少年のすぐ傍に舞い降り、泥で汚れた頬にそっと触れて優しく声をかけた。

『ヤマト、大丈夫？』

鈴を転がすような声を心地よく感じながら、少年は思う。お前が迎えに来てくれたのか、と。

少年は天使の少女に見覚えがあった。幼い頃に木の下で出会った小さな天使。可愛い顔顔を涙でぐしゃぐしゃにして泣いていた、あの天使だ。

『いま、治してあげる。あまり心配させないで』

少年の全身を淡い輝きが包み込む。その光は暖かく柔らかな羽毛のような優しさでもって、傷と痛みをそっと払い落としてくれる。

心配させないで　　いつの頃からだろう、その言葉を多く聞

くようになったのは。昔はそんな事、無かったのに。

『ほらヤマト、ぼんやりしてないで、そろそろ行きましょう』

行くって、あの世か？ そうだな、心残りは色々あるけど、お前が案内人つてんなら……それもいいか。

差し出された天使の手を握る少年。身体を包む光が輝きを増し、目の前が真っ白になる。ふわりと浮き上がるような、それでいて落ちているかのような浮遊感に身を任せ、手を引かれるままに少年は光の中へ。

「……っ！ ヤ……起きてお願い！ ヤマトっ！！」

真っ白な光から抜けると、そこは薄暗い場所だった。澱んだ空気に腐った水と湿った土の臭い。そして目の前には、見目麗しい天使の少女。

少年の手を握りしめ、必死の声をかけてくる彼女。その手の温もりは先ほどまでと何ら変わり無い。だが彼女は幼い天使の姿では無かった。面影はあるものの、その姿は少年と同程度 少女と呼べる外見をしている。

「う……んう？」

「良かったヤマト、気が付いた！ んもう、本当に心配したんだからね！？」

今にも泣き出しそうだった少女の表情が、ぱつと明るくなる。

そうだ、この顔だ。あの時、差し出した手を握り返してきた時と同じ、絶望の中にあって希望を感じさせる笑顔。この笑顔を守りたくて、俺は……。

少年は ヤマトは、未だはつきりしない頭で天使の名前を呼

んだ。

「……ノエル」

天使の少女、ノエル。子供の頃に木の下で出会って以来、もう十年の付き合いになる幼馴染。

「俺、どうなって……ここ、あの世か？ 天国にしちゃあ薄暗いけど、もしかして地獄に落ちた？」

「もう、何言ってるの。地獄に天使がいるわけないでしょ？」

そつと目元を拭うノエル。

「天国でも地獄でもないわ。ここは洞窟、あなたが倒れてた場所よ」

少し怒りながら、それでいて笑っているような複雑な表情で彼女は続ける。

「ヤマトが一人でミノタウロスやつつけに洞窟へ行っただって聞いて私、飛んで来たのよ？ そうしたら血塗れで倒れてるの見つけて……」

ノエルの背中から生える一对の翼が、ヤマトの身体を包み込むように広がっていた。そこから放たれる光の粒子が彼の痛んだ身体に触れる度、心地よい温かさが生まれ、傷が塞がってゆく。

「こうやって治してたってわけ。どう、少しはマシになった？」

「ああ、随分ラクになってる」

ノエルたち天使と呼ばれる種族は、自らが発する光の粒子を操り

様々な奇跡を起こす。ヤマトの身体を癒すこの力も、その内の一つだ。

あれほど苦しかった呼吸は楽になり、咳も出なければ血も吐かない。折れた手足も少しずつではあるが回復し、元通りになってゆく。

「手足が千切れでもしてない限りは治せるわ……って言ってもまだ時間かかるから。完全に治るまで動かないでね」

治療に集中する為に目を閉じたノエル。その整った横顔をじっと見つめるヤマト。

そうか、天国じゃ無かったんだな。またノエルに助けられたってワケか。

彼女にばれないよう、ヤマトはそつと溜息をついた。彼が窮地を救われたのは、これが初めてでは無い。これまでに何度も救われ、助けられてきた。その度にヤマトは同じ溜息をつく。また助けられてしまった、と。

「……気を落さないでヤマト。人間がミノタウロスと戦って、命があっただけでも大したものよ」

隠したつもりだったが、見透かされていたようだ。微笑を湛えたノエルの優しい慰めが少年の心を、プライドを薄く削り取る。

お前が来なけりゃ死んでた。

その本音を押しさえ込むヤマト。

勝てると思っていた。勝てない相手では無いと。楽勝とはいかないまでも、なんとか倒せるだろうと踏んでいた。ところが蓋を開ければこの有様だ。結局、今回もまたノエルに助けられてしまった。

「もう、また溜息出てるよ？ そんなに卑屈にならずに元気出して。今回の事、本当に凄いつて思ってるんだよ？」

「ああ、わかってるよ」

疎ましげに答えるヤマト。もっと上手くやれたはずなのに、という思いが中々頭から離れない。

しかしノエルの言うとおりだ。卑屈になっけていても仕方がない、ミノタウロスと相打ちだつて大したものじゃないか。そう考え、気持ち切り替える事にした。何より、彼女の前でこれ以上みつともない姿を見せたくは無い。

「よしっ！」

パチン、と乾いた音が響く。ヤマトは自らの頬を張って陰鬱な気分を払拭すると、驚き顔のノエルを真っ直ぐに見つめて口を開く。

「悪かったよノエル、サンキューな。来てくれて正直助かった。そろそろ腹も減ってきた事だし、治し終わったらさっさと引き上げようぜ！」

「……うんっ！」

明るく頷くノエル。

「それじゃあ早く治しちゃわないとね。もう外は真夜中だよ」

言つて、天使の少女は嬉しそうに翼をばたつかせた。舞い散る光の量が増え、治癒速度がぐんと上がる。ぼんやりとした輝きでしか無かった光は、洞窟の壁面を照らし出して余る程の輝きへと光量を増す。

「今日の晩飯、何食おうかな。この時間じゃ日替り定食も終わってるだろっし」

「それじゃあ私が作ってあげようか？」

「お、そりや助かる！　けどよ、前の時みたいな野菜尽くしは勘弁してくれよな」

他愛の無い会話。暖かい輝きが屈託の無い二人の笑顔を包み込む。こんな時間がずっと続けば……。言葉にならない気持ち心が満たす。

だがそんな想いとは裏腹に、安息の時は終わりを迎えようとしていた。

「ん、なんだ？」

先に気付いたのはヤマトだ。

純白の輝きが照らし出す洞窟の岩壁。そこに何かの影が映っていた。それは不気味に揺らめきながら、次第に大きくなっている。

「どうしたのヤマト？」

小首を傾げるノエル。その時、壁に映る影が動いた。

「ノエル！　後ろだっ！！」

「え……きゃっ！」

ヤマトの警告とノエルが弾き飛ばされたのは、ほとんど同時だった。短い悲鳴と共に華奢な身体が洞窟の壁に打ち付けられ、その衝撃は岩壁を揺らし、細かな砂を舞わせる。

「ノエルっ！」

叫ぶヤマトの眼前には、倒したはずのミノタウロスが立っていた。

牛頭の怪物は倒れた時と同じく、脳天に短剣を突き立てられたままの姿だ。深々と刺さったそれによって満足に首も回せない、そんな状態でミノタウロスは立っていたのだ。

精気に満ち溢れ赤銅色をしていた肌は黒ずみ茶褐色に。瞳は濁った血のような深い赤に染まっている。その姿を一言で言い表すなら……。

「……悪魔」

ヤマトの口からこぼれ出た言葉は、図らずも怪物の本質を言い当てていた。

その悪魔が太い右腕を振り上げる。攻撃の瞬間に備え、体勢を整えるヤマト。しかし腕は横合いへと向きを変える。その方向には、壁を背に力無く倒れている天使の少女。

「やめろっ！」

叫び、飛び出すヤマト。矢のような速度でミノタウロスに体当たりを見舞い、殴り、組み付き、爪を立ててすがり付く。治りきっていない手足や内臓が悲鳴を上げるが、構ってなどいられない。

しかしミノタウロスはそんなヤマトなど全く意に介さず、ノエル目掛けて腕を振り下ろす。二度、三度。振るわれた豪腕は確かな精度でもって、天使を硬い拳と硬い岩の間に挟み、叩き潰す。

打撃音と岩が砕ける音が響くたび、白い羽が舞い散る。

「うわあああっ！！ この野郎！ やめろ、やめろってんだ糞ウシ！ こっち狙いやがれ！！」

気が狂いそうな程の焦燥感と無力感がヤマトを襲う。どんなに頑張っても、死に物狂いで挑んでもミノタウロスを止めるどころか拳

を逸らす事さえ叶わない。これでは何もせずただ見ているのと同じだ。

「畜生っ！」

ミノタウロスとノエルとの間に割って入ろうとするヤマト。しかし腕の一振りで吹き飛ばされてしまう。薙ぎ払われたヤマトは独楽のように回転しながら宙を舞い、地面に叩きつけられる。たった一発で体中の骨が砕け、何本もの筋が千切れた。声すら出す事ができない。

鬱陶しい雑魚を片付けたミノタウロスはノエルへと向き直り、拳を大きく振り上げる。次は渾身の一発を見舞うつもりのようだ。それをなんとか阻止しようと、ヤマトは砕けた手足で地面を這いずる。しかし……遠い。ミノタウロスとヤマトの間には距離的にも実力的にも、努力や根性だけでは埋まる事の無い開きがあった。

『ぶおおおおっ！』

雄叫びと共に振り下ろされる豪腕。ヤマトをボロボロにした一発を遥かに上回る速度の、体重が乗った鉄拳。それがノエルに叩きつけられる。耳が痛い程の打撃音と共に空気が震え、岩が砕けて壁に亀裂が走る。

「……っ！」

無事を願う叫びさえも掻き消す爆音。それが一瞬の衝撃波となつて過ぎ去った。

振動の収まった洞窟に、闇と静寂が戻る。

拳を振るった体勢のまま、ミノタウロスは動きを止めていた。まるで天使を葬った余韻を楽しんでいるかのようだ。

ヤマトは何もできなかった。いや、彼は死に物狂いで頑張ったのだ。だがそれは、全くの無駄に終わってしまった。悔しさ、後悔、哀しさ……様々な負の感情が津波のように押し寄せる。

そして動き出すミノタウロス。壁から引き剥がすように、拳をゆつくりと引き戻してゆく。その光景から思わず目を逸らすヤマト。拳が退いた場所には、ぺちゃんこに潰され無残な姿となった天使が……そう思ったからだ。

しかし彼の想像は、現実と重ならない。

「んぐぐぐ……んっ！」

拳と岩壁の間から漏れ出す純白の光。

「よ……よくも好き放題に殴ってくれましたね！ このくらいで天使が倒せると思ったらっ！……大間違いです！！」

光の中にはノエルがいた。驚いた事に彼女はその細腕でミノタウロスの豪腕を受け止め、押し返している。そして翼を大きく広げたかと思うと、気合の掛け声と共に巨大な怪物を投げ飛ばしたのだ。地響きが起こり、岩盤が砕けて小石が落ちる。そんな中ふわりと空中に浮かび上がったノエルは、凜とした態度でもって倒れたミノタウロスを指差す。

「あなた、悪魔に魂を売りましたね？ 死を逃れる為とはいえ……その行為を見逃す事はできません」

輝きの中で佇むノエル。その優雅な姿は絵画に表される天使そのものであり、世界最強を誇る種族『天使』としての威厳に満ちている。

彼女が羽ばたく度に何本もの羽が空に舞い、光へと姿を変える。

それらは大小様々な光の球となり、暗闇の中をゆっくりと漂う。

「悪魔と取引して安易な力を得た事、恥と知りなさい！」

光の球が輝きを増す。危険を察し、ミノタウロスが真つ赤な目を見開き低い唸り声を上げた。そして体勢を低くして頭を下げ、足で地面を掻き始める。突進の準備動作だ。二人の距離はそう離れていない。気を抜けば驚異的な瞬発力で瞬く間に間合いを詰められ、尖った角で串刺しとなる。

ノエル、気をつける。

そう叫ぼうと力を振り絞るヤマトだったが、声は出ず微かな呻きが漏れ出すのみ。しかしノエルはそれに気付き「心配しないで」と呟き微笑んだ。その表情には確かな実力に裏打ちされた絶対の自信が見て取れる。そして。

『ぶおおおおっ！』

ミノタウロスが突進を開始した。一瞬、姿が掻き消える程の急加速でもって、ノエル目掛けて真つ直ぐに突き進む。心臓が一回脈打つ程の間に、その間合いは回避不可能な物へ。

「ノエルっ！！」

全く避ける素振りを見せない天使の少女へ、ヤマトの喉奥から声が絞り出された。その声に呼応するようにノエルの周囲に漂う幾つもの光球が、鋭い槍に形を変える。

「悔い改めなさい！」

放たれる光の槍。それはまるで、光の雨。

夜空の星が全て飛来したかのように、無数の輝く槍が一斉にミノタウロスへと襲い掛かり、幾重にも貫いく。その速度は彼の怪物が見せた突進などとは比べ物にならず、真なる光の速さ。人間の動体視力では輝く軌跡を追うのが精一杯だ。

漆黒の巨体を貫いた光の槍は、軌跡を残しつつ地面や壁に当たって跳ね返り、二度、三度と怪物の身体を貫き通す。それが全ての槍で繰り返され、やがてミノタウロスの姿は大きな光の球に包まれ、覆い隠されていた。

「神よ……罪深き者を許したまえ」

ノエルの言葉に見送られるようにして、高く、長く、ミノタウロスの断末魔が洞窟内に響く。

その雄叫びが反響を終え、洞窟内に静けさが戻る頃、光の球は弾け散るように消え、その場には真っ白に燃え尽きた灰のような物だけが残る。これが悪魔に魂を売り、天使にケン力を売った者の成れの果てだ。

傷付いた身体を庇いながら、ヤマトは風に流され消えてゆく灰を複雑な思いで見つめていた。

第二話：ダメ人間と優秀天使

翌日。

抜けるような青空に日は高く昇り、人々は食い扶持を求め労働に精を出す時間帯。街に何件かある食堂の中でも、値段とボリュームには定評のある店にヤマトはいた。

目の前には焼きたてパンとカットチーズが並び、香ばしい芳香でもって『私を食べて』と誘いをかけている。しかし彼はそんな誘惑に目もくれず、ジョッキになみなみと注がれたミルクをちびりちびりと舐めるように味わうのみ。

ヤマトは、酷く疲れているのだ。と言ってもミノタウロス戦の疲れが残っているわけでは無い。疲れの発生源が現在進行形で目の前に居るからだ。

「ちょっとヤマト、聞いているの？ 昨日のミノタウロス退治、あなた一人じゃ受けられないレベルの依頼だったよ！？」

可愛らしくも厳しい叱責の声が食堂内に響く。

腰に両手を当てヤマトの前に仁王立ちするのは天使の少女ノエル。輝く金髪に純白の翼、ゆったりとした白いローブを纏った姿は優しい天使のイメージそのものだ。しかし、声を荒げる度に頭上で輝く天使の光輪が光を強めるのは、彼女が本気で怒っている証拠だった。りする。

「ヤマト！ き、い、て、る、の！？」

「聞いているよ、うるさいな……」

言葉のリズムに合わせてバシバシと机を叩くノエル。パンとチーズもそれに合わせて跳ね踊る。いい加減無視する事もできなくなっ

て、ヤマトが渋々といった様子で口を開いた。

「別に良いだろ？ 何も悪い事したワケじゃねえし、冒険者規定だって違反してないぜ。何より、ちゃんと依頼達成してる。結果オーライだ」

「良くない!!」

大声と共に、ばんつ、と勢い良く机へ叩きつけられる一枚の羊皮紙。紙には昨日倒したミノタウロスのイラストと共に、生息場所や倒した際の懸賞金、そして注意事項など様々な事柄が書かれている。

「これ、昨日ヤマトが受けた依頼の募集要項よ。ここ、ちゃんと見た？」

ノエルが指差した先には『推奨合計レベル20以上』と書かれている。

「書いてある意味、わかる？ これはね、一緒に戦う仲間のレベルが、合計20以上の方にオススメです、って意味なのよ？」

「わかってるよ、そんな事くらい」

「じゃあヤマト、あなたの冒険者レベルは？ 組合から認定されるレベルはいくつ？」

腰を曲げ、ヤマトへ顔を近付けるノエル。パンやチーズとは性質の違う良い香りが少年の鼻腔をくすぐり、屈んだ事によって広がったローブの胸元から、白く柔らかな膨らみが見えそうになっているのだが……。

「あなたのレベルは、い、く、つ、で、す、かっ!？」

急かす言葉に合わせ、ばんばんっと机を叩くノエル。胸元を覗き込んでいる場合では無いようだ。

「よ……4 だけど」

「でしよう！？　じゃあわかるよね、レベル4と20の違い！　5倍よ、5倍！　差は16！　これって猫と虎くらいの差なのよ、わかってる！？」

レベルとは、個人の総合的な能力を簡略化して数値に置き換えたものだ。一般人の平均をレベル1とし、経験を積み、功績を重ねて周囲に実力を認められるたびに数値が上昇して行く。つまり大雑把に言えば数字が大きいほど強い、という事になる。

「でもな、絶対に20以上じゃなきゃダメってわけじゃ……」

翼をはためかせて強弁するノエルに反論しようと口を開くヤマトだったが……。

「ダメよ！」

一喝され、口を閉じる羽目になる。

「ヤマト、あなた昨日ミノタウロスと一対一で戦って、勝てそうだなと思った？　ヤマトはレベル4だけど、それは数字上の話だけで、本当はレベル20相当の実力があるの？」

真っ直ぐな瞳で見つめられ、ヤマトは言葉に詰まる。

無茶をしているという自覚はあった。だが推奨レベルがいくつだろうと、相手がミノタウロスであれば善戦できる自身がヤマトにはあったのだ。十回戦って、七回くらいは……いや、五回くらいなら

勝てるだろうか？ 運の要素が絡むが、勝てない相手ではない。

「確かに俺はレベル20の奴ほど強く無いけどさ、牛が相手だったら十分勝ち目は……」

「あのねヤマト。レベル20の人はね、十回やれば十回勝つの。それが『レベル20のくせに弱い』って言われてる人だとしても、レベル20に認定されてる人なら、ミノタウロスに危なげ無く勝っちゃうの」

思わず口を噤むヤマトに、ノエルは優しく諭すように語り掛ける。

「冒険者への依頼って、色々危ない事が多いでしょ？ 何かと戦ったり、危険な所へ行ったり。だから推奨レベルの所には確実に依頼をこなせるだろうってレベルが書いてあるの」

昨日の自分を振り返るヤマト。もしノエルが来なければ、無茶な依頼を受けて失敗した馬鹿な冒険者として屍を晒す羽目になっていただろう。

「別に推奨レベルが絶対だ、って言ってるわけじゃないの。それにヤマトが弱いとか、そういう事を言いたいわけでも無いの。でもね、わざわざ推奨されてるって事は……」

「はいはい、わかった、わかったよ。人間風情が無茶すんなって事だろ？ いちいち説教臭いんだよ」

天使の至言を口うるさいと切って捨て、ヤマトは強引に会話を終了させた。似たような事を毎回のように言われているのだ。いい加減、聞き飽きる。

「もう、またそうやって卑屈になる……」

「わかったって言うてるだろ。昨日は無茶すぎた、反省してるよ」

また口を開きかけたノエルだったが、ヤマトの台詞に「全く、もう」と溜息混じりに呟くと、腰のベルトポーチを開いてゴソゴソと中を漁り始める。

「本当に次は気をつけてよね……じゃあ、はいコレ」

ノエルが取り出したのはコブシ大の革袋だった。机の上に置かれたそれは、じやらりと金属音をさせて形を変える。中身はどうやら銀貨のようだ。

「カネか……どうしたんだよコレ？ 結構な額だぞ。盗んだのか？」

「そんなわけ無いでしょ！ ミノタウロス退治の報奨金よ。昨日の内に冒険者組合で受け取っておいたの」

冒険者組合、報奨金。両方ともヤマトにとっては聞きなれた言葉である。

ヤマトやノエルは一般に『冒険者』と呼ばれる者たちの一人だ。様々な危険が予想される事柄を仕事として請け負い、その報酬として金銭を受け取り生活の糧としている。

そして冒険者が仕事を請け負う際に発生する金銭のやり取り、仕事内容の確認などといった事務的な事柄を統括し、取り仕切っているのが『冒険者組合』だ。

冒険者を名乗る者は全員この組合に所属し、組合の定めたルールに則って活動している。

「はい、ヤマト。あなたと私で半分こね。回復してあげたんだから、それで良いでしょ？」

「俺はいいよ。お前が全部取っとけ」

そう言つとヤマトは、革袋をフォークの先で器用に持ち上げてノエルへと投げ渡す。胸でそれを受け、きよとした表情でノエルは問い返した。

「どうして？ ヤマトが受けた依頼なんだから、本当なら全部ヤマトが取つたって良いんだよ？」

「バカ言え。一緒に倒したってんならまだしも、結局あの牛を倒したのお前じゃねえか。俺は何にもして無いんだ、報酬なんか貰えるかよ」

「ええー！？ 確かにトドメは私だったかもしれないけど、ヤマトだって頑張ったじゃない。そんな意地張らなくても……」

がたん、と机を揺らして立ち上がるヤマト。どこへ行くのかを聞こうとするノエルには構わず、ごちそうさまと言い放って店を出る。その後を追いかけようとしたノエルだったが……。

「ちょっと待ちな、天使のお譲ちゃん」

食堂の主人に呼び止められる。

「食い逃げは困るな。彼氏のメシ代、代わりに払ってくれるかい？」
「か……彼氏じゃありません！」

抗議の声を上げるノエルを尻目に、ヤマトの姿は街の雑踏へと消えていった。

第三話：湖の魔物（前書き）

多少ですが残酷な描写がございます。苦手な方はご注意ください。

第三話：湖の魔物

街を離れ、街道に行くこと二日と半日あまり。そこから道を逸れ、山林へと分け入る。枝葉を掻き分けて進めば、人の手が入った雑木林は早々に終りを告げ、そこから先は森々たる緑色の領域だ。

「もうすぐ目的地ね。その丘を越えたら見えるんじゃないかな？」

正午過ぎ、草いきれが蒸し暑い森の中。少女は、背中の白い翼を優雅に羽ばたかせてそう言った。

天使の少女、ノエル。

彼女が羽ばたくたびに振りまかれる光子は柔らかな温かな光を放ち、不快な湿気を優しく押しやって涼を成す。

「ふう…… やつとかよ。結構遠かったな」

ノエルの隣に立ち、額の汗を拭うのは黒髪の少年、ヤマト。背負っているバックパックがやけに大きく見えるのは、彼が小柄な為だけではない。空中からの偵察と道案内を兼ねるノエルの負担を減らす為、二人分の荷物を背負っているからだ。

「こんな事なら、もっと荷物絞ってくりや良かったぜ」

「頑張ってヤマト。あと少しだよ」

低空をホバリングして木々の隙間をゆるゆると進みながら、汗だくのヤマトへと声援を送るノエル。翼をこちらに向けて送ってくれる風の心地良さが、少年に歩く気力を呼び起こす。

「よっしゃ、行くかあ！」

踏み出す足に力を込めて、腐葉土に包まれた地面を蹴る。

一步一步、確実に。足下を良く見て、滑りそうな所や崩れそうな所は避け、立ち止まる事なく、けれど無理はせず、無心でひたすら両の脚を出し続ける。

「見えたよ、ヤマト！」

明るいノエルの声に顔を上げてみれば、そこは山の頂。いつの間にか登りきっていたのだ。そして眼下に広がるのは一面の蒼。濃い緑の中にあつてその蒼色は鮮やかに映え、眼に眩しい。

それは湖だった。四方を山に囲まれた窪地に水が貯まり、大きな湖になっているのだ。どうやらまだ新しいようで、背の高い木が水の中からよつきりと頭を出しているのが見える。

大きく息を吐いてヤマトは荷物を降ろし、背伸びをして肩のコリを解す。そして懷から羊皮紙を取り出すと、書かれている内容と深い蒼を湛える湖とを見比べた。

「こいつが今回の依頼対象か……でかいな」

「信じられないよね、この湖が全部スライムだなんて」

スライム。

ゲル状の不定形生物である。性質、生態は様々だが総じて知能は低く、暗くジメジメした所を好む。熱や冷気に弱い事が多い反面、物理的な攻撃に対しては高い耐性を見せる。

そのスライムが大量発生しているから排除して欲しい　これが今回、二人が受けた依頼の内容だ。

「物理攻撃に高い耐性ねえ。厄介だよなあ」

「切ったり叩いたりしてもやつつけられないって事だもんね」

「量も量だしな……」

話しながら丘を下り、湖のようなスライムに接近する二人。
最初こそ慎重に接近を試みていたものの、手で触れられる程にまで近付いてみても何の反応も見せないスライムの鈍感さに拍子抜けしてしまう。

「スライムと見せかけて、実は普通の湖なんじゃねえか？」

ヤマトが手近にあった木の枝を、青色の水面目掛けて投げ入れた。ちやぶ、と小さな水音を立てて水面に刺さる木の枝。波紋が立つような事は無く、水しぶきも上がらない。だがしばらく見ていると枝の周辺に細い触手が何百、何千と立ち上がり、枝を幾重にも絡め取って泉の中へと引きずり込んでゆく。

「うあつ……何も知らずに水に入ると、飲み込まれて溶かされちゃうのね」

白煙を上げて溶ける枝を見ながら、気持ち悪そうに呟くノエル。
周辺に気を配って見れば、一部だけが溶けた木の幹や動物の死骸が点在するのがわかる。

本能の赴くまま、満腹になるまで生物と呼べるもの全てを食べ続ける。それを獲物の豊富な森林で繰り返し、このスライムは湖と勘違いされるようなサイズにまで成長したのだろう。

その摂食行動や成長自体は、自然界の営みとして間違っているとは言えない。しかし肥大化したスライムを警戒してか山林からは獣が消え、地中の栄養が失われた事により、樹木の立ち枯れ被害も出ている。近隣の安全や秩序を考えた場合、このスライムを放っておくわけには行かない。

「おいノエル。俺は火で炙ってみるから、お前は……」
「うん。神聖魔法で攻撃してみるね」

頷き、ノエルは純白の翼から光の粒子を放ち始める。

神聖魔法 先日洞窟で傷付いたヤマトを癒し、ミノタウロス
を葬り去った天使の特殊な能力の事だ。攻撃に限って言えば、神に
仇名す存在に対して高い威力を発揮し、逆に神への信仰を欠かさぬ
者には効果が薄いという特徴がある。守りや癒しについては、その
逆だ。

「例の牛みたく、悪魔に魂売ってりゃ一撃必殺なんだろうけど……
難しいだろうな」

荷物から火口箱を取り出し、慣れた手付きで火種を作り始めるヤ
マト。害のある存在ではあるが、一応スライムも自然界の生き物。
ノエルの神聖魔法が効果的であるとは思えない。

「どうだ、ノエル？」

火種を松明に移し、輝く天使を眩しそうに見やる。するとノエル
は力無く首を横に振り「見てて」と湖面を指差した。

ヤマトが見ていると、天使の翼より生み出された無数の光球が槍
と化し、波一つ無い群青色の湖面に次々と叩き込まれる。先日、ミ
ノタウロスが誇った鋼のような肉体をいとも容易く貫き、焼き尽く
した光の槍だ。

しかし今は湖の表面を薄く削るのが精一杯。ある槍は水風船が割
れるような音と共に弾けて消え、ある槍は簡単に弾かれて何処かへ
と飛び去った。そして残ったのは、これまでと大差無く佇む湖の如
きスライムだ。

「神よ、罪深き者を許……」

「倒しても無いのにキメ台詞言ってんじゃねえよバカ。こつち手伝え」

「……なによ、バカじゃないもん」

無粋なちゃちゃ入れに余韻を邪魔され不満気なノエルだったが、すぐヤマトと合流し、作業に加わる。

「んじゃ、出発前の打ち合わせ通りで頼む」

神聖魔法が通じないとなれば、頼りになるのは炎だ。全ての物を平等に焼き尽くす、破壊の権化。進化の過程で人が手に入れた、最も強力な武器とも言われている。

ノエルに手渡される油壺と枯木、枯葉。熱に弱いスライムを炎でもって片っ端から炙る、この手の案件では定番となっている作戦をヤマトは実行しようと言うのだ。

「準備できたよ、ヤマト。指示通りだと思っ」

空から枯れ木を運び、油を撒いたノエルがヤマトの元へと戻る。準備は整った。あとは延焼しないように森から距離を置き、逃げられないよう四方から火を掛ける必要があるのだが……。

「向こう岸、私が点火してこようか？」

「大丈夫だ、まあ見てろよ」

申し出を断り、ヤマトが松明を振りかぶる。彼が見つめる先には、こんもり盛られた細い枯れ木と、そこから湖の周囲を囲むようにして繋がる油まみれの木の葉たち。

「そらよっ！」

掛け声と共に松明が弧を描いて飛び、盛られた枯れ木に命中した。その瞬間、閃光のように炎が瞬いたかと思うと獣が走るような速度で枯葉に燃え移り、見る間に湖岸全てが炎に包まれる。

もうもうと立ち上る真っ赤な炎、灰色の煙。発生する熱量は凄まじく、離れていても肌がヒリヒリと痛む。

「凄いなヤマト！ 大成功だよ！！」

ヤマトの鮮やかな手際に、感嘆の声を漏らすノエル。実際ベテラン冒険者も舌を巻く程に、その仕掛けは見事だった。

揮発する油を枯葉で押し止め、燃えやすい枯れ木を導火線代わりに広範囲に炎を広げる。ヤマトも他の冒険者から仕掛けは聞いていたが、試すのはこれが初めて。だが思いのほか上手く行き、会心の手応えを感じていた。

「我ながら上出来だ！ この火力なら日暮れまでにはケリつくだろ」

満足げに頷き、巨大なキャンプファイヤーと化した湖から離れるヤマト。あとは森へ燃え移らないように注意を払いながら、時が流れるのを待つだけだ。

「じゃあ、野営の準備しておくね？」

言って、ノエルが荷解きを始めた。スライムの最後を看取った後、ここで夜を明かしてから山を下ろうという算段だ。

そうしよう、と頷いたヤマトの耳に、バチバチと肉が爆ぜるような音が聞こえて来た。そちらへと目を向けてみれば、湖面の如きスライムが泡立ち、苦しげに波打っている。時折り何本かの触手が現

れては炎に焼かれ、縮れて消える。それを繰り返しながら、スライムは徐々にその体積を減らしていた。

その姿に、感傷を覚えるヤマト。生きようと必死にもがく様は、遙か高みの花を得ようと遮二無二手を伸ばす自分と重なって見える。スライムだって生き物なのだ。無理に殲滅しなくても、ある程度小さくなった所で逃がしてやれば……。

そこまで考えて、ちらりとノエルの様子を窺う。彼女はなんと言うだろう？

命を大切に思うのは良い事だと同意してくれるだろうか？ それとも冒険者として『スライム退治』という依頼を確実にこなすべく、最善を尽くそうと言っただろうか？

悩む間に時は過ぎる。日は傾いて山に掛かり、陽光は白色から橙色へ。山林を燃えるような色に染め上げる。

「なあ、ノエル……」

「ん、どうしたの？」

火が小さくなってきた。ここで油を追加投入しなければ、スライムは小さくなりつつも生き延びるだろう。そしてまたいつか巨大に成長して、人々の生活を脅かすのだ。

だが、そんなのはずっと先の話。それならば……。

「このスライムなんだけど……」

ヤマトがそこまで言った時だ。

びゅるっ、と液体が波打つ音がした。

何の音かと悩む間も無く、次の瞬間にはノエルの身体が無数の触手によって絡め取られる。

「んうっ！？ むぐぐっ！」

スライムだ。炎に焼かれて悶えるスライムが、これまでの緩慢な動きからは考えられない素早さで触手を伸ばしたのだ。

両手両脚、そして翼までも封じられ身動きの取れないノエル。スライムは顔にも張り付き、口を開ける事さえ出来ない。

水溜り程の大きさにまで縮んでいたスライムの、どこにこれほどの余力があったのか？ ノエルに駆け寄るヤマトの視界の隅で、ごぼごぼと沸き立つようにして地面から吹き上がるゲル状の生物。

スライムは炎に焼かれて体積を減じたのでは無かった。熱を嫌い、地面の中に潜っていたのだ。

「畜生！ ノエルから離れやがれ、この野郎！」

ノエルに張り付き、手繰り寄せようとする触手。それ掴み、力任せに引き剥がそうとするヤマト。しかしスライムの体表はヌルヌルと滑る上、千切れたと思ってもすぐに再生してしまう。

掴み取っては捨て、捨てては掴む。必死で繰り返すヤマトだったが、スライムは減るどころか徐々に触手を増やし、ノエルの身体を自らの中心へと引き寄せて行く。

やがてヤマトの手から、白煙が上り始める。スライムに触れる部分の皮膚が溶け始めているのだ。既に掌は爛れて剥け落ち、体液の飛び散った肘までの皮膚はボロボロになっている。そして、それはノエルも同じだった。触手に絡みつかれた部分から白煙が上がり、穴だらけになった衣服が朽ちた木の葉のように舞い落ちて行く。

「くっそおおー！」

叫び、ヤマトは何度も何度も触手を引き千切る。両手の肉は溶けて見るも無残な有様となり、動かす度に激しい痛みが襲う。だが、気にしている場合では無い。

勝利を確信し、弱者を哀れむ心が招いた危機。情けを掛けようなどと考えず、一気に焼いていけば違った展開があった筈だ。自分の甘さ……油断と慢心が、守るべき少女を危機に陥れたのだ。

「ノエルっ！ ノエルッ！！」

「……！ ……………っ！」

叫ぶヤマトの声が聞こえているのか、全身をスライムに包み込まれたノエルではあったが、何かを伝えようと必死に口を開いている。だが彼女を包むスライムが邪魔をして、その意図を全く汲み取る事ができない。

「また……こんなっ！ こんな事になるのかよー！」

ミノタウロスの時と同じだ。悪魔に魂を売り、力を増したミノタウロスに全く歯が立たなかった自分。必ず守ると……二度と傷付かぬように守ると誓ったのに……手も足も出ない。

スライムに包まれたノエルの身体から噴出す白煙。それが周囲の粘液と混ざって濁り、もう彼女の姿は殆ど見えない。更には濁りもるとも、スライムの奥へ奥へと沈み込んで行く。

このまま何もせず、何も出来ずただ見守る事しか自分には出来ないのか？

「ンな事……俺が許せるもんかー！」

スライムの元を離れ、走り出すヤマト。彼は野営予定地に置かれた油壺を手にとると、頭上に掲げて叩き割った。真っ黒な油が周囲に飛び散り、独特の臭気が満ちる。当然、ヤマト自身にも油は降り掛かった。

その油塗れの状態で彼は、火種に手を伸ばす。

赤熱した木炭に指先が触れた瞬間、少年の身体を真っ赤な炎が包んだ。

「があおおッ！！」

叫び声とも悲鳴とも付かぬ絶叫を上げるヤマト。灼熱の炎は痛んだ肌を舐め、髪を燃やす。息を吸えば喉が焼かれ、目を開けば眼球が爛れた。

だが彼は痛みを堪えて走り出す。全く怯む事なく、全力で走る。泉の底へと沈みつっある天使の下へ。

「ノエ……ッ！」

名を呼ぼうにも酸素が足りず、声が出ない。だが少年は必死で叫び、手を突き出した。燃え盛る手をスライムの中へ。スライムは熱を嫌う。これならばノエルにまで届くはずだ！

手を前に出し、身体ごとスライムに埋るようにして、一步、更に一步と奥へ踏み込んでゆくヤマト。高熱の油が爆ぜる音がして粘性の液体が道を開けた……その瞬間、指先に感じる柔らかな感触。間違いない、これは……！

「ノエルっ！！」

頭からスライムの中へ突っ込み、ヤマトは柔らかな感触を握り締める。すると向こうもヤマトの手を握り返して来た。まだ彼女は生きています！

スライムの海の中、無心で柔らかな感触を手繰り寄せるヤマト。そして大切な存在を、両腕の中にしっかりと抱きしめた。

柔らかく、温かい、心休まる感触。二度と離すものか、たとえばんな事があつたとしても。ヤマトが心に誓った……その時だった。

「少年！ 動くなよ！！」

野太い声が辺りに響いた。そして突然の風切り音。次の瞬間には、宙に放り出される感覚。

気が付けばヤマトとノエルはスライムの体内から、乾いた地面の上に投げ出された。

一体、何が起こったのか？

痛む両目をこじ開けた、ヤマトの視界に映った物。

それはサイコロのように寸断されたスライムと、剣を構えた複数の人影だった。

第四話：戦いの夜に（一）

暗闇の中、オレンジ色の炎が揺れる。その輝きの中で楽しげに踊るのは、火の精霊たちだろうか？ 灼熱の炎は精霊と共に風に乗って舞い、自らを囲む人々に光と温もりを与え続ける。

「本当に助かりました。ありがとうございます」

何度目なのかわからないが、ノエルがぺこりと頭を下げた。絹糸のような金髪が炎を照り返して赤銅色に輝き、天使の光輪が淡く明滅する。

「いやいや、礼には及ばないよ。困っている時はお互い様……冒険者の教則本にも、そう書いてあるじゃないか」

ノエルの声に応えたのは、彼女と同じく金髪の青年だった。白銀の鎧に身を包み、腰には長剣を携えた長身痩躯の姿。ヤマトやノエルと同じく、彼も冒険者であるようだ。

歳はヤマトよりも少し上……二十歳程に見える。細面で整った顔付きからは華奢な印象を受けるが、身に付けている武具は重厚で、貧弱な者では動く事もままならないであろう重量級の逸品である事が窺える。

「ほら、干し肉が温まったよ……といっても、ノエルさんは天使だから肉は食べないのかな？」

金髪の青年が、焚き火で炙っていた保存用の肉を差し出した。

ここはスライムが居座っていた場所から少しだけ山を登った野営地。眼下に見える深く窪んだ地面が、つい先程までスライムが溜ま

り湖のように見えていた場所だ。

そのスライムが跡形も無く消え去り、日も落ちた今。彼らは焚き火を囲み、静かな夜を過している。

「ありがとうございます。でも、せっかくですが私は遠慮しておきます……ヤマトはどう?。」

問いかけたノエルに、隣に座るヤマトは腕を十字に組んで意思を表した。食べたくても食べられない……溶解液と炎で傷めた喉が回復していないのだ。

「全くもう……無茶ばかりするから」

そう言つて口を尖らせ、ノエルは翼から舞い散る光の量を増やした。光は次々にヤマトへと降り注ぎ、熱傷でボロボロになった肌や髪、そして骨が見える程にまで溶け落ちていた両手をゆっくりと癒して行く。

「知ってるでしょ? 私は天使なんだからスライムの溶解液くらいなら耐えられるし、じつとしてれば息しなくても平気だって」

咎めるように言うノエルに、不満気な表情のヤマト。あの時は無我夢中で……と言いたかったが、喉が痛く喋るのも辛い。それに、そんな言い訳をするのも恥かしい。

「溶け難い鉄の棒とかを熱して、ゆっくり突き出してくれたら十分なのに……」

反論が無いのを良い事に、ぶつぶつと小言を続けるノエル。満身創痍のヤマトとは違い、スライムに全身を取り込まれたはずの彼女

は全くの無傷だった。絶対無敵との呼び声高い天使の防御力は伊達ではないのだ。

だが強いて言うなれば……。

「けほっ……よく言うぜ。素っ裸で目え回してたクセに」

やっと喋れるまでに回復したヤマトが、イヤミたっぷりの口調で返した。

天使の防御能力も自分の身体以外の部分……身に付ける服にまでは及ばないようだ。スライムから助け出された時、彼女の服は全て溶け、一糸纏わぬ姿となっていた。スライムに絡みつかれた際に濛々と噴出していた白煙は、服が溶ける事によって立ち上った煙だ。現に彼女は今も素肌の上に毛布を羽織っているだけという、少々恥かしい格好を強いられている。

「し、仕方ないでしょ！？ 服はどうしようもないんだもん！ それに目を回してたんじゃないかって、あれは……！」

「はいはい、良いモン見せてくれてありがとうよ」

頬を染めて怒鳴るノエルをサラリと黙らせ、金髪の青年へと向き直るヤマト。

「ありがとな、マジで助かったぜ。俺はヤマト。悪いんだけど、もう一回アンタの名前聞かせてもらって良いか？」

さっきは耳をやられてて聞こえなかったんだ。そう言って苦笑するヤマトに、金髪の青年は快く頷いて口を開く。

「僕はサークス。さっきも言ったんだけど、礼には及ばないからね？」

サークスと名乗った金髪の青年はゆるやかに微笑み、右手を差し出した。ヤマトもこれに応え、二人は握手を交わす。

華奢な外見に反しサークスの掌は硬く力強かった。弛まぬ修練の痕跡が透し見える、鍛え上げられた冒険者の手だ。これまでに数え切れぬ程の経験を積み、修羅場を潜って来たのだろう。

目に見える経験値とも言える掌の前に、自分の両手を思い苦笑するヤマト。ノエルによって頻繁に癒される手のひらは、傷跡も少なく柔らかい。

多少は傷跡も残った方がベテランっぽくてカッコイイかもしれない。そんな事を考えていたヤマトに、サークスが続けて話しかけてきた。

「ヤマト君。もし、どうしても礼を言いたいというのであれば、相手は彼だ。だってキミたちを助けたのは僕じゃなくて、そっちの

」

サークスが視線で示した先。虫の声さえ聞こえぬ原生林の暗闇から、大きな人影が姿を現した。

身長は二メートル程。全身を真っ黒な体毛に覆われた、二本足で立つ狼。それが人影の正体だった。

彼は厚手の衣服を纏い、簡素な板金鎧を着けて、手には薪にするつもりだったのだろうか？ 乾いた枝を何本か持って、真っ直ぐな瞳でヤマトとノエルの二人をじっと見つめている。

「彼の名前は太郎丸。僕の仲間で、種族は見ての通り人狼だよ。この辺りじゃ珍しいよね？」

サークスの紹介を受け、小さく頭を下げる太郎丸。人狼と呼ばれる種族の頭部は犬と変わらない為、鼻先をくいと下げただけにも

見える。

「二人が気を失ってる間、彼には周辺の索敵を頼んでたんだ。人狼は聴覚や嗅覚がとても鋭いから……で、どうだった太郎丸？」

「問題無い」

短く答える太郎丸。無愛想とも感じられる彼の態度に、サークスが苦笑しながら補足する。

「気を悪くしないでくれ。太郎丸はいつもこうなんだ。必要な事以外、あまり喋らない。だから驚いたよ、キミたちを助ける時に出した大声には」

サークスに言われ、一時間ほど前に聞いた声を思い出すヤマト。スライムの腹にまで響いた、野太い声。その持ち主が太郎丸だったのだ。

少年、動くなよ！

スライムに飲まれかけていた時だ。そう叫び、森の中から飛び出して来た太郎丸。彼は一足飛びに間合いを詰め、居合い切りの要領で腰の曲刀を抜くと同時にスライムを叩き切っていた。

刃が閃く事、数回。その度に豆腐でも切り分けるかのように、スライムが細切れの立方体へと姿を変える。そしてそれら立方体が地面に落ちるよりも速く、太郎丸はヤマトと、彼が掴んで離さないノエルを、スライムの腹から引つ張り出した。

その時の様子を、溶けかかった瞼の隙間からヤマトは見ていた。スライムをバラバラに切り裂きながら、自分たちには傷一つ負わせない太刀筋の正確さ。二人の人間を軽々と引つ張り上げる強靱な肉体、そしてバランス感覚。どれもこれも人間離れしており、到底自分には真似出来ない離れ技だ。

そして更に……。

「太郎丸、どけっ！」

遅れること数秒。駆けつけたサークスが叫ぶ。

その声に素早く反応し、ヤマトとノエルを抱えたまま飛び退る太郎丸。

「おおおおッ！！」

サークスは抜き放った白銀の長剣を天に掲げ、雄叫びと共に力を込める。すぐさま剣は不思議な淡い光を帯び、刃からチリチリと電光を放ち始めた。ぎゅっと大気が押し固められて呼吸が重くなり、剣の輝きに光が集まるにつれてサークスの周囲から光が薄く、闇が濃くなっていく。

そして。

「魔物よ、塵芥に還れッ！ 奥義……滅空！！」

叫び、サークスが剣を横に薙ぐ。すると一拍を置いて、剣の軌跡から雷光を纏った衝撃波が扇状に解き放たれた。触れる物全てを粉々に砕き、灰燼に帰すサークスの秘技、光波・滅空刃。発生方向とは真逆に退避しているヤマトたちでさえ、全身を叩かれたかのような衝撃を感じる、それ程の威力だ。

小石を粉碎し、残り火を掻き消して爆音と共に広がる衝撃波。矢のような速度でスライムへ到達したそれは、既にバラバラとなっているスライムに触れる端から粉微塵に砕いて、消滅させて行く。スライムに再生の猶予も、逃げ出す暇さえも与える事無く、衝撃波の通り過ぎた所は綺麗さっぱり何も無い空間と化す。それこそが技名「滅空」の由来だ。

「まだまだっ！ 欠片も残しはしない！」

剣に力を溜め、連続して衝撃波を放つサークス。凄まじい破壊力の前に、あれほど大量に居たスライムが、見る間に殲滅されて行く。自分では、手も足も出なかった強敵が、いとも容易く。

助け出されたヤマトの胸を、例え様の無い無力感が甦る。ミノタウロスと戦った時に感じたのと同じ、無力感が。

「……マト？ ヤマト、どうしたの？ ほら、太郎丸さんにお礼くらい言いなさいよ」

ノエルに呼ばれ、我に帰るヤマト。どうやらボンヤリと考え込んでしまっていたようだ。

わかってるよ、うるさいな。ノエルにはそんな憎まれ口を返しておいて、太郎丸へと右手を差し出す。

「助かったぜ、ありがとうな」

「……」

握手こそ受けたものの、表情一つ変えずむっつりと黙ったままの太郎丸。だがヤマトには少しだけ、彼が優しげに目を細めたように見えたのだが……気のせいだっただろうか？

「さて、自己紹介も終わった所で夜も更けてきた。そろそろ寝る準備をしよう」

タイミングを見計らったサークスの提案に、異論を挟む者は誰一人として居なかった。

第五話：戦いの夜に（二）

冷たい夜風が頬を撫でる。

鎧の上から纏う防寒、耐熱効果のあるマント、通称サーコートには夜露が纏わり付き、身を擦る度に珠となって滑り落ちて行く。昼間は汗ばむほどの陽気だったのだが、この季節の山間部、昼夜の気温差は思いの他激しいようだ。

冷えた指先で小枝を掴むと、ヤマトは小さくなった焚き火を掻き混ぜて、暗い空を見上げた。夜明けまでは、まだ少し時間がありそうだ。

彼の側では毛布に包まったノエルが小さな寝息を立てている。その近く、木にもたれて剣を胸に目を閉じるのはサークスだ。

野営の際には交替で見張りを立てて睡眠を取るわけだが、今はヤマトが見張りの順番。深夜から夜明けにかけての、最も辛い時間帯の見張りである。

虫の声さえ聞こえない静かな夜。薪の爆ぜる音がやけに大きく感じられる。

「虫やら何やら、スライムが片っ端から食っちゃったからか？」

誰に問うでもなく、静けさへの疑問を口にするヤマト。その声に応えるのはノエルの安らかな寝息だけ……そう思っていた。

「いや……警戒し、身を潜めているだけだ」

背後から、押し殺した低い声が掛けられる。

驚いて振り返ると、そこに居たのは漆黒の毛並みを持つ人狼の姿、太郎丸だ。さっきまでは索敵に出ていたのだが、いつの間にか戻っていたらしい。

太郎丸は黙ってヤマトの隣に座ると、小さくなった焚き火へ乾いた枝を足した。索敵ついでに拾ってきたのだろう。

「お、サンキュ。これで朝まで大丈夫だな」

ヤマトの声に頷く太郎丸。彼が見張りをする順番はヤマトの一つ前……つまり既に見張り番を終えている。だが何故か彼はその後も眠ろうとせず、ヤマトの見張りに付き合っていた。

初対面の自分たちに、まだ警戒を解いていないのだろうか？ 太郎丸の横顔を盗み見て、そんな事を考えるヤマト。

まあ無理もない。清廉潔白でまかり通る天使のノエルはともかく、ヤマトはこの馬の骨ともわからない人間だ。出会って半日で気を許すなど、まともな神経を持つ冒険者であるなら考えられない。

だがヤマトはなんとなく、こつも考えていた。

太郎丸は案外、付き合いの良い奴なのかもしれない、と。これといった理由は無い。ただ、なんとなく、だ。

「なあ、アンタ達ってパーティー組んで長いのか？」

パチつと弾けた薪の音に後押しされ、ヤマトが沈黙を切り崩し声を掛ける。

パーティーとは、一緒に冒険をする仲間の事だ。今の状況であればヤマトはノエルと。太郎丸はサークスとパーティーを組んでいるという事になる。

「いや……三ヶ月程前からだ」

短く答える太郎丸。会話を嫌がっている風では無い。単に口下手なだけなのだろうか？

「そうなのか？ 案外短い付き合いなんだな。こなれた連携してたから、てつきり長いのかと思ったぜ」

「サークス殿に誘われてな。それまでは独りだ」

腰の曲刀を鞘から少しだけ抜き出し、刃の調子を確認しながら太郎丸は言葉を返す。

ほぼ全身の毛が真っ黒の彼だが、手と足の先端だけは手袋でもしているかのように真っ白だ。それが月と炎の光を反射して、やけに目立つ。

「お主は？」

「俺？ 俺はノエルと結構長いな……幼馴染だし、もう十年くらいかな？ 腐れ縁ってヤツか」

十年前……ノエルと二人で冒険者となった時は、共にド素人でありレベル1だった。近隣の野犬を追いついたのでさえ苦戦し、二人で逃げ帰る事さえあった程だ。

しかし次第にノエルが天使の能力を自在に操れるようになると、状況が変わる。

ほぼノーコストの治癒能力。無敵とも呼ばれる防御能力。汎用性の高い光を操る能力に加え、飛行能力、交渉に有利な美貌。更には神の道から外れた邪悪な存在に対する強力な攻撃能力。最後には世間一般の気高い天使というイメージが放つ、抜群のブランド力……それら全てが高く評価されたノエルがレベル20の認定を受けたのは、ヤマトがまだレベル2と3の間を行き来していた頃だった。

「俺もアンタくらい強けりやな。一人旅でもして一気にレベル上げすんだけど……」

「無理、なのか？」

「ああ。実力不足ってのもあるけど……俺が一人で依頼受けようと

すると、コイツがいつも勝手に付いて来るんだよ」

言いながら、ヤマトは隣で寝息を立てる天使の鼻を摘む。やがてノエルが顔をしかめ、うんうんと寝苦しそうに身悶えし始めると、彼はイタズラっぽく笑って手を放すのだ。

そして自嘲気味に笑って続ける。

「とか言っても、ノエルからしたら俺はスゲー頼りなく見えるんだろうな。だから援護してやらなきゃ、って感じで付いて来るんだろ……まあ十年冒険しててレベル4じゃ、そう思つのも無理無いよ」

普通の人間が冒険者として名乗りを挙げ、十年間ひたすら頑張った場合の平均レベルは10前後。一年に一つレベルが上がるという計算だ。そう考えればヤマトのレベルは平均の半分にも満たないという事になる。

「実際ノエルには、いつも助けられてばかりで……あゝあ、強くて頼れる男になりたいぜ」

自らの言葉を誤魔化すように、大きく伸びをしたヤマト。

すると、堪えきれなかったのだろ。太郎丸が小さく吹き出した……笑っているのだ。

「な、なんだよ？ 笑う事無いだろ？」

「ふふ……いやなに、すまぬ。ヤマトとあったか……お主、ノエル殿から『そんなに卑屈になるな』と言われたりせぬか？」

「え！？ なんで……？」

驚きの声を上げるヤマト。初対面の相手に普段の言動を見抜かれた動揺が、大っぴらに表へ出てしまう。

そんな素直な反応を返すヤマトへ優しげに目を細め、太郎丸はゆつくりと立ち上がって言った。

「ヤマトよ、自信を持って」

大きな声では無い。間近の者にしか聞こえないような、小さな声だ。だが太郎丸の言葉はやけに鮮明な音となりヤマトの耳へ届いていた。

「為したい事に実力が追い付かぬ、もどかしさはわかる。それ故に落ち込む気持ちもな……だが考えてみるが良い。本気で頼りないと思う男の側に十年近くも身を寄せる、そんな馬鹿者は居るまい」

座ったまま、漆黒の人影を見上げるヤマト。無口だと評された人狼の言葉は、聞き流す事の出来ない重みでもって心を満たす。

「ノエル殿は、お主と一緒に居る事を望んでいるのだ。他の誰でも無い、お主だからこそ共に歩もうとしている」

太郎丸の言葉に、ヤマトは驚きが隠せない。

冗談であれ社交辞令であれ、そんな事を言われたのは、これが初めてだった。

幼馴染という立場を利用して、希少な天使を占有する雑魚冒険者。お人好しのノエルが断れないのを良い事に、つまらない冒険へと連れ出しては天使の恩恵を受ける恥知らず。それが一般的なヤマトの評価だ。

ノエルの実力であれば、もっと大きな依頼……例えば国家の存亡に関わるような冒険へと旅立ち、仲間と共に喝采を浴びるような活躍する事もできるだろう。それが世の為であり、ひいては彼女の為だ。だがヤマトが無理矢理連れて行くものだから、それが出来ない

……二人を知る者の大半は、このように考えている。

しかし太郎丸の意見は違っていた。ノエルは自ら望み、ヤマトの側に居ると彼は言う。

「お主は自分で思うよりも遥かにノエル殿から頼られ、信頼されているのだ。それを自覚し、胸を張るがいい」

「ははっ、何を言い出すかと思っただけ……気休めのつもりか？ タチの悪い冗談にしか聞こえないぜ」

苦笑するヤマト。そして思う。

初対面のお前に、俺たちの何がわかるんだよ。証拠も何も無く、知った風なクチ聞いてんじゃねえよ！ と。
だが……。

「けど……あながと。ちょっとだけ、報われたかも……しれねえ」

ヤマトは俯き、呟く。

「俺、もっと……」

語尾が掠れていたのは、朝靄が喉に入り込んだ為だろう。落ちた雫も朝靄が生んだ物に違いない。

太郎丸は少年に目を向ける事無く、東の空をただ真っ直ぐに見やる。

気が付けば空は白み、朝日が四人の冒険者を照らし始めていた。

第六話：新しい風

酒と油の匂いが混ぜこぜとなった店内。朝食を取ろうと集まった人々を、波間を泳ぐように掻き分け、小柄な少年が壁際の席を目指す。

「ヤマト、こっちこっち！」

人込みから、ぴよこんと頭一つ抜け出して手を振る天使の少女ノエル。地面から少しだけ浮び上がり目印となっているのだ。ゆつくりと浮かぶ程度であれば背中中の翼を羽ばたかせる必要は無く、人々の中にあっても邪魔になる事は少ない。

「お待たせ！ いやあ、今日も込んでるなあ」

ノエルのもとへと辿り着いたヤマトが、トレイに載せたミルクとハムサンドをテーブルいっぱいに広げる。数量は四人分……ヤマトとノエル、そしてサークスと太郎丸の分だ。

「なんだか悪いね、朝食をねだる様な真似をしちゃって……」

ヤマトの向かいに座るサークスが遠慮がちに言った。だが、そんな彼の言葉をノエルはすぐさま否定する。

「なに言ってるんですか！ あれだけお世話になったんですから、このくらい当たり前ですよ！」

「そういつこった。さ、安物だけど遠慮なく食ってくれ」

朝食を並べ終えたヤマトも言って、食事を促す。

そういう事なら……と、サークスと太郎丸の二人はパンに手を伸ばし、賑やかな喧騒に包まれた、和やかな食事が始まった。

ここはヤマトとノエルが拠点を置く街の宿屋兼食堂「ほろ酔い亭」。
一階が食堂となっており、二階は主に冒険者が間借りする宿となっている。その為、ほろ酔い亭に集まる人々の大半を冒険者が占めていた。ヤマトたち二人も例に漏れず、それぞれ二階に部屋を借りて自室としている。

スライム退治の依頼を終えたヤマトとノエルは、サークスたち二人と共に本拠地であるこの街へと戻り、仮宿を探す二人にせめてもの恩返しと、朝食をご馳走する事にしたのだ。

「これは……凄く美味しいね。陳腐な表現だけど生地が柔らかくて、こっ……もちもちしている。それにこのドレッシングも絶品だよ」
「ですよね！？ 私もお気に入りなんです」

ハムサンドを頬張り、サークスが絶賛の声を上げる。焼いたパンにハムとチーズ、刻んだ野菜を挟んだだけのシンプルな料理ではあったが、シャクシャクと歯ざわりの良い野菜と、ハムの塩気。あらゆる要素が互いを引き立てあって絶妙の味わいを醸し出している。一言も喋らずパンに齧り付く太郎丸も、いつの間にかやら二個目を平らげようとしていた。

「スライム退治の報酬も入ったし、二人とも遠慮するなよな？ どうせ、これくらいしか驕れねえし」
「そうかい？ じゃあ遠慮なく……」

サークスも二つ目のパンを手にとって微笑む。

焼きたてのパンは香ばしい上に表面はサクサクで中は柔らかく、固い干し肉に慣れた口にはこの上ない食感だ。しかも貧乏な冒険者

でもたらふく食べられる程に安いのだから、文句のつけようが無い。

「あ、そういえば……」

パンを千切って口に運んでいたノエルが、思い出したようにサークスたちへと話を振った。

「お二人とも、凄く高名な冒険者だったんですね。すみません、私ったら全然知らなくて……」

「そうそう、厨房のオッサンも言ってたな。確かアンタの二つ名……白銀のサークス、だろ？ その歳で二つ名って凄いよな、びっくりしたぜ！」

ヤマトたちに言われ、サークスがはにかんだ笑顔を見せる。

たまたま、幸運が続いて名前だけが売れたんだ。そう言った白銀のサークスだが、聞けばレベルは32と言う。偶然や幸運だけで辿り着けるレベルでは無い。

人間の限界レベルが50と言われている現在、世界でも有数の使い手であろうと思われる。

そして太郎丸もまた確かな使い手だった。レベルは17。サークスとは比べるべくも無いレベルだが、もともと冒険者として活動している人狼が少ない為、過小評価されているくらいがある。事実、スライムを寸断した剣閃はレベル10中程では不可能な鋭さを持っていた。

「街に帰ってから、やけに見られてんなあとは思ってたけど、みんなアンタたちを見てたんだな」

「悪いねヤマト君、余計な気を使わせちゃって。この辺りには殆ど来た事無かったから平気だと思ったんだけど……」

太郎丸と合わせて白黒のコンビだから良く目立つんだよ、と言葉を飲み込んだヤマト。太郎丸の黒は毛色だから仕方ないとして、サークスの白銀鎧は、ちょっと……自分の趣味じゃない。白銀には魔を退ける効果があると聞くが、流石に銀ピカの鎧は派手すぎやしないだろうか？ まあ一定以上の実力があれば、多少目立つくらいの方が都合が良いのかもしれないが……。

「……サークス殿」

ヤマトの思考を断ち切るように、食事を終えた太郎丸がボソリと何事かを囁いた。

そういえば、太郎丸と二人で話したあの夜以降、流暢に喋る彼の姿を一度も見えていない。ヤマトが見聞きしたのは全て、夢か幻だったのでは無いかとさえ思える。

「ああ、そうだね。例の件、二人に相談してみよう……ちょっと良いかな？」

断りを入れ、サークスが傍らのザックから一枚の羊皮紙を取り出しテーブルに広げた。冒険者をしている者であれば、頻繁に目にするその紙は……。

「仕事の依頼書……か？」

ヤマトの声に頷くサークス。彼は丸まった羊皮紙の隅にジョッキを置いて重石代わりにし「とりあえず目を通してくれないか」と促した。どれどれ、と興味深そうにヤマトとノエルの二人は依頼書を覗き込む。

そこに書かれていた内容を簡単に言ってしまうえば、良くあるお使用の類だった。ちよつと遠くにある、ちよつと珍しい物を取ってき

て欲しいという、時間こそ掛かるものの危険も少なく比較的簡単な仕事依頼だ。

「ちょっと前に見つけてキープさせて貰ってたんだけど……うっかりしててね」

サークスが羊皮紙の上に指差す先。そこには「推奨レベル：20以下」と書かれている。

「良い仕事だとは思っただけど、僕と太郎丸だと平均レベルが20を越えてしまつて、請けられないんだ」

「ああ、それで……」

冒険者への依頼に推奨レベルが書かれているのには、幾つかの理由がある。

一つは危険を避ける為。低レベルの冒険者が誤つて、手に余る仕事を請けてしまわないようにするのが目的だ。

そして二つ目は、強力な冒険者が美味しい仕事を全部持つて行つてしまわないようにする為。簡単に実入りの良い仕事を初心者にも残し後進を育てようと、冒険者組合が考え出した苦肉の策なのだ。

「私たち四人がパーティーを組めば、平均はえつと……」

「18ちょい、か。イケそうだな」

意外にも早い暗算でヤマトが答えた。高レベル認定を受けている三人を前に、自分だけがぶつちぎりて低レベルである事が気にはなつたが……。

『自信を持つのだ。何も恥じる事は無い』

太郎丸の言葉が頭を過ぎり、落ち込みそうになる気持ちを支えてくれる。

「どうする、ヤマト？」

小首を傾げて問いかけるノエル。だが問うとは言っても半ばポーズのみで、二人の答えは殆ど決まっている。

「なあサークス。アンタたちさえ良ければ、この仕事俺たちも……」

ヤマトが最後まで喋るより早く、サークスの頬が緩む。そして差し出される右手。

「決まりだね。よろしく！」

「ああ、こっちこそ」

男二人がテーブルを挟んで握手を交わし、こうしてレベルのバラストが酷い四人パーティーが誕生した。

第七話：幻の琥珀色（一）

渋柿の長持ち。呪うに死なず。雑草はたちまち茂る……そんな言葉たちがある。

悪い物、憎い何かに限って世に出て威勢を振るう。そんな意味の言葉だ。憎まれっ子世に憚る、とも言っただろう。

サークスと太郎丸。二人の厚意を受け、一緒に冒険へと旅立つてから既に一週間が過ぎた。だがノエルは未だに、依頼人の事を思い出すと冒頭の言葉が頭に浮かんでしまう。

「おい、ノエル」

隣を歩いていたヤマトが、自分の眉根辺りをツンツンと突いて知らせる。また、しかめっ面になっているぞ……そう言っているのだ。いけない、いけない。天使は笑顔が命！

頷き返して、ノエルは無理に口角を上げて笑顔を作る。あまり良い笑顔とは言えないだろうが、難しい顔をしているよりは断然マシだろう。

「はは……まあ確かに、ノエルさんがそんな顔をする気持ち、僕もわかるよ」

先頭に行くサークスが軽く振り返って苦笑混じりに言うと、隣で太郎丸が頷いて見せる。

彼らは今、二列縦隊で木々の合間を縫うように続く小道を進んでいた。森の奥深く、依頼人ご所望の品が取れる集落を目指しての旅路だ。

「すいません、せっかく誘って下さったのに。お仕事が嫌というわ

けでは無いんですけど……納得が行かないというか、なんというか……わぷっ!？」

顔面に蜘蛛の巣を受けて、ノエルの言葉が途切れる。

これでもう何度目だろう？ 翼を広げ、低空をふわふわ浮いて移動するものだから、少し高い位置に張られている蜘蛛の巣に片っ端から引っかかってしまう。誰も行き来しない高さであるから、巣が除去されていないのだ。

「うっっ……もうっ! どうしてこう……あぶっ!？」

蜘蛛の糸を取る事に集中するあまり、また新たな巣に激突するノエル。

「もうお前、普通に歩けよ……」

「むう、飛んでる方が楽なのに」

ヤマトの呆れ声に、ノエルは少し不満そうに地面へと降り立つ。と同時に……。

「ひやあっ!？」

湿った苔に足をすくわれ、尻餅をついてしまった。

手はドロドロ。スカートと下着も、苔の湿気を吸い取ってぐっしより。肌に冷たい感触が伝わって来る。

こんな事なら軽装のサンダルではなく、しっかりとした靴を買ってくれば良かった……そう思ったが、後悔先に立たず。不快指数がぐぐつと上昇する。

「ほらノエル、掴まれよ。んな不機嫌そうな顔して……あれもこれ

も、全部依頼人が悪いんだ！　ってかあ？」

「そんな事……」

からかいながら手を差し伸べるヤマトに、そんな事は無い！　と反論しかけたノエルだったが……。

「そんな事……あるっ！」

不満気な表情を露わにし、認めたのだった。

時は遡り、一週間前。

サークスと太郎丸に連れられ、今回の仕事を依頼した人の所へと赴いた時だ。

目の前に聳えるのは、城壁と見紛うばかりの巨大な門。見渡す限りの広大な庭。そして王侯貴族の宮殿を思わせる規模の、煌びやかな邸宅。そのどれもが隅々まで管理が行き届き、ゴミはおろか落ち葉一つ、チリーつ落ちていない。

超お金持ちの趣味を地で行く、贅の限りを尽くした住まいの主。彼こそが今回の依頼人、エフティ・ノーウェイその人だった。

「お前たちが、名乗りを挙げた冒険者か？」

謁見の間を思わせる広い室内。一段高い場所で豪華な椅子に腰掛けた小太りの中年男性が、両脇に半裸の美女をはべらせて問い掛けしてきた。

その問いに肯定であると返し、礼法に則って頭を垂れるサークス。太郎丸は半歩後ろで顔色一つ変えずに立っている。だがヤマトは……。

「ぐはっ……ヒールだ、ヒールくれノエル……」

大人っぽい美女の露わな姿態を前に、鼻血を流して最後尾でしゃがみ込んでいた。

「何してるのよ、もうっ」

慌ててハンカチを取り出し、捻ってヤマトの鼻に詰め込む。

斜に構えてはいるが、基本的に真面目なヤマト。女性に免疫が無いのはわかるが、ちょっと色っぽい人が居たくらいで鼻血を出さなくとも良いのに……。

翼を広げ、少年の首の後ろ側をトントンしながら癒しの力を使っている、件の半裸美女たちがこちらを見て微笑んでいるのが見えた。

はずかしいなあ、もう……。動揺など微塵も見せず、今も依頼人と交渉の最中にあるサークスや太郎丸を、ヤマトも少しは見習って欲しい。

赤面して、俯くノエル。もうちょっと格好良くキメられないものか？　そうすれば私だって堂々と……。

「何をゴチャゴチャとやっている？」

ノーウェイがノエルとヤマトに目を止めた。珍しい物でも見るようにクリクリと瞳を動かして、興味津々といった様子だ。

まあ確かに、女の裸くらいで鼻血を出す者が彼と接見するなど珍しい事なのだろう。

「なんだお前、女の裸が珍しいか？　この女が欲しいのか？」

妙に嬉しそうなノーウェイ。美女を立ち上がらせてヤマトに見せつけ、動揺する彼の様子を楽しんでいるのだ。

趣味の悪い事を……と内心で思うノエルだが、辛うじて顔には出さない。不快感を露わにしておいては、パーティーの代表として振舞っているサークスに迷惑が掛かってしまう。
だが……。

「こんな物で良ければ、報酬代わりにくれてやるぞ」

そう言うと、ノーウェイは美女を蹴り飛ばした。突然の事に対応できず、無様によるめき、段上から滑り落ちて倒れる美女。剥き出しの素肌に、薄っすらと血が滲む。

「それには、既に飽いた。だが奴隷商にでも持ってゆけば、それなりに値が張るだろう」

慌てて駆け寄ったヤマトたち四人へ、見下した視線を投げ掛けるノーウェイ。

「こんな物？ 飽きた？」

ノーウェイが発する言葉に、ノエルの憤りは限界を超えた。怒りが言葉となって口から溢れかけた……その時だ。

「よっしゃあ！ んじゃあこの人、俺が貰った！ 予約した！！」

倒れた美女とノーウェイの間に立ち、ヤマトが大声で叫んだ。

「売値と報酬を差し引いて、残りは銀貨でくれ！ おいアンタ、後でやっぱり女を返せとか言うなよ？ 俺が予約したんだからな！」

有無を言わさぬ強い口調に漲る気迫。ほんの少し前まで鼻血を流していた少年と同一人物とは思えない。

そうして自身が注目を集める傍ら、そっと仲間たちへと目配せを

送る。その意味を即座に察し、倒れた美女へ治療を施すノエル。そんな彼女へ、勝手な事をするな……と言いかけたのだろう。段上にて口を半開きにした状態のノーウェイが、サークスと太郎丸の気迫に圧倒されて言葉を吐けず、酸欠になった金魚のように口をパクパクとさせている。

「んで？ 俺たちに何か取ってきて欲しいんだろ？ ちゃちゃっに行ってくるから、言ってくれ」

「う……うむ。では……」

ヤマトに促されて金魚状態から脱し、ノーウェイが召使いへと指示を出す。

すぐさま駆けて来た召使いから、依頼の詳細が書かれた羊皮紙と地図を奪うようにして受け取るヤマト。

「じゃ、行ってくるけど……その女は俺の報酬なんだから大事にしとけよ！ 傷物になってたら違約金貰うかな！」

「う……わ、わかった」

ヤマトに気圧されて冷や汗を流すノーウェイの様子に、すっきりと溜飲を下すノエル。天使としてはどうなのかと自分でも思ったが、感情はどうしようもない。ざまあみろ、だ。

こうして、脅迫じみた捨て台詞を残し、ヤマトたちは今回の冒険へと旅立ったのだった。

そして時は戻り、くねくねと続く山道を行く四人。

「……確かに最低の依頼人だったけど、金払いは良いつて話だからね。ちゃんと仕事さえこなせば全部丸くおさまるよ」

「ま、そうなる事を期待するしか無えな」

どこか楽観的に話し合うサークス、そしてヤマト。二人の間には、とにかく仕事をキツチリとこなして、話はそれからだと達観した雰囲気がある。

しかしノエルの気分は晴れない。

あの後、ノエルは誰にも内緒で、屋敷の使用人たちにノーウェイについての話を聞いてみた。

最初は警戒していたのだろう。誰も彼も口は固く、主人であるノーウェイを多く語る者は居なかった。しかし天使であるノエルにだけはと、口々に主人の悪行を吐露し始めたのだ。

使用人たちへの不当な労働環境に始まり、後ろ暗い者たちとの繋がり、多岐に渡る違法な取引。それら全て、いつそ清々しい程に「金の為なら何でもやる」と宣言するかのような所業の数々。

とはいえ、使用人たちの証言を全て信用してしまえる程、ノエルもお人好しでは無い。彼女は穢れ無き天使であるが、同時にシビアナ冒険者でもあるのだ。しかし疑いの眼差しで使用人たちを見渡してみても、ノーウェイが悪党であるという結論だけは同じだった。

彼ら使用人たちは、主人を犯罪者だと主張するリスクを犯してなお、口を開いているのだ。

バレればタダでは済まない事を承知の上で、この天使なら……ノエルならば状況を打開してくれるかもしれないと一縷の望みを掛けて。

「……はふう」

「なに溜息ついてんだよノエル？ ほら、もう着くぞ」

ヤマトに言われて視線を上げれば、木々の間から小さな集落が見え隠れし始めていた。

第八話：幻の琥珀色（二）

半分壊れた窓から、湿った空気と共に朝靄が進入してくる。

そんな中、ヤマトたち三人の男は長椅子に腰掛けて、出発の準備に余念が無い。

剣を鞘から抜いて具合を確かめ、鎧のベルトを締め直している。

素早く慣れた手付きでありながら、慎重かつ丁寧なチェックだ。

ここは山中にある人口五百にも満たない集落、その隅にある今は使われていない建物の中。持ち主である村長の許可を得て、冒険の拠点となる仮宿として使っているのだ。

慌しい朝。

彼らが身支度を整える間、鎧を身に着ける必要も無く武器も持たないノエルは、自分の準備を終えてすっかり手持ち無沙汰となっていた。

なんとなくポーチの蓋を開け閉めしていると、丸まった真新しい羊皮紙が目止まる。今回の依頼について書かれている依頼書だ。

「世にも珍しいコーヒーねえ……」

依頼書を広げ、呆れた、と言いたげな表情でノエルが呟く。

小人閑居して不善をなす……とまでは言わないが、お金持ちが暇を持て余した場合も、似たような事になるらしい。

今回、ノーウェイから取って来るようにと依頼を受けた品は、現地の言葉でコピ・ルアクと呼ばれる非常に珍しいコーヒー。生産量が少ない為、市場に出回る事は殆ど無い幻の逸品なのだという。

「たった一杯のコーヒーの為に冒険者を雇うだなんて……」

馬鹿じゃないの？ という言葉を辛うじて飲み込む。

美味しい物が食べたいだとか、特定の何かに入れ込む気持ちはわかる。だが、それにしたって時と場合によるだろうとノエルは思う。今回支払われる予定の報酬は、屋敷で見かけた使用人全員の食事、数か月分に匹敵するであろう大金だ。こんな事にお金を使う余裕があるのなら、もっと先にすべき事があるのでは無いだろうか？

まあ、その報酬を得ようと名乗りを挙げた自分たちに、ノーウェイを悪く言える義理が無い事はわかっているのだが……。

「ノエルさん？ 考え込むのも良いけど、油断だけはしちゃ駄目だよ」

サークスの声に、ノエルはハツとして頭を振る。

そう、油断は禁物だ。何故なら、自分たち以外にも多くの冒険者がこの依頼を受け、全員が失敗しているのだから。

「他の連中、どうして失敗したんだ？」

「さあ？ なんでも、目的のコーヒーを手に入れる事が出来なかった、としか聞いてないな」

話しながらヤマトとサークスが立ち上がった。どうやら準備が終わったようだ。太郎丸も立ち上がり、軽く頷いて準備完了を告げる。

「じゃ、そろそろ行こう。暗くならない内に収穫したいからね」

サークスがそう言うのを待っていたのだろうか？

けたたましい音と共に、入り口の扉が勢い良く開かれる。咄嗟に身構えるヤマトたち。だが……。

「もう、準備良いんでシヨ？ サツサと行くよ！」

入り口に立っていたのは、日に焼けた肌が健康的な、齡十にも満たない小さな少女。コーヒー収穫のガイドとして雇った、この集落に住むスミという娘だ。

乱雑に頭のとっぺんでまとめられた、落ち着いた赤色の髪。穴を開けた布に頭を通し、腰の部分を紐で縛っただけの簡単な服装。交易用として広まっている標準語の発音も、少々怪しい所がある。

あまり豊かでは無いこの集落を象徴するような少女だった。

「なにシてるの？ モタモタしてると、日が暮れちゃうよ！」

「何を言っただか、このチビは……まだ太陽は昇ったばかりだつての。ほれ、見てみるよ……」
「……」
「お前の身長じゃ見えねえか」

出発を急かすスミを、ヤマトがからかう。彼にしてみれば、軽口を叩いた程度の認識だったのだろうが……。

「うるさい、糞チビ！ 糞シて寝てろ……！」

「あイテッ！ こ、このやろ……！」

何気ない台詞が、スミの逆鱗に触れたようだ。ヤマトの脛を思い切り蹴っ飛ばし、短い手足でチョコマカと駆けて行くスミ。俊敏な動きで木の陰に隠れると、ヤマトへ向けて舌を出し、アホだのバカだの、レベルの低い挑発を繰り返す。

「こんにやろ……待ちやがれ！」

そんなスミを追いかけて、駆け出すヤマト。

「あ、ちょっとヤマト！ もうっ、大人気ないんだから……」

「さあノエルさん、僕たちも行こう。幸い、二人の向った方向と目的地は同じだ」

微笑を湛えて出発を促すサークスと、溜息をつきながら採集用の袋を担ぐノエル。太郎丸も無言のまま、それに続く。

こうして冒険者一行とガイド一名は、希少なコーヒーを求めて森の奥深くへと向ったのだった。

第九話：幻の琥珀色（三）

ツヤツヤとした緑色の葉っぱは、大きな手のひらのような形。太い幹は高く伸び上がり、見上げれば首が痛くなる程。その所々に小さな赤黒い果実をつけた樹木が辺り一面、所狭しと繁っている。

「これだよ、コーヒーの木。間違い無い」

ヤマトの背中に乗ったガイドのスミが太鼓判を押し、色めき立つ冒険者たち。

森に入り込んで、約一時間。いともあっさり、彼らはコーヒーの木群生地へと辿り着いていた。

「どおだ糞チビ、見たかアタシの実力！」

「へえへえ、大したチビだよお前は……」

鼻息荒く、ヤマトの後頭部を叩くスミ。ヤマトの相槌は随分と適当ではあったのだが、どうやら褒められたと思ったのだろう。彼女は薄い胸を反らして顔を紅潮させている。

コーヒーの木を探しながら追いかけてこして互いに罵りあう内、スミはすっかりヤマトに懐いていた。追いかけてこで疲れたスミをヤマトが背負ってからは特にそれが顕著で、コーヒーの木のガイドを雇ったのか遊び相手として雇われたのか、わからなくなってしまう程だ。

「それじゃ、早速収穫しようか」

「俺とノエルが木から落すから、みんなは下で拾ってくれ」

スルスルと器用に木を登り、緑の葉生い茂る天辺付近で声をかけ

るヤマト。ノエルも小刀を手にフワリと舞い上がり、ふとスミに問いかける。

「ねえスミちゃん。コーヒー豆って種だから、実の外側は少しくらい傷ついても大丈夫なんだよね？」

「え……っと。あ、う……うん」

ノエルの何気ない問い掛けに、なにやら口ごもるスミ。ちょっと人見知りしてしまったのか、それとも知らない事を聞かれて困ったのか。

「ま、なるべく傷付けないようにすりゃ良いだろ」

「そうだね。それじゃ、落しまゝす！」

言うが早いか、腐葉土の積もった地面にコーヒーの実が次々と落下し始める。

誰も摂る者が居ないのか、たわわに実った果実の量は非常に多く、回収が追いつかない程だ。それらを一つ一つ丁寧に袋へと収めて行く。

傷付いた果実から濃厚なコーヒーの匂いが溢れて付近に漂い、目を閉じて深呼吸すれば、上等なカフェにでもいるような錯覚を覚える。ただ一人、極端に鼻の利く太郎丸だけはしきりに鼻を擦り、ゲフゲフと苦しそうにしていたが……。

ともかく、一時間も経った頃だろうか。

「ストップだ、ヤマト君。もう袋が一杯で持ちきれない」

サークスの声がする方へ注目してみれば、両手でやっと抱えられるようなサイズの、ずっしりと重そうな麻袋が四つ出来上がっていた。ここまで何のトラブルも無く、驚くほど順調な行程に、拍子抜

けの感さえある程だ。

「ふう、こんだけあれば十分だよね？」

「そうだな。んじゃあ、引き返すか」

ノエルと頷き合い、木から降り立ち額の汗を拭うヤマト……と、その視界の端に、一瞬動く物が映った。

それに最も早く反応したのは太郎丸だ。跳ねるような動きで体勢を整えると、腰の剣に手を掛け、重心を低く身構える。

「何かいるぞ！」

警告を発する太郎丸。

やつと事態に気付いたノエルが翼を広げて臨戦態勢を取り、スミが身を固くしてヤマトにしがみつく。サークスは少し遅れて、取り回しの良い短剣を抜き放った。

軟らかな土を蹴立て、木々の間を何か小さなモノが走り回る。かなり機敏な動き。一瞬だけ赤茶色の毛並みが見えたが、その程度でしか目に止まる瞬間が無い。

「気をつける、みんな！」

油断無く短剣を構え、サークスが考えを巡らせる。

木々が生い茂り、腐葉土に足を取られる森の中ではこちらが不利だ。一匹くらいならどうとでもなるだろうが、複数体が現れた場合、足手まといを守りながら戦うのは難しい。ここは一旦、撤退を……。そう考え、全員に伝えようと口を開きかけた時だった。

「みんな、チヨツと待って！」

その足手まといこと、スミが大声で叫んだ。

「静かに！ 大声を出せば狙われるぞ！」

「大丈夫、襲われたりしない！ 大丈夫、大丈夫だからっ！」

「そうは言っが、一体何が大丈夫だと言っんだ！？」

スミの声に多少の苛立ちを感じながら、サークスが身構えたまま
で尋ねる。彼女は大丈夫だとしきりに訴えているが、根拠の無い子
供の妄言に踊らされ、パーティーを危険に晒すわけには行かない。
警戒を維持し、このまま安全圏へ下がるのが良策だ。

しかし、そんな妄言に踊らされる者が居た。

「ああ？ スミ、大丈夫なのか？ なんだよ、ビビって損したぜ」

スミを庇い、最後尾へと下がっていたヤマトだ。彼はそそくさと
短剣を仕舞うと、足手まといと共にスタスタと前衛へと歩いて来る。

「待て、ヤマト君！ まだ安全は……」

「いいえサークスさん、どうも大丈夫みたいですよ？」

緊張の維持するサークスに、上空からゆっくりと降りてきたノエ
ルが優しい声を掛けた。

「ほら、あそこを見て下さい……可愛いですよ」

彼女の指差す方向……そこに居たのは、小さな猫だ。

赤茶色の毛並みと、シャープな身体つき。街で見かける野良猫よ
りは精悍な顔付きをしていたが、それでも確かに猫だ。尻尾は細く、
手足は頼りなげで、ふかふかの毛並み。どうやら、まだ子供のよう
だった。

「な！？ どうしてこんな所に、こんな小さい幼獣が……」

訝しむサークス。普通、人間が騒いでいるような所に野生の獣はやって来ない。来るのは交戦的な魔物くらいだと彼の経験は言っている。

そんなサークスの警戒心を感じ取っているのだろうか？ 猫は冒険者一行を警戒しながらジリジリと移動し、落ちていたコーヒーの果実を一つ啜えた。そして慌てて木の後ろへと逃げ込むと、シャリシャリと齧り始める。

「ははっ、どっかのチビみたいな動きだな。腹減ってんのか？ ほら、もう一個食えよ」

ヤマトがコーヒーの実を放り投げると、猫は少しだけ身体を強張らせたものの、すぐに実を啜えて木の陰に隠れ、今度はあぐあぐと何度も噛み潰して飲み下して行く。

「なんだよ、可愛いなコイツ。目付き悪いけど」

「そうだね……ほら、もっと食べる？」

すっかり和むヤマトとノエル。その後ろでは、サークスがようやく緊張を解いて、スミに話しかける。

「そうか、スミちゃんはこういった猫がコーヒーを食べに来る事を知っていたんだね？ それならそうと、最初に言ってくれれば……」

「う、うん……ゴメン」

叱られた為だろうか？ 気落ちしたような表情を見せるスミ。

「子供とはいえ、一応はガイドとして……」

「まあ良いでは無いかサークス殿。最初から危険が無いと知っていても、我々の警戒も緩もうというもの。結果的に、これで良かったのだ」

まだ何か言い足りないそうだったサークスを、太郎丸がやんわりと宥める。普段喋らない彼だけに、口を開いた時の存在感には無視できない物があった。サークスもそれを感じたのだろう。「それもそうだね」と引き下がり、大人気なかったとスミに詫びる。

「う、ううん。ゼンゼン大丈夫、気にしないで！ ほら、いつまでもネコと遊んでないで、行くよ糞チビ！」

「糞とかチビとか言うんじゃないやねえよ！」

明るい笑顔を取り戻したスミが走り出し、大きな麻袋を担いだヤマトが追う。

そんな二人を見送りながら、ノエルは感じていた。

漠然とした違和感と、奇妙な不安を。

第十話：幻の琥珀色（四）

自らの容姿を引き立てる化粧も、やりすぎれば逆効果となるように、素晴らしい香気も時と場合によっては台無しになる。コーヒーの香りが、まさにそれだ。

「ぐっ……けふ、けふっ……」

「おい、大丈夫かよ太郎丸？」

室内にコーヒーの香りが充満している。

ここはヤマトたちが冒険の拠点として借りている、集落の隅に建つ小屋の中。

「少し休憩するか？」

「いや、それには及ば……けふっ、けふっ！」

四人の冒険者たちは採集してきたコーヒーの実を、飲料用コーヒーとする為の作業の真っ最中。全員が口元を布で覆つての単純作業。身を潰し、種を取り出し、炒る。ひたすら地道に手を動かし続けるだけの、簡単ではあるがちよつと面倒な作業だ。

しかし問題は作業の難易度では無い。煎られた種子より燻り立つ、濃厚なコーヒーの香りだ。

「けふ……けふんっ！ げふっ！！」

「やっぱり一旦休憩にしましょう？ 太郎丸さん、私と一緒に来て下さい。治療しますから」

「か、かたじけない……！」

ヨレヨレの太郎丸を連れて小屋の外に出る冒険者たち。山間を抜

けて吹き付ける、木々の香りを含んだ風が疲れた身体に心地良い。

「ふうっ……っ。楽勝かと思ったけど、結構キツいなあ」

口布を外し、深呼吸するヤマト。コーヒーは嫌いでは無いが、あまりに強烈な香りを長時間嗅いでいた物だから、少し頭が痛い。人間である自分がそれなのだから、凄まじく鼻が利くといわれる人狼の太郎丸には耐え難い苦痛だろう。

そう思いながら周囲を見渡せば、ノエルに連れられて木陰で休む太郎丸の姿が目に入った。

「太郎丸さん、ゆっくり深呼吸して、気を楽にして」

木の幹にもたれ掛り、ぐったりと座り込んだ太郎丸。その身体をノエルの翼が優しく包み込む。

淡い輝きを放つ純白の翼。その光が徐々に膨らみ、やがて太郎丸の全身も同様の光を放ち始める。

「どうですか？」

「む、これは中々……心地良い物だ」

ウツトリとした表情で呟く太郎丸。先程までしきりに出ていたクシャミとも咳ともつかない症状も治まり、苦しげだった呼吸も緩やかになっている。

「私の治癒、即効性は無いですけど、使えば無くなるというような物ではありませんから。いつでも、遠慮なく言って下さいね」

「……心得た」

普段は見る事の無い穏やかな表情で目を閉じ、優しい暖かさに身

を委ねる太郎丸。ノエルの放つ光は彼の、クシャミや咳以外の小さな切り傷や打撲の類も、全部まとめて治して行く。

そして数分が経ち、そろそろ太郎丸の体調も万全に戻った頃だ。

「ねえ天使のお姉ちゃん、ちよつとイイ？」

集落に戻るなり姿を消していたスミがひょつこりと姿を現し、ノエルの服を引っ張った。傍らには杖を突く高齢の男性が、震える足でスミに寄り添うように立っている。ノエルの記憶が確かなら、確かこの男性は集落の代表者であったはずだ。他の者から長老と呼ばれているのを聞いた覚えがある。

「どうしたのスミちゃん？」

「あのね……」

問いかけたノエルに、スミはちよつとだけ迷い、俯いて遠慮がちに、小さな声で神の使いである天使へ「お願い」をした。

「おじいちゃんの足……診て欲しい」

スミの連れてきた高齢の男性は、ノエルの記憶通り集落の長老であると名乗り、あわせて自分は足が不自由であると明かした。元々は健常であつたのだが、何年か前に転び、足と腰を痛めてからは歩くのにも苦労しているという。

「この通り、歳も歳でな……用を足すにも小さな娘を煩わせる始末。あまりに心苦しい」

片手で杖を突き、逆の手ではスミの肩を借りる長老。若い頃は元気だったのだろう。彼の表情に落ちる影は深い。

ノエルは黙って彼の話の話を聞き続ける。

「ならば駄目で元々、幸いにも訪れた天使様にお頼みと思うて……。天使様にこのような老人が願い出るなど、厚かましい事は承知の上なのですが……」

「お願い、お姉ちゃん！ お金なら……」

そう言つて、懷から小さな革袋を取り出そうとするスミ……と、その幼い手に天使の手のひらが重ねられる。

「大丈夫だよ、そんなの。私たちを手伝ってくれたスミちゃんのお願いだもん」

微笑むノエルに、曇っていたスミの表情が一気に晴れ渡る。

「おお、天使様……！ なんとありがたい……っ！！」

「そんな、どうぞ顔を上げて下さい。私たちもスミちゃんには力を貸してもらったのです。何もお気になさらず」

しきりに頭を下げ、恐縮する長老。そんな彼を宥めながら、ノエルはスミに言った。

「じゃあスミちゃん、私からもお願いして良い？ あかね……」

慌てて駆け寄ったスミは、フンフンと鼻息荒くノエルの「お願い」に耳を傾ける。

そして。

「な……何事だい、あれは？」

近くの川で手を洗い、ついでに顔も洗って小屋へと戻ったサークスは、我が目を疑った。自分たちが借りている小屋の前に何十人も……いや、何百もの人が集まり、ごった返しているのだ。

小さな集落である。これだけの人数ともなれば、もしかや住民全員が集まっているのではないだろうか？

「サークス殿、戻られたか」

目を丸くするサークスに、木陰で休んでいた太郎丸が声を掛ける。驚きを隠しきれないサークスは太郎丸の調子伺いも程ほどに、目の前の有様について尋ねる。

「人だかりの、中央付近を見られよ」

そう言われ、サークスは木に取り付いて少し背伸びをし、人込みのど真ん中へと視線を走らせる。

そこでは純白の翼を大きく広げた天使が、目を閉じて微笑を湛え、周囲に光の雨を降らせていた。

「あれは……」

「ノエル殿だ。彼女が住民を癒している……無償で、片っ端からな」

馬鹿な！

サークスはその一言を、辛うじて飲み込んだ。

ありとあらゆる傷や疾患を癒すと噂される天使の他者治癒能力。その力は神の愛が如く無限であり、尽きる事は無いとされる。しかし天使とて生物である以上、能力を使えば疲れが溜まり、どこかで必ず限界が訪れるはずだ。無限などというのは言葉のあやだろう。とりあえず目的のコーヒーは手に入れたものの、冒険はまだ半ば。そう考えた時、無駄に力を使うのは愚の骨頂といえる。

「帰り道の事もある。程々で止めるように言わなければ」
「無駄だ」

険しい顔で歩き出そうとしたサークスを太郎丸が止める。

「無理はするなと伝えたのだが、大丈夫へっちゃらです……との事だ」

「そうか……」

その言葉に、サークスも諦めがついたのか木陰へ腰を下ろす。太郎丸が言って聞かなかったのだ。自分が言っても同じだろう。

天使の少女は、こんな山間の小さな集落で力を振るって、一体何がしたいのか。どうしても治療が必要な急患が居る様子も無いというのに。多少住民から喜ばれる事はあっても、ただそれだけ。お礼にと、小銭を握らされて終り……といった所が関の山だ。

「全く、困った事だ。異種族……特に天使や悪魔といった種族は、僕ら人間には理解し辛い部分があるね」

目の前の光景を呆然と見つめるサークス。光を纏い、人々を優しく癒すノエルの姿は、天使の名に相応しい神々しさであり、目を覆いたくなる程に気高く、美しい。

そして美しい天使の周囲には、小柄な少年、ヤマトの姿もあった。声を上げ、集まった人々を整理し、効率良く並ばせている。何やら「こちら最後尾」と書かれた手製の看板まで持っている様子だ。

「どうもヤマト君は、随分と手馴れているようだね」
「うむ。毎度の事なのだろうな」

感心したように、半ば呆れたように、サークスと太郎丸は呟く。

「まだしばらく時間が掛かりそうだ。少し早いが、食事にするかい？」

「……うむ」

二人は頷き合い、小屋の中へと姿を消した。

第十一話：幻の琥珀色（五）

冒険者たち四人が集う小屋にスミを伴った長老が姿を現したのは、ノエルの治療が一段落付き、各家々からは夕食の香りが漂い出す、そんな時間帯の事だった。

もうすっかり足の傷が癒えたらしい長老は、しっかりとした足取りで冒険者たちの下へと歩み寄ると、深々と頭を下げてこう言った。住民全員にお恵みを頂き、我ら皆、感謝して余りある。そこまでして頂きながら、何も返す物が無いどころか、我らは皆様に隠している事がある。せめてもの恩返しに、それを今からお伝えしたいと思う。

「その隠し事が、コレか……」

夕焼けに染まる山林に、冒険者たちとスミ、合わせて五人の若者はやって来た……いや、戻ってきた、というべきかもしれない。

ここは昼間にコーヒーの実を集めた森。まだ記憶に新しい香り漂う、見覚えのある場所だ。

「なるほど、この猫がね……道理で、コーヒーの実を食べるわけだよ」

そう呟くサークスの前には昼間見かけた猫が、無邪気な表情で佇んでいる。また食べ物でも貰えるとも思っているのだろうか？

警戒する様子は無く、手を近づけても指先に鼻を擦り付けてクンクンするくらいで、全く逃げようとしなない。

「希少なコーヒー、コピ・ルアク。コピとはコーヒーの事。そしてルアクとは猫の事……すなわち、猫のコーヒー」

長老は言った。コピ・ルアクとは、山猫の食べたコーヒーの果実から作られると。

コーヒーの果肉は消化され、腹には種だけが残る。その熟成された種を腹から取り出し、炒った物が希少なコーヒー豆として世間に伝わっているのだと。

「アタシたち、たまに猫の毛皮を取るから……その時にお腹から出た豆を使うの。でも、ほとんど取れないから……」

スミが小さな声で言った。産出資源に恵まれない山間の集落において、柔らかくしなやかな猫の毛皮は、貴重な資源。もしもコピ・ルアクの取り方が世に知れ渡り、幻のコーヒーを求めて件の猫が乱獲されるような事になれば、集落にとって大きな打撃だ。あつという間に猫は絶滅し、コピ・ルアクは本当の意味で幻となるだろう。

「なるほど、他の冒険者たちがコーヒーを手に入れられなかった理由がわかったよ。肝心の生産者に口を嚙まれちゃあ、どうしようも無い」

「……ごめんなさい」

しょんぼりと俯くスミ。その頭を、ノエルが軽く撫でる。

彼女としても、せつかく仲良くなれた人たちに隠し事をするのは辛い物があつたのだろう。撫でられた頭をノエルの服に押し付け、鼻を嗅っている。

「さて、それじゃあ……」

すらりと長剣を抜き放つサークス。そんな彼へ、少し疲れた表情のノエルが躊躇いがちに声を掛けた。

「やっぱり、殺すんですか？」

その声にスミが首をすくめ、猫は小首を傾げる。

「ああ、長老の好意を無駄にはできないし……僕たちは冒険者だ。いけ好かない相手ではあるが、依頼人にコーヒーを届けなくちゃならない」

表情を曇らせ、サークスが言う。子供に聞かせるような事では無いと配慮したのか、多少抑え目の声だ。

「この猫は可哀想だが……せめて苦しまないように、一撃で首を刎ねるよ。汚れ役は、僕がやる」

皆に離れるように言って、構えを取るサークス。

「あ……っ……」

何か言わなければ、と口を開くノエルだったが、言葉が詰まって出てこない。

確かに何の罪も無い猫を殺す事に強い抵抗はある。だが奇麗事だけで人は生きられない。清廉潔白を由とする天使ノエルではあるが、理想と現実の開きがある事くらい知っている。危険でシビアな世界に生きる冒険者であるなら、尚更だ。

ここで猫の腹を裂き、コピ・ルアクを得なければ依頼は失敗してしまうのだ。サークスの意見は一方で正しく、止めたくても、その為の言葉が見つからない。

これは魔物を排除するのと同じ事。必要な犠牲なのだと、目を閉じ耳を塞ぎ、心に蓋をしてやり過ぐす以外に無いのだろうか？

「では……ッ！」

サークスが剣を振りかぶった。スミが身体を固くして目を閉じ、ノエルは目を背ける。

夕焼けの赤い光を反射した銀の刃が、真っ赤な軌跡を残して猫の首を通り過ぎる。

だが、猫の首が飛ぶ事は無かった。かわりに響いたのは、甲高い金属音。

「……何のつもりだい？」

銀の刃は、鋼の刃に阻まれ猫の寸前で止まっていた。サークスと猫の間に身体を割り込ませ、ヤマトが剣を受け止めたのだ。

「あ、危ねえ……！ 俺ごと叩き斬られるトコだったぜ」

緊張の中に薄笑いを浮かべ、ヤマトが呟く。あと一瞬でも遅ければ、ヤマトと猫の首が、仲良く地面に転がっていた事だろう。

「どいてくれないか、ヤマト君。猫へ下手に恐怖を味あわせる方が、僕は酷い思う」

「ちよつと待ってくれ！ 少しで良いんだ、時間をくれ！ 俺に考えが……」

ヤマトの背中に庇われた猫を半泣きのスミが抱き上げたのを見て、サークスは溜息と共に剣を引いた。そして厳しい口調で言い放つ。

「考え？ それはもしや、猫に豆を吐かせる……なんてアイディアじゃないよね？ それくらいなら僕も考えたさ。だが猫の腹で熟成

が必要だという事を考えた場合、確実性に欠ける」

「い、いや。まあ確かに似たような事ではあるんだけど……」

言いながら、その場にへたり込むヤマト。剣を受けた衝撃によるものか、それとも恐怖による物か、彼の両手足には震えが来ている。

「ふう、ちょっと痺れが取れるまで待つてくれよ」

「……まあ良い。どちらにせよ……」

猫を抱くスミをちらりと見て、サークスは再度大きな溜息を吐く。

「この状態の猫を斬れる程、僕は鬼畜にはなれない。キミの話を聞こう」

ほつと息を吐く一同。

そしてヤマトは、ぽつぽつと自分の考えを話し始めた。

第十二話：幻の琥珀色（六）

あいも変わらず豪華な室内。

無駄に高い天井と、毛足の長い絨毯。壁には良くわからないが値の張りそうな絵画が掛けられ、その隣からは立派な角を持つ鹿の剥製が首を突き出している。そして、どこを見ても何を触っても、とにかく広く大きいのだ。

集落を後にして依頼人であるノーウェイの屋敷へと帰還したヤマトたち四人は、依頼を受けた時と同様、だだっ広い部屋へと通されていた。

「ほお！ この芳醇な香り……そしてこれまでに無い深みとキレ！ 程好い酸味と、僅かな苦味。クセは多少強いが、それがまた……」

傳く冒険者たちの正面、広い室内の上座にあたる段上では、コーヒークップを片手にノーウェイがどこで覚えたのかも知れない御託を長々と垂れ流していた。

「もう一杯だ！ コピ・ルアクを淹れよ！」

上機嫌でおかわりを要求するノーウェイ。召使いと思しき女性が慌てて黒色の液体をカップへ注ぎ足し、逃げるようにして立ち去る。

「うむ……素晴らしい味わいだ。良くやったぞ冒険者。流石は噂に名高い白銀のサークスと、天使ノエルよな！」

「お褒めに預かり、光栄です」

ゆっくり頭を下げるサークス、そしてノエル。美男美女の優雅な立ち振る舞いに、召使いたちの間から甘い溜息が漏れる。

「ケツ！ 何が素晴らしい味わい、だよ。どおせ味なんかわかりもしねえクセに」

どこからか聞こえてきた呟きに、美男美女は身体を固くして冷や汗を流す。二人の背後に控えるヤマトの声だった。

「ん？ 何か言ったか？」

「い、いいえ。何も……んっ！」

「んギヤ……！！」

言いながら、ノエルは踵でもって背後に立つ誰かの足を思い切り蹴飛ばした。ヤマトに良く似た、押し殺した悲鳴が聞こえたような気もしたが、きっと空耳だろう。

「まあ良い、大儀であった。報酬は使いの者を宿へ遣らす故、後で受け取るが良い」

コーヒーを啜って満足げに息を吐き、空いた手を、まるで野良犬でも追い払うかのようにヒラヒラとさせるノーウェイ。そして思い出したように続けた。

「そうそう、報酬の一部は中古の女で支払う約束であったな。余は、ちゃんと覚えておるぞ」

「……はい。では我々は、これにて失礼致します」

舌打ちをするヤマトを余所目に、顔色一つ変えずサークスが言った。腹立たしくはあるのだろうが、それを表に出す程子供では無いと言っ事だろう。

踵を返し、扉へと向う冒険者たち。

これで、この嫌な感じの依頼人ともこれっきりだ……全員がそう思った時だ。

「これ、時にお前たち。このコーヒーをどうやって手に入れた？」

唐突に、ノーウェイがそう聞いてきた。

「これまで何人もの冒険者を雇ったが、誰一人として持ち帰った者は居なかった。お前たちは、どうやってコピ・ルアクを手に入れた」

この何気ない質問に、ノエルは全身の毛穴から嫌な汗が噴出するを感じていた。

言えない……猫の体内から取り出したのです、とは。それを言うてしまえば森の猫は乱獲され、長老の不安が現実の物となってしまう。かといって、適当にはぐらかす事も難しいだろう。手に入れてきたコピ・ルアク其の物の信憑性を疑われかねない。そして本当にどうやって手に入れたのかは、絶対に……絶対に言えない。

横目でサークスの様子を窺えば、どうやら自分と同じ所で思考停止しているようだった。丹精な顔に、一筋の冷や汗が流れ落ちる。

「どうした、どうやって手に入れたのかと聞いているのだ。余の質問に……」

どう答えたら良い？ なんとはぐらかせば良い？ どうすればみんな幸せになる事が出来る？

答えの見えないまま、ノエルがとにかく何か喋って時間を稼ごうとした……その時だ。

「クソだよ」

広い室内にヤマトの声が響き渡った。

驚いてノエルが振り返れば、仁王立ちするヤマトと、その隣で頭を抱える太郎丸の姿が映る。

「くそ……とな？」

「ああ、そうだ。あのコーヒー、コピ・ルアクってのは現地の言葉で猫のコーヒーって意味でなあ……」

意地の悪い目付きで、ニヤニヤと薄笑いを浮かべるヤマト。幼馴染としての直感が、ノエルの警鐘を打ち鳴らす。

まずい、急いでヤマトの口を塞がなきゃ！

慌ててヤマトへと駆け寄るノエル。だがその行動は、ほんの僅かに遅かった。

「なんと、猫の糞から取れるんだよ！！ クソの中から取れるコーヒー豆を、向こうじゃコピ・ルアクって言うんモガモガ……！」

言っちゃった……！

言っちゃいけない、本当の事を。

「そ……それは、まことか？」

ノーウェイの問い掛けに冒険者たちは目を逸らし、誰も答えようとしなない。ただ口を塞がれたヤマトただ一人だけが、とても楽しい表情で段上を見つめている。

その沈黙こそが、コピ・ルアクの真実を雄弁に語っていた。

一週間前。

一匹の猫が命拾いをした、しばらく後。

集落付近、コーヒーの木が生い茂る原生林にて、ヤマトは見事に

コピ・ルアクを見つけていた……猫の糞の山から。

「ほらな！ 見ろよ、あると思ったんだ！ この種って結構固いだろう？ そう簡単に消化できないって事になったら、最後にはケツから出すしか無いもんな」

嬉しそうに語るヤマト。彼の眼前には、たくさんの糞と、それに塗れたコーヒー豆。どうやらこの付近の猫は、一箇所て用を足す習性があるようだ。

彼は猫のソレを解し、細かく選り分けて……いや、多くは語るまい。

「大したものだ、ヤマト君。キミのお手柄だ、僕が浅はかだったと認めざるを得ない」

「や、やったねヤマト……」

「げふつ、けふけふ……」

「……………」

そんなヤマトを、遠巻きに見つめるサークス、ノエル、太郎丸。そしてスミ。

「いやあ、それほどでも……木の上から見た時にさ、猫の糞してあった所から、なんか芽が出てたんだ。だからもしかして、とは思ってて……それはそれとして、お前らも少しは手伝ってくれよ。結構大変なんだよコレ……」

糞を選り分ける作業を続けながらヤマトがぼやく。だが……。

「キミの手柄を横取りするほど、僕は恥知らずな男じゃないつもりさ」

「私はその……天使ってキャラクター的に、ちょっと……」
「げふっ……けほっ！」

誰もが彼を遠巻きに見守り、一歩たりとも近寄ろうとしない。しかしそれも無理からぬ事だろう。雑食性である猫の糞は、多少距離を取っていてもなお、かなり匂う。

「何だよお前ら、冷たい連中だぜ。それでもパーティーか！ なあスミ、お前は手伝ってくれるんだろ？」

名を呼ばれたスミは、猫を抱いたままヤマトを正面に見据えて、悲しげにボソリと呟く。

「アンタ本当の意味で、糞チビになっちゃったね……」

「おいコラあ！ クソとか言うんじゃないやねえよチビ！ そもそも俺が居なきゃなあ……！」

と、こうしてヤマト一人の手によって幻のコーヒー豆コピ・ルアは穏便な方法によって集められ、冒険者たちは無事にノーウェイの元へと届ける事に成功したのだった。

そして現在。

「……つまり余は、猫の糞まみれの物を口にした、という事か？」
「一応、洗ってはあるけど……まあ、そういう事になるな」

ここまでバレては仕方ない。そう達観したノエルの束縛から解放されたヤマトは、この上なく嬉しそうにノーウェイと向き合う。タチの悪いイタズラのネタばらしを楽しむ、意地悪な男の子そのものといった風情だ。

「こう言っちゃなんだけど、苦勞して取ってきたんだぜ？ 戻って来る間、何回手を洗ってもニオイが消えねえし……ああ、ニオイってのはウ○コのニオイな」
「……！」

ヤマトが一言喋る度にノーウェイの顔色が、どんどん赤みを増して行く。カップを持つ手は震え、両脚も痙攣してガタガタと椅子を揺らす。その様はまるで、癇癪を起こして泣き喚く幼児のようだ。そして部屋の片隅からは、普段虐げられる立場の召使いたちが、怒りに震える主人の様子を心底楽しそうな表情で覗き見ている。

「こ……この痴れ者が！ 何故先に教えぬ！？ 知っておれば、そのような汚い物ツ！！」

「でもウマかっただろ？ ウ○コのダシが利いてて」

一瞬の静寂。それを破ったのは……。

「ぷふっ！」

笑いを堪えきれず、太郎丸が吹き出した声だった。

「ふっ、ふははははっ！」

「あはっ！ あはははは！」

「ゲラゲラゲラ……」

太郎丸につられて、至る所から次々に上がる笑い声。これまでの鬱憤を晴らすかのように、冒険者たちも屋敷の使用人たちも、全員が大声で笑い出す。

これほど楽しく、痛快な事があるだろうか？ 皆が心の中に抱え

る「ざまあみろ！」が、笑い声となって溢れ出したのだ。

腹を抱え、涙を流し、笑いすぎて咳き込む者もいる。それでもなお楽しげな笑い声は止む事を知らず、屋敷全体に響き渡る。

「うひひひひ……」

「あはは……あはつ、あはは……」

笑い声は絶え間無く続き、やがて、皆が笑い疲れた頃だった。

パリンっ！

頼りなく、切ない音が室内に響いた。

それがコーヒーカップの割れる音だとわかった時、笑い声が次第に小さく、少なくなっていく。

「よくも……余を謀り、コケに……ッ！」

音のした方向には、椅子から立ち上がり、冒険者たちを睨むノーウェイの姿があった。

激しい恥辱と怒りの為か、その顔は林檎のように真っ赤に染まり、今もなお赤みを増して行く……その色は本当に赤く……まさに真紅と呼ぶべき色だ。

「おい、アイツ……な、なんか……大丈夫なのか？」

動揺の混じる声で、ヤマトが呟く。

皆が見守る中、ノーウェイは頬も、唇も、耳の先も、目の中にまでも赤色が広がり、首や手も同色に染まって行く。そして林檎のようだった赤は深みを増し、血のような色へ。そして暗く錆び付いた鉄のような色に変わる。

「みんな……気をつけて！」

誰に言うでもなく、そう呟いた時。天使ノエルは感じていた。
悪魔の到来を。

第十三話：幻の琥珀色（七）（前書き）

残酷なシーンがございますので、苦手な方はご注意ください。

第十三話：幻の琥珀色（七）

高価な調度品が並ぶ広い室内。その奥まった一段高い場所に立つ男から、目に見えない力の波が断続的に放たれている。その波を受けた時、人はただ立っているだけで肌が粟立ち、脚が震える。耐え難い恐怖の為に。

「皆さん、逃げて下さい！ 今すぐにつ！！」

鋭く大きな声でノエルが叫んだ。我へと帰った使用人たちは、か細い悲鳴を上げながらアタフタとこの場を離れ始める。

恐怖を発散しているのは、屋敷の主人であり、冒険の依頼人でもあるノーウェイだ。しかし今となつては彼をノーウェイと呼んで良い物かどうか疑問が残る。人というカテゴリを、大きく逸脱しつつあるのだ。

顔から全身に広がった赤色は深みを増し、濁った血のような色に。そして彼の四肢にはブクブクと丸いブドウのような塊がいくつも飛び出し、内側から服を押し破つてどんどん増殖を続ける。更には胴体部分も革袋に水を注ぐかの如く肥え太って行き、垂れ下がる脂肪で目は塞がり、腹には何段もの肉ヒダが出来上がる。

「こいつは……悪魔憑きか！」

生き物が、地獄からの囁きに耳を傾け墮落した姿。それが悪魔憑きだ。

非常に強い欲望や欲求、恐怖といった感情を感じ取って悪魔はやってくる。そして彼の甘言に身を委ねた瞬間、身体も魂も、全て悪魔の物となってしまう。

「おいノエル！ 悪魔憑きになるのって、生きモンが死ぬ時くらいじゃねえのかよ！？」

震える手で短剣を抜き放ち、ヤマトが叫ぶ。

ちよっと前に彼が戦った牛の怪物ミノタウロスは、死の間際に悪魔憑きと化して猛威を振るった。死の恐怖と生への執着が、件の怪物を悪魔憑きとさせた原因だろう。

だが目の前に居るノーウェイは違うはずだ。

「多分、死ぬほど恥かしかった……この恥辱を味わうくらいなら、悪魔に魂を売った方がマシだと感じたのだろうね」

言いながら最前線へと踏み出し、サークスも剣を抜いて構える。

「憤死、という言葉もある程だ。屈辱だったのだろうな」

隣に並び立つ太郎丸。彼も臨戦態勢で、いつでも抜ける構えだ。

「つまりヤマトのせい……」

「俺かよ！？ いや、ちよっとからかったくらいで死ぬほどキレなくても良くないか？」

「冗談よ、ヤマト。きつとノーウェイさんは、ずっと前から目を付けられてたんだと思う……それに悪いのは誰でも無い、人の弱みに付け込む悪魔なんだから……！」

翼を広げて浮かび上がるノエル。彼女を守るかの如く男たちは陣形を組み、戦いの準備が整う。

「理由はどうあれ、生きとし生けるもの全ての敵である悪魔に、交渉の余地はありません！ 戦い、滅するのみですっ！」

ノエルの凜とした声が響く。それは神の使いであり悪魔と相反する存在、天使としての言葉であると同時に、この世界に生きる者全ての常識でもある。

甘い誘いでもって生き物を墮落させ、魂を奪おうと目論む悪魔たち。そのしもべとなった者を、野放しには出来ない。

「ギザマラ……許サヌぞ……コノ恥辱……」

しゃがれた声を上げて赤黒い身体をぶるりと震わせ、段上で一步を踏み出すノーウェイ。質量保存の法則を無視して膨れ上がった重量で床が砕け、片足がめり込んだ。

その瞬間、戦いの火蓋が切って落された。

「これ以上待つ道理も無い！ 先手を取らせてもらう！！」

言うが早いか、サークスと太郎丸が飛び出した。

段上のノーウェイだったモノ目掛けて突進して一気に間合いを詰め、至近距離で放つ必殺の一撃。

「食らえ、滅空ッ！！」

魔力迸る銀の剣が振り下ろされ、空間が歪む程の衝撃波が生み出される。巨大なスライムを塵へと帰した技だ。

ノーウェイを中心として、毛足の長い絨毯が激しく放射状に波打ち、余波を受けた椅子が砕け散り、床材が粉々になって宙に舞う。更には壁に大穴が開き、隣の部屋まで瓦礫と一緒にノーウェイを吹き飛ばす。

「ふっ！！」

壁を蹴り、空中の瓦礫さえも足場として、吹き飛ぶ最中のノーウェイへ追い付いた太郎丸が、裂帛の気迫と共に間髪入れず斬撃を叩き込む。

未だ滅空の威力が残る衝撃波の中心。舞い上がる粉塵のキャンパスに、物差して引いたような美しい直線が三本刻まれた。すり抜け様の、目にも止まらぬ剣閃だ。

「ぐガアッ！」

ノーウェイが獣のような呻き声を上げて仰け反り、瓦礫の中へと倒れこむ。一発で止めを刺すには至らなかったが、かなりの痛手を与えたようだ。ブドウのように膨れたイボが千切れ落ち、ダブダブの腹にも深い傷を負っている。そして、そこからは真っ黒な液体がドロドロと流れ出していた。

「このまま押し切る！」

「おおっ！！！」

サークスが再度、滅空を放つ為の集中に入る。その数秒という時間を、太郎丸の畳み掛けるような連続攻撃が稼ぎ出す。

幾重にも重ねられた剣閃。それら一つ一つは、悪魔憑きとなり高い防御力を得たノーウェイの致命傷とはならない。しかし確実に彼から体勢を立て直すチャンスを奪い、反撃の手を封じていた。

「よし、もう一発……ッ！ 避ける、太郎丸！！！」

サークスが剣を斜めに振り下ろし、爆風と共に二度目の衝撃波が放たれた。

体勢を崩したままのノーウェイに回避の術は無く、またも直撃。

周囲の瓦礫同様に肉は千切れ、身体の末端から順に粉々に粉碎されて塵になって行く。

だが……。

「ぶふっ……ブフはははっ！　コノ程度か、白銀のサークス！！」

鋼さえも塵と化す滅空の勢力範囲から、ノーウェイの笑い声が響く。彼は一連の攻撃を耐え切ったのだ。

身体の表面を削り取られてタールのような体液を垂れ流してはいたものの、重要器官にはダメージが無かったようだ。一度は千切れたブドウのような肉豆も黒い体液の中からみるみる再生し、元以上に身体全体を覆い尽くして行く。

「今の技が、切り札ナノダろう？　ブフハッ！　笑止千万！　多少痛い、恐れるに足り又う！！」

身体を揺らし、真っ黒な体液を飛び散らせて笑うノーウェイ。垂れ下がった瞼の下で、赤黒い眼が不気味な輝きを増す。

「今度八、コチラの番……だ！」

ボンッ！　と、ゴム鞠が弾むような音。気がつけば、ノーウェイは高々と飛び上がっていた。全身の肉豆をバネにして跳ねたのだ。そして天井にぶつかり、再度ゴム鞠のような音を響かせて反射。斜めに飛んで、壁にもぶつかって、更に反射。繰り返す度、速度が徐々に上がって行くのがわかる。

その体型からは想像し難い敏捷さと凄まじい速度。反射のたびに天井や壁が悲鳴をあげ、弱っている箇所には穴が穿たれた。

更に二度、三度。壁や柱を蹴って加速すると、遂に方向を定めて真っ直ぐにサークスへと迫る。

「マズは、貴様だ！」

「くっ！！　だが……甘いッ！」

高速で飛来するノーウェイに対し、サークスの対処は冷静だった。素早く身を屈めると、イボだらけの肉塊を両断すべく、その進路上へ垂直に剣を差し出す。しかし……。

「ぐあああッ！？」

サークスの剣が命中した直後、甲高い金属音と共にガリガリと岩肌を削るような音が響き、激しい火花が散った。悲痛な声はサークスの物。彼が握っていた銀の長剣は手を離れ、床の上を滑って行く。その刃は所々が欠けてボロボロになり、鋭利だった切っ先は削れて丸くなっている。

「どうやら、甘かったのは、オマエの方だったなサークス」

部屋の中央付近、床を大きく窪ませて停止したノーウェイが、嬉しそうにたるんだ頬肉を歪ませた。剣が命中したと思われる胴部には金属の擦れた跡は残るものの、傷とはなっていない。しかもその痕跡さえ時間と共に消えて行く。

悪魔との契約は、傲慢な男にゴムのような弾力性と金属並の強度を持つ身体。そして化物じみた再生能力を与えていた。

「噂に名高いオマエも……」

足下に滑り来た銀の剣。それに一瞥をくれて脚を乗せ、軽々と踏み割るノーウェイ。

「我がチカラの前には、無力！」

彼が力を誇示し悦に浸ると、ブクブクと泡立つようにして全身の肉豆が更に増えた。

最早四肢と呼べる部分と胴体部分の区別すら曖昧で、イボイボの付いた赤黒いボールに小さな突起として頭が乗っているような状態だ。

「お次ハ誰ヲ……」

声も濁り、元の肉声を留めていないノーウェイ。ゴボゴボと汚泥から湧き上がる気泡のような不快な声だ。

剣を失い、手を負傷した様子のサークスを戦力外と見極め、ノーウェイが獲物を求めて首を廻らせると……頭上に眩いばかりの光が見えた。見上げれば、赤黒い身体が漂白されるような純白の輝き。天使が放つ、光子の煌きだ。

「悪魔と取引をして安易な力を得た事こそが恥と知りなさい！」

ノエルが光を解き放つ。

気付いた時にはもう、ノーウェイの身体は光の中にあつた。

蛍のように漂う無数の白い輝きが、緩急をつけて彼の身体を貫き通す。

「グブお……！」

悪魔の肉を貫いた光は別の光とぶつかり、元来た方向へと戻る。その際にもう一度肉を貫き、更に別の光とぶつかって別方向へと走る。そしてまた肉を貫き……そんな事がノーウェイの周囲で、何千、何万回と繰り返される。

周囲から見てそれは、光の残像が紡ぎ出す細い糸によって、輝ける繭が生み出されて行くかのような光景だ。

「こ、これが天使のチカラ……なんて、美しい……！」

痛む手首を押さえながら、サークスが呟く。

強力かつ無慈悲な光の奔流は、神々しい輝きを放つ天使の姿と共に、青年の心に強烈な印象を刻み込んだ。

それは人がどれほど望んでも届かぬ高み。神の領域。

この瞬間、サークスの中で何かが変わった……そんな気がした。

第十四話：幻の琥珀色（八）（前書き）

残酷なシーンがございますので、苦手な方はご注意ください。

第十四話：幻の琥珀色（八）

床は碎けて瓦礫と化し、調度品は碎けて価値を失った。

ゴミ一つ落ちていなかった先程から一転。廃墟の如く変わり果てた室内。

埃の舞う部屋の中央付近で眩い光を放ち、音も無く、激しく渦巻く光子の群れ。その中心では悪魔に魂を売り渡した男が、神々の怒りによって容赦なく身体を焼かれている。

なんとも凄まじい威力。天使の御業に目を奪われたサークスと太郎丸の心に安堵が宿り、身体から緊張が抜け落ちる。

これで終わった。自分たちの勝ちだ。

「ダメです、二人とも油断しないで！」

しかし天使の少女ノエルは光を操りながら、未だ緊迫した声で言った。

「まだ……あと少し足りないっ！」

光が、次第に弱く、細くなつて行く。

そして光の繭から現れ出でたのは、赤黒い塊。燃え残った肉のような、醜悪なる肉塊だ。

「いや、ノエルさん。確かに完璧では無いかもしれないが、流石にこれでは……」

生きてはいないだろう。微動だにしない肉塊を前に、サークスがそう言ったのも無理は無い。

無数のイボによって倍近くにも膨れ上がっていたノーウェイの身

体は、その大きさを人並みにまで減じていた。そして、その身体自体も光によって貫き焼かれてクズ肉のようになり、時折り笛のような音を立てて褐色の肉汁が飛び出す以外、なんの反応も見せない。

「いいえ、まだです。悪魔はこうして人を欺き、油断を誘……ッ！
」

言葉を最後まで続ける事無く、突然ノエルの身体が勢い良く吹き飛ばされ、天井に打ち付けられた。

見れば焼け焦げた肉塊の中程から、真っ赤な色をした真新しい触手が勢い良く伸び、ノエルを押し上げている。

「チッ！ 馬鹿な人間と違って、手の内がバレてイル天使の相手は厄介ダナ」

肉塊の中から声が聞こえてきた。先程まで聞いていたノーウェイの声から雑音を取り払い、不快な要素のみを残した、ある意味で洗練された声。

そして声に続き、肉塊から腕が突き出される。触手と同じ真っ赤な肌、尖った爪。その手の持ち主は肉を無造作に掻き分け、引き裂いて、その姿を冒険者たちの前に現した。

「……ヤア。ハジメマシテ」

その姿は肌が赤い以外に、人の物と大差無いように思えた。

ノーウェイから贅肉を削ぎ落としてシャープに整え、少々爪を伸ばしたような姿。大きな身体というわけでもなく、小さすぎるという事も無い。人間のごく平均的な体型、平均的な顔付きに見える。

ただ特徴的なのは、ノエルを突き上げた長い触手……尻尾だった。腰の中程から腕の半分くらいの太さを持つ、グネグネと動く尻尾が

生えている。

「ソコのキミ……サツキは、凄く痛カッタヨ」

土煙が爆ぜた……と思った時、その赤いノーウェイは太郎丸の眼前に迫っていた。

「ぐほあッ!？」

腹部に衝撃。太郎丸の口から、鮮血と空気が押し出される。続けて下顎が蹴り上げられた。

目の前の景色がグルグルと回る……と思った時には、身体が空中で何回転もして床と壁に叩きつけられていた。

その時、太郎丸は何の痛みも感じていなかった。ただわかったのは、腹部に受けた一撃は背骨ごと身体を貫いて反対側に抜け、次の一撃でもって下顎と頸椎を砕かれただろう、という事だ。

剣を振るう間もなく倒されるとは、不覚の極み……だが、それを口にする事さえ叶わない。

「太郎丸さんっ!！」

天井に打ち付けられた格好のまま、ノエルが叫ぶ。

こんな事なら、あと少し……あと少しだけ光を集めて攻撃に移れば良かった!

後悔の念が、少女の胸を押し潰す。

普段とは違う連携。先手必勝を期すサークスと太郎丸の攻撃は激しく速く、この上無く強烈な物だったが……ノエルには早過ぎた。

悪魔を滅する聖なる光。それを集めるには時間がかかるのだ。

二人の攻撃が止み、ノーウェイが攻撃に転じて動きを止め、隙を見せた時がチャンスだと思った。しかし、光の収束が不十分だった。

もつと弱い相手であれば倒せていたかもしれない。だがノーウェイに取り付いた悪魔は思いの他強力で、彼の敵にはあと少し……時間にして四秒ほど足りなかった。

「このおっ！」

全力を振り絞って尻尾を振りほどき、太郎丸の元へ急ごうとするノエル。

「ソウはサセ無イ」

言葉通りの意図でもって、ノーウェイは尻尾の先を八つに割いてノエルの身体に絡ませた。そして手足の爪を床に付き立てて踏ん張ると、渾身の力でもって振り回し、所構わず叩き付け始める。

「きゃ……！」

「コレナラ、チカラを溜メル事、叶ワヌ。アノ獣が死ヌマデ、コウシテ遊ンでクレヨウ」

天使であるノエルは、神の加護によって悪魔の攻撃でダメージを受ける事は殆ど無い。だが掴んで振り回されては、光を集めて行使する天使の能力自体が使い辛い。集中が出来ないのだ。

しかもノーウェイの能力は先程までよりも更に上昇していた。人としての肉体や自我を失い、より純粋な悪魔に近付いた為だ。

早く、早く尻尾を引き千切り、太郎丸の元へ行かなければ。腹部に受けた傷は間違いなく致命傷だった。一刻も早く治療を行わなければ、彼の命はもう……！

「さ……サークスさん！ ポーションを、太郎丸さんにつ！」

全回復には及ばないだろうが、即効性のある回復薬であるポーションを与えれば、太郎丸生来のタフネスと相まって多少の延命措置くらいにはなるはずだ。振り回され、目を開ける事さえ困難な状況の中で、命の灯火を繋ぐとノエルは必死に叫ぶ。

「あ、ああ……」

弱々しい返事がサークスから返る。だが彼は動けなかった。

怖かったのだ。

自らの誇る必殺技。それを大きく上回る天使の攻撃。それらを持つてしても悪魔は倒れる事無く、逆に太郎丸を一瞬で打ち倒してしまった。

今の自分は完全に戦力外であり、相手にされていない。だがもしも、下手に動いて目立ったなら……次は自分の番かもしれない。その思いが、無意識下での恐怖が。サークスの足に釘を刺し、その場に繋ぎ止めてしまう。

「サークスさんっ!!」

「ククク、ヤハリな。臆病者メ」

「くっ……!!」

ノーウェイも、こうなる事を予測していたのだろう。それ故に太郎丸を先に打ち倒し、サークスを後回しにしたのだ。

焦るノエル。もう時間が無い。こうする内にも太郎丸の腹からは血が大量に流れ出し、心臓の鼓動が弱くなる。呼吸は……既に止まっている! 早く、なんとかしないと……!

「はい、そこまで!!」

唐突に、ノーウェイが体勢を崩した。踏ん張っていた手足が床か

ら離れた……というよりも、踏ん張っていた床が周囲から切り離されて、足場としての機能を失ったのだ。

この気を逃さず、渾身の力で尻尾を振り払うノエル。

「チツ！　コノ……！」

舌を打ちながらノーウェイが振り返り、尻尾の先端を見る……が、既にノエルは脱出済み。まんまと天使に逃げられてしまった。

一体何が起こった？

足下に微かな気配を感じて視線を落せば、いつの間に忍び寄ったのだろう？　短剣でもって足元の床を引っぺがすヤマトの姿が映った。

「あ、見つかった。よう、はじめまして……か？」

「雑魚が、味ナ真似を」

戦闘が始まるや否や姿を消していた一番の臆病者。この四人の中で最も弱い小僧であり、最もム力つく糞野郎。それがノーウェイのヤマトに対する認識だ。そんな雑魚が、今更何をしに来たというのか。

とりあえず蹴りの一発でも見舞ってやれ。それだけで脆弱な小僧の身体は真つ二つとなり、即死するだろう。

そう考え、ノーウェイが軸足に力を込めて蹴り脚を振りかぶった瞬間……多量の細かい砂が顔にぶつかり、視界を覆い尽くした。

「グッ、ブアッ！？」

凄まじい速さの蹴りが、砂煙を真つ二つに切り裂く。そこにヤマトの姿は無い。

「目潰シとは小癩ナ……！」

悪魔と化したノーウェイは、砂が少々目に入ろうと痛みは無い。だが視界が悪くなるのは必然だ。

コーヒーの件といい、今回の目つぶしといい。このヤマトとかいう小僧は要所要所で顔を出し、邪魔をする。取るに足らない雑魚でありながら、この上なくうっとおしく、腹立たしい。

「ソコかッ！」

「おっと！」

目の端に映った動く物体目掛け、鋭い爪を見舞おうとする。だが、またも何かがノーウェイの視界を覆い隠した。

今度は砂では無い。目の前に現れたのは、ヒラヒラと薄く大きな布……見覚えある、屋敷のカーテンだ。戦闘開始から姿を消していた間に、どこかの窓から拝借したのだろう。

苛立ちと共に爪で薙ぐと、小気味良い音を立てて横一文字に引き裂かれるカーテン。その隙間から見えた景色に、またもヤマトの姿は無い。それとほぼ同じタイミングで、横合いから同じようなカーテンが投げ掛けられ、再度ノーウェイの視界を奪う。

「フザケルな小僧ッ……！」

ノーウェイの苛立ちは頂点に達した。

両手と尻尾を使い、顔に纏わり付くうっとおしい布地を細切れに破いて捨てた。ようやく開けた視界。その正面に、表情を強張らせるヤマトの姿を捉える。

「悪魔をココまで愚弄シタのだ。小僧、覚悟は良いな！」

「く……」

これ見よがしに腕を構え、ヤマトに刺すような視線をぶつけるノ
ーウェイ。脆弱な肉体を引き裂かんと爪が鋭さを増し、骨ごと捻じ
切ってやろうと腕の筋肉がはちきれんばかりに膨らむ。

そして悪魔は、レベル4の少年に死を贈ろうと一步を踏み出す…
が、その場で足を絡ませて転んでしまった。

「な、何ッ!？」

「くっ……ぷははっ! 蹴躓いてんじゃねえよ、ばあか!」

ヤマトはそう言っただけで笑ったが、ノーウェイにはわかった。何かに
躓いたのでは無い。足に何かが絡まっているのだ。

自らの下肢を見れば、ロープの両端に錘が付いたボーラと呼ばれる
道具が両脚に絡み付いている。狩りの時などに、獲物の足止めを
目的として使われる投擲用の道具だ。カーテンに気を取られている
隙に、投げ付けられていたのだろう。

「ほれ、もう一丁!」

「ガアッ……!」

ヤマトの投げたボーラが、今度はノーウェイの顔に命中する。更
に何本も何本も投擲され、これでもかというくらい幾重にも絡みつ
くボーラ。これも先程の砂と同じだ。痛みは無いが視界は遮られ、
蜘蛛の巣が顔に絡まったかのような不快感。うっとおしい事この上
無い。

「ヤマト! 太郎丸さんに……!」

「わあってるよノエル! おらよっ!」

ボーラを右手で操りながら、ヤマトは左手でベルトポーチから数

本のポーションを取り出し、太郎丸へと投げ付ける。

ガラス容器に入れられたポーションは血塗れで倒れた人狼の身体にぶつかり、粉々に砕けて降り注ぐ。直後、傷の周辺から湧き上がる魔法の光。

「これでとりあえず、血は止まるだろ。後はノエルっ！」

「うん！」

頷き合う二人。ノエルは大きく羽ばたいて舞い上がり、ヤマトは腰を低くして短剣を構える。

その様子に、焦りを感じたのはノーウェイだ。もう時間が無い。あと十数秒もすれば天使は力を溜め、降魔の光を放つだろう。本来なら逃げたい所だが……小賢しい小僧の道具類が厄介で、天使を振り切れるとは思えない。

こうする間にも、光が天使へと収束して行く。

それならば……！

「一瞬で小僧を殺シ、天使を叩キ落シテクレル！」

可能な筈だ。人狼さえも反応できない悪魔の瞬発力を持つてすれば、トロい人間に一撃を加える事くらい容易い。さっきは目潰しを食らい外したが、今度は外さない！

両の脚に力を込め、思い切り床を蹴るノーウェイ。弾け飛んだ床材が地面に落ちるよりも早く、ヤマトの眼前に迫る。そして繰り出すのは硬く握り締めた拳。こいつで、どてっばらに風穴を開けてやる！

だが流石に無警戒の相手とは違う。目で追いきれてはいないようだったが、ヤマトは反射的に腕を下げてノーウェイの拳をガードしていた。

しかし、甘い。

スローモーションのように感じる世界の中、ガードした腕の肉がひしゃげ、骨が折れる感触がノーウェイの拳に伝わる。皮が裂け血が噴出し、折れた腕もろともに拳は胴体に命中。貫くには至らないが、肋骨の大半と内臓のいくつかに深刻な損傷を与えた手応えがある。

拳を振り切ると、小僧の身体はいびつに曲がって反対側の壁まですっ飛んで行った。勢い良く壁に激突し、力無く地面に横たわる膳寂な人間。命はあるかもしれないが、これで戦闘不能だ。残るは天使のみ！

頭上を見上げれば、天使の娘は未だ力を溜めている最中だ。無防備な今なら、容易に攻撃を加える事が出来る。

「貰ッ……！！」

高く跳躍しようと、身体を縮込めて備えた時だ。突然、後頭部に強い衝撃を受けた。

よるめき、膝を付くノーウェイ。瞬時に硬い物がぶつけられたのだと悟った彼が見たのは、甲高い音を立てて床を叩く鋭い曲刀。それは瀕死の太郎丸が、力の全てを振り絞って投げ付けた愛刀だった。

「半死人が、ヨクモヤツテクレタ物ダ」

先に死にかけの人狼を片付けるか？ いや、今は天使が優先だ。ノーウェイが見せた、一瞬の迷い。その一瞬で、またも事態が動く。

「舐めてんじゃねえぞ、オラア！！」

立ち上がりかけていたノーウェイは、またも唐突に側頭部への打撃を受け、床に手を付いた。

今度は、助走を付けた飛び蹴り。相手は……致命傷を与えたはずのヤマトだ。

「何故……!?!」

混乱するノーウェイ。ヤマトには、かなりの痛手を与えたであろう事は間違い無い。骨は折れて内臓は傷付き、とても飛び蹴りを放てるようなコンディションでは無いはずなのに!

「ばあか! ポーションに決まってるだろ!」

あらかじめダメージを受けるとわかっていたヤマトは、それを見越してポーションを飲んでおいたのだ。

例えば高い場所から飛び降りる時などにあらかじめポーションを服用する事で、着地の衝撃を受けた直後から回復が始まり、結果的に傷を浅くする事ができる。ポーションは効果時間が短い為、直前に使用しなければならぬのがネックではあるが、生存率を上げる為に冒険者の間では良く使われるテクニックである。

「太郎丸へ投げるついでに、自分も飲んでおいたんだよ。気付かなかったか?」

気付かなかった。顔に絡まったボアラを取る事に専念していたのだ。

「まあ弱い奴には、弱い奴なりの戦い方があって事だ。わかったか、バカ!」

なんという邪魔臭さ。なんという腹立たしさ。雑魚だからトドメは後回しで良いと考えたのが、そもその間違

いだったのだ。一番ムカつくこの小僧を、一番最初に殺すべきだった！

「つつても、俺は使用人逃がすのにウロウロしてて、最初ここに居なかったけどな」

「小僧……ッ！」

怒りに全身を震わせ、ゆっくりと立ち上がるノーウェイ。

今度は油断しない。今度は如何なる動きも見落とさない。一挙手一投足を観察し、小僧が得意とする不意打ちの類は絶対に許さない。確実に首を刎ね、回復の及ばぬ世界へと一撃で叩き落してくれる！

「貴様は殺ス！！」

「やなこつた！ 食らいやがれ！！」

案の定、ノーウェイが動きを見せるとヤマトも動いた。ポケットの中に隠し持っていた何かを流れるような動きで取り出し、投げ付けて来る。

「見切ッタ！！」

予想通りの行動。

ノーウェイはその場で踏み留まると、ヤマトが投げ付けた小さな何かを凄まじい動体視力で見極め、鉤爪で両断した。その上で爆発物の類を警戒し、顔を庇う。

「……………」

だが、何も起らない。

両断された小さな何かは、力無く地面に落ちて転がった。

それは、一粒のコーヒー豆。

「もう、ネタ切れだ」

ヤマトの声に、ハツとして顔を上げたノーウェイが見たのは、会心の笑みを浮かべるヤマトと、自分の周囲に漂う清浄なる光の粒。警戒しすぎたのだ。コーヒー豆などに構わず、思い切って突っ込んでいれば間違いなくヤマトの命は奪えた。だが何かあると思い、二の足を踏んでしまった。

自らの過ちに気付いた時、もう既にそこは、引き返す事のできない場所であつた。

「終りです……悔い改めなさい」

「又オオオオオ！！ 糞ガアアアアツ！！」

周囲に漂う光の粒が槍と化し、ノーウェイの身体を幾重にも貫く。光の槍は互いにぶつかり反射しあい、輝く軌跡が重なり合つて輝く珠が形成される。

そんな中、獣のような絶叫が屋敷に響く。

「ヤマト、覚エてイロ！！ 貴様ダケは、何千、何億回生マレ変ワロウとも見ツケ出シ、最高の屈辱と絶望を与エテ……」

ノーウェイが……いや、彼に取り付いていた悪魔が最後に発した呪いの言葉は、途中から断末魔となつて虚空に消えた。降魔の光は闇の住人に対して容赦する事無く、完膚なきまでに存在を抹消する。やがて輝きが消え、静寂なる時が訪れた時。

疲労困憊、満身創痍の冒険者たちの前には、神に逆らつた者の成れの果て……真っ白な灰だけが残されていた。

第十五話：変わらぬ日々、変わる明日

良く晴れた昼下がり。

冒険者たちが集う食堂兼宿屋『ほろ酔い亭』には、妙に食欲をそそる安っぽい油とビールの匂いが漂っていた。

昼食を済ませ、腹を満たし終えた冒険者たちはそれぞれのパーティごとにテーブルを貸し切り、様々な話に花を咲かせている。

色々な人種、色々な職業が集まるこの場所。かなり特異な外見であつても、数分もすれば溶け込み、馴染んでしまう。そんな懐の深さがある。

だがそれでもなお、目立ってしまう人たちというのは、どこにでも居るものだ。

「申し訳ございません……なんだか、私が目立ってしまったっていうことで……」

「気にすんなよ。別に悪い事してるワケじゃねえし」

丸テーブルを囲む五人の男女。ヤマトとノエル、サークスと太郎丸。そして長身の美女がその「目立つ人たち」だ。

有名人のサークスと太郎丸。そして存在そのものが珍しい天使のノエルに加え、どこか浮世離れた雰囲気的美女が注目度に拍車を掛ける。更にその美女は、美しいという事以外にも注目を集める理由があつた。

「んだけど、その尖った耳は隠しといた方が良くかもな」

「は、はいっ！」

ヤマトに言われた美女が、青みがかつた長い髪で、鋭く尖った耳をそそくさと隠した。

「しかし、まさかアデリーネさんがエルフだったとはね。本当に驚いたよ」

サークスが集まる視線に苦笑しながら言った。

エルフ。

深く古い森に住み、森の民とも呼ばれる少数種族。妖精の一種とも言われている。

魔力の扱いに長け高い知能を誇り、非常に寿命が長く、人間の十倍以上の時を生きる者も珍しく無い。外見的特徴としては、鋭く尖った耳。そして人間の美的感覚から見た場合、種族全体が美男美女揃いである、という事に尽きるだろう。

ただし非常に排他的であり、他種族との積極的な係わり合いを避ける傾向にある。

「申し訳ございませんサークス様。私、お屋敷以前の記憶が曖昧で、世間の事を殆ど知りませんので、自分がそんなに珍しい種族だなんて思っても無くて……」

「いやいや、責めたんじゃないんだ。むしろ嬉しかったくらいさ。エルフと天使が同席するシーンなんて、そう簡単に見れる物じゃないからね」

優しく微笑んだサークスに、エルフの美女ことアデリーネが少し緊張を解いた。

彼女は先日までノーウェイの妾であり、ヤマトが報酬代わりに身請けを申し出ていた女性だ。元主人たるノーウェイが悪魔憑きとして討たれた今、彼女は事前の約束に従ってヤマトたちのパーティーに身を寄せていた。

高い水準で整った顔。優しげであり、憂いを帯びた瞳。細身でありながら女性的な起伏に富んだ身体つきと、長い手足。そしてさら

さらの長い髪は腰の辺りまで伸びて、涼しい青色に輝いて見える。
一般的なエルフの水準からしても、アデリーネはかなりの美女である。その出自やエルフという種族自体の物珍しさもあってか、人目を引く事この上無い。

「まあ子供の時からずっとノーウェイさんの家に居たのなら、無理も無いですよね」

冷たいオレンジジュースをストローですすり、ノエルが言った。
アデリーネの話では、ごく小さい頃に屋敷に来てからというもの外に出た事は一度も無く、今では子供の頃の記憶も殆ど残っていないと言う。屋敷の中での出来事が彼女にとって世界の全てであり、ノーウェイに仕える事を疑いもしなかったのだ。

「はい……ですので私、少し常識に欠けている部分があると思います。ご迷惑をお掛けするかとは存じますが……」

「いいよ、気にするなって。ほら、良かったら食いなよ。腹減って無い？」

ヤマトの気遣いに、嬉しげな微笑みを返すアデリーネ。大人っぽい容姿とは裏腹に、その表情はまるで初恋を覚えたばかりの少女だ。その時、ノエルの表情がほんの一瞬だけ強張った事に気付いた者は居ただろうか？

「ところで、次の依頼についてなんだけど」

あまり空気が読めない性分なのか、それともあえてそうしたのかは判らないが、唐突にサークスが口を開いた。

彼はテーブルの上を軽く片付け、前回したのと同じように丸まった羊皮紙を広げて、カラのジョッキを重石にする。

「一応、僕の方に『伝説の武具を探す』って依頼が舞い込んでる……ま、依頼というか宝探しの類だけだね」

冒険者は何も、他者からの依頼のみで成り立つ商売では無い。時には自ら進んで迷宮に赴き、魔物を倒して腕を磨き、隠された財宝を探したりする事もある。

「あ……悪いけど、俺と太郎丸はパスだな。傷がまだ癒え無いんだ」

ヤマトが言つて、袖を上げて見せた。ノーウェイの拳を受けた彼の腕は内出血が続いている為に赤紫色で、腫れも引いていない。脇腹も同じ状態で、動くと痛むのだ。

太郎丸の症状は更に酷く、腹には血の滲む包帯が何重にも巻かれ、首は石膏と包帯で固定されている。普通に歩き回る事くらいは出来そうだが、戦闘を含めた激しい運動は難しそうだ。

「悪魔の攻撃には呪詛が乗ってるから、治りが悪いの」

傷を見たノエルが、申し訳無さそうに言う。

ノーウェイとの戦いから一週間。二人に対しては毎日のようにノエルが治療を行っていたが、全回復には程遠い。悪魔の呪いに最も効果的なのは、本人の自然回復力。時間が薬、というわけだ。

「ごめんね。私の能力が、もう少し強ければ……」

パーティーの治癒は天使の役目。悪魔の呪いに阻まれて、自らの役目を果たせていない事に負い目があるのだろう。ノエルの声が沈む。

「バカ。太郎丸なんか、ポーションだけじゃ危なかった。下手すりゃ死んでたんだぞ？　俺らは、お前のお陰でここまで良くなっただよ」

「……うん」

ヤマトの声に、ノエルが頷いて少しだけ身を寄せる。他人からはわからないくらいの、ほんの少しだけの接近だ。

「そうか……全員で行きたかったが、無理は出来ないものな。いや実はこの宝探し、期間限定でね……この機会を逃すと、次は五年後なんだ」

心底残念そうにサークスは言った。

宝探しの舞台は海底洞窟。五年に一度だけ口を開く洞窟に、伝説の武具は眠るという。

潮の香り漂う、深く暗い洞窟。湿った岩壁を伝い歩き、海水が穿つ岩の隙間を潜れば、見た事も無い海洋生物が魔物として襲い掛かってくる。そうして数多の困難を退け辿り着いた先には、フジツボがびっしり付いた宝箱に詰まった光り輝く金銀財宝。

事の真偽はともかくとして、冒険者と名乗る者であれば一度くらいは体験してみたいシチュエーションではある。

「というわけなんだ。だから……これはもう、完全に僕のワガママなんだけど……もし皆が許してくれるのなら……」

依頼内容をざっくりと説明したサークスは、多少躊躇いがちに言葉が続ける。

その後ヤマトたちは最後までサークスの話を聞き、どうして彼がそんなにも言い難そうにしていたのか、その意味を知るのがあった。

第十六話：記憶の中の故郷（一）

蔦が幾重にも重なり絡まりあつて、天然のトンネルを作り出す。ざわめく葉の隙間から僅かに差し込む日光が、落ち葉の道に斑模様を描き出し、大自然と言う名の芸術家の偉大さを歩く者たちに思い知らせている。

時折り、優しい風だけが通り抜けるその道。だが今日は、珍しい客人の姿があつた。こんな事は何年ぶりだろうかと森の精霊たちは囁き合い、虫たちは蔦の葉に身を隠す。

「お二人とも、本当によろしかったのですか？　こんな事にお付き合ひして頂いて……」

蔦のトンネルを行く三つの人影。その内の一つ、アデリーネが遠慮がちに聞いた。

ノーウェイの屋敷で着ていたセクシーな服装から一転。彼女はシツクな装いの動きやすそうなパンツルックに身を固め、背中には小さなザックを背負っている。長い髪はアップにしてまとめ、エルフの特徴である尖った耳も隠す事無く露わにしていた。どこか清楚で、知的な装いだ。

「良いんだよ。俺も、太郎丸も、リハビリみてえなモンだ」

小柄な身体に少し大きめの荷物を背負ったヤマトが、そう言つて顔を上げた。後に続く太郎丸も、無表情ながら頷いて肯定の意思を表す。

彼ら三人は前回の依頼に引き続き、森へやってきていた。誰も踏み入る事の無い森林の奥深く。秘密の通路を通らなければ行き着けないと噂されるエルフの隠里を目指して。

「それに例の宝探しに行けなくて退屈だったしな」

汗を拭いながら、ヤマトは数日前、ほろ酔い亭でサークスが言った言葉を思い出していた。

「この宝探し、俺と……ノエルさんの二人で行かせてもらえないか？」

「え……ええっ!？」

この提案に最も驚いたのは、他ならぬノエルだった。まさか自分の名前が出るとは思っていなかったのだ。

「本当なら全員でと思った。けれど太郎丸とヤマト君は本調子で無く、荒事に向かない。かといって信用の置けない他の冒険者とは組みたくない。しかし僕はどうしても、この案件に挑戦したいんだ。たとえ一人でも」

サークスは、なるべく要点だけを冷静に淡々と語っているつもりだったのだろう。だが言葉の端々から、この『伝説の武具を探す』という話にかける想いの強さが滲み出している。

「だが、挑むからには当然成功を収めたい。そこで考えた。付き合いは短いがノエルさんなら信用できるし、能力は言うまでも無い。だから、こんなチャンスは滅多に無いから……僕の我侭である事は重々承知しているんだが……」

思いついた単語をそのまま口に出すかのような、あまり上手とは言えない語り口。だが、だからこそ彼の真剣さが窺えた。

「ヤマト君とノエルさんがコンビを組んでいるのに、それに割り込むような形で……しかも怪我を負った太郎丸を置いて行くなど、相
当な恥知らずだとは思っ。ただ、僕は……」

サークスの冷静さは、既に氷解していた。机の上で握り締める拳
には力が入って血の気が失せ、爪の先まで白く変色している。

「僕は……伝説の武具を探したい！ 五年は……長すぎる」

語り終え、俯くサークス。

誰も、言葉を発しない。食堂という喧騒の中にあつて、静かな時
間が流れる。

そんな中で、ノエルは悩んでいた。

サークスはきつと、伝説の武具に強い思い入れがあるのだろう。
何度も世話になった彼に恩返しの意味も込めて、協力してあげたい
とは思っ。

だが同時に、強い抵抗も感じていた。

ノエルは、ヤマト以外の誰かと二人で冒険へ出た経験が無い。と
いうよりも、もともと冒険という行為そのものに大した興味は無い
のだ。そんな彼女が危険と苦勞を伴う冒険へと赴く理由。それは……。

「……………」

ちらりとヤマトの様子を窺うノエル。彼は口をへの字に曲げて腕
を組み、何事か考えているようだった。

私、どうしたら良いと思っ？

そう問えたら、どれほど楽だったろう。

行っっちゃ駄目だ。

そう言ってくれるなら、どれほど嬉しかったろう。

「……わかりました、サークスさん。今回の宝探し……私で良ければ、同行させて頂きます」

自分から、そう言うしか無かった。

ヤマトに聞いたとしても「行つてこい」と言っただろう。十年以上も同じ時を過したノエルにはわかる。あれだけ真剣な様子を見せたサークスさんの気持ちを無視できるヤマトでは無いと。

「あ……ありがとう、ノエルさん！」

嬉しそうな表情を見せるサークス。ノエルとしては心中複雑であったが、幾分か救われた気がした。

「いいえ、こちらこそ。よろしくお願いします」

言つて、ぺこりと頭を下げる。

一度決めたからには、もう気持ちを切り替えなくてはダメだ。サークスの期待に応えられるよう頑張らなくては。

話を聞く限りでは、この町の近くでは無さそうだ。移動を含めて一ヶ月か二ヶ月か……かなり長期間の冒険となるだろう。

そうなつてくるとノエルの脳裏には冒険とは別の、新たな悩みが浮上してくる。

「あ、あの……ノエル様？ 私の顔に、何か？」

アデリーネの怪訝そうな声にハッと我に帰ったノエルは、慌てて視線の意図を誤魔化した。無意識のうちに凝視してしまったようだ。自分が留守の間、彼女は……アデリーネはどうするのだろう？

成り行きとはいえ、一応彼女はヤマトに買われた身。主人と召使

いの関係だ。そしてヤマトは怪我人。となれば、いくら無茶が服を着て歩いているような彼であつても、依頼を受けて冒険に出るような事はしないだろうし、そもそも怪我人に仕事を頼む依頼人もいないだろう。となるとヤマトとアデリーネは宿に留まり、いつも一緒という事になる。朝も昼も、そして夜も。

偏見を持つのは良くないと思うし、それ自体について善悪を語るつもりも無い。だがアデリーネは屋敷にいる間、あんな事やこんな事をして主人であるノーウェイの歡心を得ていたという事実がある。

女性に免疫の無いヤマト……………誘われるまま、あっさりコロつと骨抜きにされてしまうのではないか？ そんな不安な感情を頭の中から消し去る事が出来ない。

「すいません、ちょっと宜しいですか？」

暗澹たる思いにノエルが囚われている中、不意にアデリーネが何かを思いついたように口を開き尋ねた。

「もしヤマト様のお許しを頂けるのであれば、実は……私も少しお暇を頂きたいのです」

突然何を言い出すのかとキョトンとするノエル。

そんな彼女に、アデリーネは意味有り気な微笑を返して言ったのだ。

「私の、生まれ故郷を見てみたいのです」

そして今。

アデリーネの故郷を目指し森に行く三人の最後尾で、ひたすら押し黙り一連の成り行きを見守っていた太郎丸は、こう考えていた。

天使とエルフ。知力が高い事で知られる両種族であるが、こと男女の機微に関しては、エルフが一枚上手である、と。

太郎丸の想像ではあるが、唐突にアデリーネが故郷を見たいと言い出したのは、ノエルを慮つての事だったろう。ヤマトから遠ざかろうとしたのだ。もしかすると、ずっと以前から里帰りを望んでいたのかもしれないが……あのタイミングでは多少、不自然に思えた。

「へえ、凄えなココ。通路も何もかも全部、生きてる植物やらで作つてあるんだな！ 初めて見るモンばかりだ」

「私事です。外の世界は久しぶりですし、故郷の記憶も曖昧ですので、見るもの全て珍しく映ります」

太郎丸の前を、他愛の無い雑談に興じながら進む二人。その様子に、人狼は人知れず溜息を漏らす。

前述したアデリーネの気遣い。それを台無しにしたのがヤマトだった。一人で故郷へ向うと言うアデリーネに、ヤマトは同行を申し出たのだ。自他共に認める世間知らずの女一人での旅路は、あまりにも危険だからというのが理由だ。それに、怪我をされていて暇だからとも付け加えた。

確かにその通りであると思うし、この申し出は純粋な、ヤマトの善意であり優しさだったのだろう。

だが、太郎丸は思った。

お前から二人きりになつてどうする！ 空気を読め馬鹿者！！と。

案の定、アデリーネは困惑の表情。大人しく休養してて欲しいとヤマトに説くものの、効果は薄そうに思える。そしてアデリーネの逆サイドでは、ノエルがあからさまに不満げな表情で手元のパンを千切り、粉々にして皿の上に並べていた。……ちよつと怖い。サークスは能天気な洞窟のマップなど眺め、この微妙な空気に気付いてさえないようだ。

これはもう、仕方が無い。

「某も行こう」

こう言う以外に無かった。自分も同行するとなれば、ノエルも多少は安心するだろう。正直、傷の痛みは酷いが、見て見ぬ振りは出来ない性分だ。

「お、トンネル抜けるぞ。そろそろ居住区か？」

「いいえ、確かもう少し距離があつたような……」

静かな森に響く声を聞きながら、またも太郎丸は思う。

ヤマトよ、もう少し女心というものを考えろ、と。

先程から会話を続ける二人ではあるが、注意して聞いていれば積極的に話題を作り、話しかけているのはヤマトの方だ。多分、彼には下心など無く、急激な環境の変化に心細いであろうアデリーネを気遣つての事だろうと思える。

だが、それを端から見た場合どうだ？ ノエルが心配するのも良くなる。

ヤマトはまだ若い。そんな彼に、男と女の心理まで考えた上での気遣いを行動を要求するのは、あまりにも酷であり難しいだろう。これから多くの経験を積んで、徐々に慣れてゆく物ではあるが……今、正にその技術が必要だという時だというのに……。

「……？」

不意にアデリーネが立ち止まった。そして振り返り、太郎丸と目が合う。

こちらの視線が気になったか？ そう太郎丸が考えた時だ。アデリーネが、苦笑して見せた。

『ヤマト様からこんなにも優しく、色々と気を使って頂けるのは凄く嬉しいのですが……少し、ノエル様に申し訳無いです』

そんな声が聞こえた……気がした。

なるほど、ヤマトの無邪気な優しさも、太郎丸が同行した意味も、全て察しているという事か。エルフの高い知力と、長い寿命に基づく人間観察力、人生経験は伊達では無いらしい。

それならば……。

ゴツン、と鈍い音が森に響く。

「ぐはっ！？ 何すんだよ太郎丸！ 痛えじゃねえか！」

「おおっと、失礼した」

太郎丸は剣の鞘で、軽くヤマトの頭を叩いた。軽くとはいっても女たちの鬱憤により多少の威力上乘せがあったかもしれないが、概ね『軽く』の範囲内であつたろう。

「カンベンしてくれよ。今回はノエル居ねえから回復出来ないんだからさあ」

痛む頭を擦りながら、さらりと女の名を出すヤマト。

そして再度、ゴツリと鈍い音。

「痛え……！」

「む、すまぬ」

そんなにヒヨヒヨ脳裏に浮かぶ名であるなら、もうちょっと気を使ってやるがいい。

この女泣かせが……！

第十七話：記憶の中の故郷（二）

視界の全面を埋め尽くす深い緑。息をすれば空気が濃く感じられ、静寂の中に耳を澄ませば柔らかな葉の擦れ合う小気味良い音や、植物が水を吸い上げる音さえも聞こえてきそうだ。

木々の生い茂る森の中、所々に架けられた橋や、木材を加工して作ってある道具の類が微かな生活臭を感じさせる場所。ここがアデリーネの生まれ故郷、エルフの隠里だ。

「どうだ、アデリーネ。懐かしいモンとかあるか？」

「はい……景色は、私の記憶とは随分違っています。ですが所々に懐かしさを感じさせる物があります」

愛しげに樹木を撫でながらヤマトの問いに答えるアデリーネ。

自分がこの郷を離れてから、どれくらいになるだろうか？ 木は育ち、あるいは枯れ果て、目に見える物は随分と変わっている。だが空気は……郷の雰囲気は、あの頃のままだ。

視線を上げれば、樹上に細い枝を組み合わせて作られた家のような物が見える。そこから垂れ下がる蔦を使い、子供の頃の自分は、この広い郷の中を思うがまま自由に走り回っていた。木と木の間に備え付けられた、朽ちた板。それを的に、弓矢の練習に励んだ日々が蘇る。

風の音、森の香り、落ち葉の感触。

何故、忘れていたのだろうか？

きっと、屋敷での生活には必要が無かったからだ。思い出しても辛いだけだと、記憶の底に沈み込んでいたのだ。

「ヤマト様。私、少し見て回って来ても宜しいでしょうか？」

「おう、行って来いよ。俺たちはココで待ってるから」

ヤマトと太郎丸にぺこりと頭を下げると、アデリーネは軽やかなステップで土を蹴り、郷の緑に溶け込むようにして木々の隙間へと消える。その何気ない所作の中に、エルフが森の人と呼ばれ理由の一端を垣間見るヤマトたち。

「……自分の家とか、見に行ったのかな？」

「わからぬ。だが長い時間を生きる彼女らにとって、過去と向き合う事は何か特別な意味があるのだろう」

喋りながら、適当な倒木に腰を下ろすヤマトと太郎丸。二人ともずっと我慢していたが、この郷に入ってからという物、ノーウェイから受けた傷が地味に疼く。この場の清浄な空気に、悪魔の呪詛が反応しているのかもしれない。

二人は申し合わせたかのようにザックから水筒を取り出し、口に運んだ。少し温い液体が喉を潤す。水筒の中身は、ノエルが作ってくれた薄めのポーションだ。レモン風味で、ほんのりと甘い。

「過去ねえ……そんなモンかあ？ 昔の事なんぞ、どうでも良いと思うけどな」

「周りにとっては、そうだろう。しかし本人にとっては、重要な事もある」

諭すように言った後、何かを思い出しているのか、自分の手をじっと見つめる太郎丸。どこか、寂しげだ。

ヤマトは彼の過去について何も知らない。知っているのは、ここよりもずっと東の出身で、剣の扱いが得意だから冒険者になったという事くらい。家族や恋人の有無も、故郷を離れた理由も、そういうばちゃんとした年齢さえも知らない。

少しくらいは、詮索したい気持ちもある。だが……どうでも良い。

太郎丸が実は財閥のおぼっちゃんでも、勇者の血を引く子孫でも、凶悪な犯罪者だったとしても、今の自分にとっては関係が無いと思える。短い期間ではあるが一緒に旅をしている内に、理屈では無くそう感じるようになった。

「そっぴゃあ……こつて、人の氣配がしねえな」

ヤマトは話を変える事にした。昔話は、また今度で良いだろう。本人が必要だと感じた時で。

「……エルフは、長寿故に出生率が低い。その為、何かしらの理由で数が極端に減った場合、あっさりと全滅してしまう事があると聞く」

太郎丸が答える。出発前、サークスより聞き及んだ知識だ。そして、彼はこうも言っていた。

「アデリーネ殿は子供の内にここを去り、詳細は覚えていないと聞く。いくらエルフが賢く、魔力に長けるといつても、子供を一人で郷の外へ行かせるような真似はせぬだろう。ならば当時、子供を一人行かせねばならぬような理由が……緊急避難が必要な何か、ここですったのではないか？」

「緊急避難ってオマエ……例えば山火事とか？ けど、そんな風には見えないぜ。それに、全員で逃げりゃ良いじゃねえか。一人で行かせる意味がわかんねえ」

太郎丸の語る推論に、ヤマトが疑問を返した。答えを期待したわけではなく、そうでなければ良いな、という期待を込めた反論だ。

「何があつたのかはわからぬ。だが、そう考えればアデリーネ殿の

記憶が曖昧な理由と人が居ない理由に、とりあえずの説明が付く。緊急事態が発生し、子供にとってはワケのわからぬまま、大人のエルフによって逃がされた、とな」

そこまで喋った後、一旦口を閉じる太郎丸。実はサークスは、まだもう少し予想を語っていた。アデリーネが何かを隠し、嘘を付いているのではないか、との予想だ。

だが、それをここで言うつもりは無い。

「単にココに飽きて他所へ移ったんじゃない？ 街からも遠いし、不便だろ」

「馬鹿な。単身者の引越しでは無いのだぞ。そんな気楽には……」

「そうですねやマト様。ここはここで、良い所もあります。住めば都なのです」

いつの間に戻っていたのだろうか？ アデリーネが木陰から姿を現した。本人に隠れていたつもりは無かっただろうが、あまりに自然な振る舞いであつた為、周囲の緑に同化して認識できなかったのだ。

「おう、おかえり。どうだった？ なんか良い物でも見つけられたか？」

「良い物、といますか…… 太郎丸様のお話を、半ば裏付けるような物でしたら多少」

アデリーネの言葉に身を硬くするヤマトと太郎丸。自分たちの話を、どの辺りから聞いていたのか？

だが今はそれよりも、太郎丸の話を裏付ける物というのが気になった。

「見て頂きたい物がございます。お二人とも、こちらへどうぞ。そ

の場所へ、ご案内致します」

百聞は一見にしかず。

そう考えたのだろう。アデリーネは多くを語らず、二人を郷の中央へと誘ったのだ。

第十八話：記憶の中の故郷（三）

エルフの隠里が、隠里でいられる理由　それが今、ヤマトの目の前に聳え立っている。

視界の全てを占拠する太い幹。見上げれば、空を覆いつくす程に生い茂る濃緑の枝葉。郷の中央に生えるその木は、とても太く、とても高く、とても大きく　古くから森に生きるエルフの長い歴史を象徴するような、見事な大木だった。

「これが、私たち郷の者の間で御神木と呼ばれている、大切な木です。この木は大地から魔法の力を吸い上げ、周囲に迷い道の魔法を掛けていると伝えられています。その魔法のお陰で、この郷は隠里として存在できるのです」

アデリーネが丁寧な口調で、どこか誇らしげに語ってくれた。エルフである彼女にとって、自慢の代物なのだろう。

「魔法を使う大木かあ」

「はい。お二人には確認し辛いと思いますが、魔法の素養がある方でしたら木が魔力を放っている様を見る事ができるはずです」

そう言われ、ヤマトは目を凝らしてみた。自身に魔法の素養が無い事は知っているが、もしかしたら多少は見えるのではないか？　そう思ったのだ。

「見えたか、太郎丸？」

「いや……」

囁きあう二人。

そんな男たちに微笑みながら、アデリーネは傍らの苔生した石の側へとしゃがみ込む。両手で抱えられる程度の、それほど大きくない石だ。

「魔力の流れは見えなくても大丈夫……本題は、こちらですから」

そう言った後、彼女は石に生えていた苔を丁寧に剥がして見せた。丸くスベスベとした石。全体的に白く、所々に薄くヒビが入っているようだ。

「アデリーネ殿。それは……？」

「はい。エルフの、頭骨です」

言つて、石を……石とされていた頭蓋骨を、そつと抱き上げるアデリーネ。中程まで土に沈み、所々が欠けてはいたが紛れも無い。それは確かに頭蓋骨だった。

そして、その事実気付いた今ならばわかる。

木の周囲を見渡せば、他に幾つも目に付く白っぽい丸い石。そして枯れ木と思われた白っぽい枝の数々。

「全て確認したわけではありませんが、元々ここに住んでいた皆さんの、遺骨だと思います」

「これ全部が！？」

ヤマトが驚きの声を上げる。骨の多くは土に埋もれ、木の陰や茂みの下に隠れていたが、目に見える範囲だけでも百や二百は下らないだろう。

「それと、これを……」

アデリーネが改めて頭蓋骨を差し出した。良く見れば、その側頭部にあたる位置に大きな切れ込みが入っている。鋭い刃物で切り裂かれたかのような深い傷跡。この傷が頭蓋骨の持ち主が亡くなる原因となった事は、容易に想像できた。

「多くの骨に、このような傷が。それ以外にも、木や岩にもそれらしき痕が散見されます」

「って事は、太郎丸が言う緊急事態ってのが、この傷を付けたってワケか」

言つて、もう一度周囲を見渡すヤマト。木々の隙間から垣間見える骨の数々に、辛く、苦しい思いが込み上げて来る。

今は骨になってしまっているが、かつて、これだけの数のエルフがここで血を流し倒れたのだ。静かな森に悲鳴と怒号が飛び交い、濃い血の匂いが漂ったのだ。

「……………」

気が付けば太郎丸が目を閉じ、遺骨へ向けて正座で手を合わせていた。彼の故郷における、死者の魂を慰める所作の一つだ。

ヤマトの故郷に、そういった風習は無い。だが太郎丸の隣に座り、形だけでも真似て手を合わせる。

安らかに眠れ、名前も知らないエルフたち。アンタたちが助けた娘は、今ここで生きてる。

伝わらないかもしれないし、的外れかもしれない。けれど、これだけは伝えたかった。

アンタたちの死は、決して無駄じゃ無い。

「ヤマト様、太郎丸様……」

ヤマトの傍らに膝を付いたアデリーネが口を開きかけた時、風が流れた。不意の事に違和感を感じた彼女が風の吹く方を見てみると、いつの間にか人が立っているではないか。

人といっても、人間では無い。人型をした何かだ。

薄っすら蒼く発光する半透明の身体。大きさは人間の大人くらいで、全体的に女性的でやせ細ったようなシルエット。地面からは少し浮かび上がり、風にたゆたう羽毛の如くフワフワと揺れ動き、眼球は無く、代わりに蒼い発光体がこちらをじっと見つめている。

「な、なんだコイツ？」

「面妖な……！」

突然現れた正体不明の相手に警戒し、構えを取るヤマトと太郎丸。それに反しアデリーネは、懐かしい物でも見たような様子で表情を和らげる。

「あなたはシルフ……！ まだここに残っていたのね？」

風の精霊、シルフ。

世界の根幹を成す四元素、地、水、火、風の内、風の属性を司る代表的な精霊の一つだ。知性は低く、本能で行動すると言われている。

風の吹く場所であれば、そこかしこに存在する精霊ではあるのだが、「精霊使い」と呼ばれる特殊な才能を持つ者でなければ目視する事が出来ない。だが気まぐれに、こうして人前に姿を現す事もある。

「大丈夫です、お二人とも。このシルフは、私がここに居た頃からずっと存在し続ける精霊です。郷の緩やかな風の如く、優しく、穏やかな性質ですから」

言いながら、シルフに近寄るアデリーネ。もぬけの殻となっていた故郷に見知った顔を見つけたのだ。その喜びや安心感は、筆舌に尽くし難い物があるだろう。

「お願いシルフ、私に教えて。ここで何があったのか……私のお父さんと、お母さんはどうなったの？」

問い掛けて、シルフへと手を伸ばす。触れ合う事で意思の疎通を……そう思ったのだろう。

だが、横合いからそれを阻む者があった。

「危ねえ！！」

ヤマトのタックルを受け、倒れこむアデリーネ。背中をしたたかに打ちつけ、一瞬息が出来なくなる。

「いたた……何をなさるのですかヤマト様。何も危険な事は……？」

頬に落ちてきたヌルリとした液体。それを指先で掬い取った時、不満を訴えるアデリーネの言葉は止まった。

それは真っ赤な血だ。ヤマトの肩口から滴り落ちた、彼自身の血液だ。

「早く！ この場を離れるのだ！！ ぐおあッ!？」

そしてヤマトの背中越しに見えたのは、身体を盾にして何者かの攻撃を受け止めている太郎丸の姿。既に全身血だらけで、こうしている間にも風切り音と共に傷がどんどん増えている。

「こ、こつちだアデリーネ！」

わけもわからず、ヤマトに手を引かれて大樹の陰へと身を隠すアデリーネ。

こんな事がずっと昔に、あった気がする……。

「無事だったか、二人とも？」

「おう、太郎丸。お陰さんでな。そっちも……大丈夫そうだな」

アデリーネが既視感に囚われていると、すぐに太郎丸も同じ場所へ逃げ込んできた。体中に切り傷を負い、黒い体毛が真っ赤な血に染まっていたが、意に掛ける様子も無い。

「とりあえずは回復だ。太郎丸、ポーション持つてるか？」

「うむ、十分に有る。心配無用だ」

男たちが無事を確認しあい、傷を癒し始めた頃。アデリーネの心は思い出の中にあつた。

そう、かつてこの郷から逃げ出した時の事。

突然やってきたのだ。真っ赤な身体をした者たちが。そして森に住まう、穏やかなはずのシルフが暴れ始めた。

理由はわからない。だが多くの同胞が真っ赤な者たちによって薙ぎ倒され、シルフの鋭い風によって切り裂かれた。自分は両親に手を引かれ、木の陰に逃げ込んだ。その時、両親は傷を負っていた。深い傷だ。だがポーションで治療すれば大丈夫だと思った。けれど……。

「ヤマト様、太郎丸様……その傷は、ポーションでは治りません」

アデリーネが、はつきりとした声で言った。そして、その言葉に

男たちが疑問を挟むより前に、彼女は続ける。

「曖昧だった記憶が、私の中に戻ってきたのです。今すぐ包帯で止血して下さい、お手伝いします」

呆氣に取られる男二人の身体へ、ザックから取り出した包帯をグルグルと巻きつけて行くアデリーネ。何がなんだかわからないヤマトだったが、傷に関して言えば確かに彼女の言うとおりだ。

シルフの放った風の刃からアデリーネを庇い、背中を受けた傷。普段であればポーシヨンの二、三本でも飲むか、傷口にかけられるかすれば大した問題もなく治る傷だ。しかし今回は痛みこそ和らいたものの、劇的に回復する様子は無い。そしてそれは、太郎丸の傷も同じ状況であるようだった。

「アデリーネ殿。記憶が戻ったと仰られたか？ では、あのシルフは一体……？」

自らを止血しつつ聞いた太郎丸。その問いにアデリーネは表情を曇らせ、それでもしっかりとした口調で、手早く答えた。

「彼の精霊は、悪魔の毒気に当てられているのです」

第十九話：記憶の中の故郷（四）

かつてエルフの隠里を襲った悲劇。

平和な郷へ突然現れた、悪魔の群れ。

今となつては何故悪魔がエルフの隠里を襲ったのか、襲うことができたのか、その理由は定かでない。だが事実として、襲撃は起つた。

暗闇の中、真つ赤に光る目が木々の合間で閃く度に誰かの悲鳴が上がり、命の炎が消えた。悪魔の力は圧倒的だった。

しかしエルフたちとて、ただ無様にやられ続けたわけではない。最初こそ劣勢であったエルフ側だったが、地の利と人の輪によって体勢を立て直すと、エルフ族に伝わる秘法の力と、郷に住まう風の精霊シルフの力を借りて反撃に転じる。そしてついに悪魔たちを退ける事に成功したのだ。

だがしかし、本当の悲劇はそれからだった。

味方であったはずのシルフが狂い、エルフを襲い始めたのだ。

「確か両親の話では、精霊であるシルフは物質界の生き物よりも魔法的な存在であるから、悪魔の呪詛を強く受けたのだろっ、と……」
「物質界って俺らの居るこの世界の事か？ まあ良くわかんねえけど、悪魔に混乱させられちゃったって事だな」

大きな岩陰から、少しだけ身を乗り出して話すヤマトとアデリーネの二人。その視線の先には、竜巻のような風を纏って触れる物全てを切り刻む、狂えるシルフの姿がある。

しっかりと何かに掴まっていなければ吹き飛ばされてしまいそうな暴風が吹き荒れ、無作為に、無造作に、ただただ力を振るい暴れ回る姿は、時に大自然がもたらす無慈悲な自然災害そのものだ。

「シルフから受けた傷がポーシオンで上手く回復しないのも、悪魔の呪いが関係しているからでしょう」

岩にしがみ付いたアデリーネが、風の音に負けないよう声を張り上げる。

彼女の両親は、悪魔の呪いのせいで亡くなった。蘇った記憶の中には、温もりを失って行く手の感触と共に、そう刻まれている。

「んじゃ、野郎が郷の仇って事で……やっちまって良いんだな？」

「はい、ダメージを受けて力を失ったシルフは精霊界へと還ります。同時に悪魔の呪いからも解き放たれるでしょう。死ぬわけではありませんから、遠慮なく。ですが……」

アデリーネが乱れた髪を整えて、ヤマトへと向き直る。

「ヤマト様、あのシルフ……このまま放置しておいても良いのですよ？ きつと、この郷のエルフたちは全滅しているでしょう。そうなれば私以外、ここを訪れる者も居ないはず。それなら危険を冒し……むぐっ!？」

「ほい、そこまで」

喋るアデリーネの口を、ヤマトが無造作に押さえて黙らせる。

「あのシルフ、お前の知り合いなんだろ？ だったらブン殴って、正気に戻してやろうぜ」

そう言つて、ヤマトは顎の先で少し離れた場所にある岩の陰を指し示す。そこには木や石の破片を一箇所に集め、蔭で縛って巨大なボール状に加工している太郎丸の姿があった。

「太郎丸も言つてただろ？ 安寧の享受を由とするなら、冒険者などしておらん！ とかなんとか。危ないから止めとこうって考えるような奴が、冒険者なんかやってねえよ」

「そ、それはそうかもしれませんが……」

戸惑うアデリーネ。ヤマトや太郎丸の好意は嬉しいし、シルフを正気に戻したい気持ちは誰よりも強いつもりだ。しかし先にも述べた通り、理屈で考えれば、いま無理をしてシルフに挑む必要は無い。主力たる二人の男は怪我を負っているし、戦闘を想定していたわけでは無い為に準備も不足している。せめて一旦引き返し、傷を癒してから再度来る方が良い。そうに決まっている。

「ほら、行くぜアデリーネ。シルフの野郎がお待ちかねだ」

未だ迷いの消えない彼女にヤマトが言った。両手に革のグローブを嵌めて何度も握りなおし、調子を確認している。完全にやる気の表情だ。

太郎丸もそれは同じようで、準備が整ったと親指を立て、こちらへ合図を送っている。

「きっとシルフの野郎も、懐かしいお前を見つけて嬉しかったんだ。それで正気に戻して欲しくて出てきたんだろうぜ。だったら今しか無え！ また今度だとか、次の機会だとか、あるかどうかのチャンスを待つてる場合じゃねえ。やるんだ！ 今、この時に！」

効率的では無いし、理に適つてもいない。だがヤマトの言葉は妙にアデリーネの胸に響いた。

自分はエルフだ。人よりも遙かに長い時を生きる。だからだろうか？ チャンスを待つ事が、当たり前になっていた。今よりもっと良い機会が訪れる。明日か明後日か、あるいは何百年後かもしれない

いが、準備を整えてチャンスを待てば良いと考えていた。

だがヤマトは違う。不確実な未来に希望を賭けたりしない。今この瞬間に出来る限りの努力を惜しまない。常に全力で走り続けているのだ。

「……ノエル様が苦勞なさはるはずですね」

「ん？ 何か言ったか？」

苦笑するアデリーネ。疲れる生き方だと思う。こんなにも全力疾走されては、付いて行く方がたまらないだろう。

だがそれでも付いて行きたいと願ったのなら……。

「わかりましたヤマト様、お願いします。あのシルフを……精霊界へ還す為、お力をお貸し下さい！」

「よっしゃ、任せろ！ 一発ブチかましてやろうぜ！！」

それを合図として、吹き荒ぶ風の中をヤマトは岩陰から飛び出した。飛ばされそうになりながらも地面に取り付き、手近な石を拾ってシルフへと投げ付ける。

「こつちだ、こつち！ このスケスケ野郎！ 風吹かすだけの能無しか、このへボー！！」

あからさまな挑発を行いつつ、次々に石を投げ付けるヤマト。狂えるシルフが言葉の意味を理解しているとは思えないし、石も届く事無く竜巻に巻き上げられてしまったが、それでも下劣な悪態と投石は続く。

「無視ってんじゃねえぞコラァ！」

そんな掛け声と共に投げた細長い石。それが偶然にも風に乗り、爆風の壁を掻い潜ってシルフの元まで届いた。そして見事に喉元へ命中……したかに見えたが、まるでそこには何も無いかの如くシルフをすり抜け、反対側の爆風によって粉碎されてしまう。

「チッ！ やっぱりかよ」

予想した通りだった。シルフはヤマトたち物質界とは違う、精霊界の住人だ。アデリーネの言葉を借りるなら、より魔法的な存在といえる。そんな精霊たちに干渉する為には、物質界の物では駄目なのだ。

「アデリーネの言う通り、魔法か、魔法の掛かった武器じゃねえと触る事も出来ないってワケか」

ノエルの操る光の魔法や、サークスの剣技『滅空』のように直接魔法力を放出する技。あるいは魔法の武器でなければシルフには傷をつける事さえ出来ない事になる。

だが希少品である魔法の武器など持ち合わせている筈も無く、ヤマトも太郎丸も魔法と絡めた剣技など習得していない。そして魔法を操る素養があると思われるアデリーネも、その術を知らなかった。つまり今この場にいるメンバーに、シルフを倒せる者は居ないという事だ。

「でもまあ、ここまでは予想通り……おっとあ！」

賑やかに喋るヤマトの目に一瞬だけ、ほぼ無色透明なブーメランのような物が見えた。辛うじて身をかわすと、足下の土が派手に抉れて宙に舞う。シルフの繰り出す風の刃だった。それが次々に生み出され、甲高い風切り音と共にヤマト目掛けて飛来する。

無差別に猛威を振るっていた狂えるシルフが、彼一人に狙いを定めたのだ。

「やっと本気になりやがった。俺相手に手を抜くとか、ちょっとナメ過ぎなんだよオマエは！」

ヒョイヒョイと身軽に動き、風の刃を避けるヤマト。だが強気な口先とは裏腹に、その動きは鈍い。先の戦いで負った傷と、強烈な風が彼の動きを妨げているのだ。

「ぐっ……ヤベえ、風が強くて……！」

シルフの周りを守っていた竜巻が、全てヤマトの周辺に集まる。叩きつけるような爆風に、一瞬でも気を抜けば遥か上空まで巻き上げられてしまいそうだ。

しかも風の中に地面から巻き上げた枝や小石が混ざり込み、凄まじい勢いでヤマトの身体を殴り、突き刺す。特に守る物の無い剥き出しの腕や頭には多くの枝が突き刺さり、飛礫によって次々に青アザが刻み込まれて行く。

「畜生……！」

身を守るのに精一杯で、身動きの取れないヤマト。このまま鬨り者にされるか、あるいは風の刃で……と思われた時、太郎丸がシルフの背後に雄叫びと共に現れた。

「おおおおッ……！」

彼は先に準備していた蔦で固めた巨大な球を、全身を使い、渾身の力でグルグルと振り回す。ミシミシと筋肉が軋み、傷口が開いて

鮮血が噴出した。だが構う事無く鳶の球に十分な速度を持たせ……。

「どっせえええい!!」

勢いを付けてシルフに叩きつけた!

唸りを上げて飛来する巨大な球を、咄嗟に竜巻で防御するシルフ……本来、物理的な攻撃の影響を受けない精霊には必要の無い防御だ。しかしそれは、生物が本能的に持つ防衛反応だったのだろう。目に物が飛び込んだ時、人が咄嗟に瞼を閉じるように、シルフは竜巻で防御を行った。

爆風に煽られ、粉々に砕け散る鳶の球。だが同時に、竜巻の回転も乱れていた。風の力だけでは鳶球の大きな質量を受け止める事が出来なかったのだ。

瞬間、強く吹き荒れていた風が止まり、凼となる。

『今だ! アデリーネ!!』

「やあああああッ!!」

男たちの叫びに合わせ、タイミングを計っていたアデリーネがシルフの元へと駆け込む。その手には、魔法の輝きを宿す棍棒 エルフの御神木、その枝をへし折って作った、即席の魔法棍棒だ。

アデリーネは走る勢いを乗せ、手にした棍棒を大きく振りかぶる。そして力一杯、全力で持つて狂えるシルフの頭を……ブン殴った! ごっつん、と鈍く重い音が響く。彼女の握る無骨な棍棒は、眩い輝きを放ちながら、狙い違わずシルフの頭を力チ割った。更に二度、三度。アデリーネは大上段から棍棒を振り下ろす。薄い手の皮が裂け血が滲んだが、構う事無く渾身の力を込める。

「えいつ! ええいつ!! ……はあっ、はあっ……!」

何度、棍棒を振るっただろう？

自らの血で汚れた棍棒を手に、肩で息をするアデリーネ。彼女の前では、元々半透明だったシルフが更に透明度を増し、殆ど透明な状態となつて宙に浮かんでいる。その姿はまるで風に漂う綿毛のように、ただ流されるままの力無い存在であるかのようなのだ。

もう、この世界に留まる力を失つたのだろうか？ そう思った矢先だ。

「っ！？ キヤアアアツ！！」

鋭い突風がアデリーネを襲った。風の刃に切り裂かれ、細い髪や服の切れ端と共に、血煙が空に広がる。

狂えるシルフが最後の力を振り絞り、巨大な竜巻を起こしていた。これまでで最も大きな竜巻だ。周囲の物を巻き上げ、木々を巻き込み、鳥球の残骸も全て上空へと放り上げて行く。

烈風を伴い、あらゆる物を粉々にする強烈な竜巻。だがこれは、シルフにとっても我が身を削る諸刃の剣だった。半透明の身体が端から削れ、風と共に消え失せて行く。

このまま、この竜巻を耐え忍べばシルフは力尽きる。そうならば自分たちの勝利だ。

しかし！

「もう、待たせたりしない！」

アデリーネが、棍棒を手に立ち上がった。体中に受けた傷からは血が滲んでいたが、彼女の固い意志の前に障害とはなり得ない。

吹き付ける風の中を、一步、また一步と地面を這いずるようにしてシルフに近付く。彼が自ら消えてしまう前に……これまで自分を待っていた彼への、ケジメを付ける為に。

「きゃ……！」

だが軽量のアデリーネでは、シルフへ近付くにも限界があった。あまりの風に身体が浮き上がり、前に進む事はおるか踏ん張る事さえ出来ない。

もう時間が無いというのに……：どれほど強く願ったとしても、駄目な物は駄目なのだろうか？

「あきらめんな！ こっからが本番だろ……！」

間近でヤマトの声がした。同時に、風が緩む。

風上にヤマトと太郎丸が居た。互いに肩を組み、地面に爪を立てて踏ん張って、身体を風除けにしてアデリーネの願いを力強く支える。

「アデリーネ殿ッ……！」

「お前の意地、野郎に見せてやれ！」

狂えるシルフへと続く、道が出来た。

「はいっ……！」

アデリーネが駆け出す。ヤマトと太郎丸が作った風のトンネルを突っ切り、消えかけているシルフの元へ。そして……！

「てやああああッ……！」

棍棒を眼前に構えたまま、走る速度を殺す事無く身体全体でぶつかる。そうしてシルフを背後に聳え立つエルフの御神木へと、まさに全身全霊を込めて叩きつけた！

太い幹に雷のような輝きが走り、無数の葉が舞い落ちる。手元の棍棒は砕け、破片が鮮やかな輝きを撒き散らしながら飛び散った。そしてシルフも……。

「……………」

雪が溶けるかの如く、身体の端から順に解れ、光の粒となって消えて行く。この世界で精霊としての形を維持する力を失い、元居た精霊界へと還るのだ。

言葉は無く、音も、何も無い。ただ一陣の優しい風だけが、アデリーネの頬を撫でて空へ、高く高く流れて行く。

『こんな方法しか取れなくてごめんなさい。長い間、ほったらかしてごめんなさい。逃げようとして……ごめんなさい。あつちで、ゆっくり休んで』

古いエルフの言葉を風に乗せ、アデリーネは目元を拭った。

そして傷付いた手のひらを、棍棒と同じ輝きを放つエルフの神木に添えて、祈りを捧げるのだった。

第二十話：深海に眠る伝説（一）

ぼつり、ぼつりと水滴の滴り落ちる音と、生臭い磯のニオイ。暗闇に閉ざされた洞窟の中は外に比べ、格段に気温が低く肌寒い。

奥の方から流れ来たヒンヤリとした空気が服に入り込むのを感じ、ノエルはローブなんて物を着る選択をした半日前の自分を酷く責める。

「大丈夫かい、ノエルさん？　いま少し、震えてたように見えただよ」

「いいえ、お構いなく。天使は寒冷耐性もあるので平気です」

軽く振り返り、後ろに居るサークスへと笑顔で応えるノエル。光を操って明りとする為、今は彼女が先頭なのだ。

天使に寒冷耐性があるのは本当だが、平気というのは嘘だ。冷気で傷を負うような事は無いが、寒い物は寒いし、鳥肌だって立つ。そしてノエル個人としては、温かい所の方が好きだ。

「そうかい？　流石は天使だね。僕なんて寒がりだから、鎧より防寒装備の方が重いくらいだよ」

そう言っただけサークスは、白銀の鎧の上に羽織る二重のサーコート指して見せた。鎧の下に着ている服も、普段より分厚い物にしているようだ。

正直、羨ましい。

そのサーコート、一枚貸してくれないかな……と思ったノエルだったが、言い出せない。何故ならば、彼女は天使だからだ。天使は厚着をして着膨れなんてしないし、寒さに歯を鳴らしたりしない。いつも純白のローブを身に纏い、優しい笑顔で微笑む……そういう

物なのだ。

「それにしても、広い洞窟ですね……」

こうなれば話を変えて、気を紛らわせるしかない。

ノエルは身体から放つ光を増やし、明りの届く範囲を大きく広げた。

どこまでも続く湿った岩肌。そこに張りつくフジツボが、普段この場所が海の中にある事を示している。

ノエルとサークスが訪れたこの洞窟。これこそが五年に一度、地元民の間で『水無し』と呼ばれる大潮の日にだけ姿を現す海底洞窟だ。

「このどこかに、伝説に名を残す武具の手掛かりがある……という話なんだけどね」

サークスが地図を広げ、明りにかざす。海の底にあった洞窟入口を潜って、既に半日。分かれ道や目印を書き記す地図の記号も、随分と増えていた。

潮が引いて洞窟探索の出来る時間は、丁度丸一日。帰りの方が早く移動できると考えても、そろそろ引き返し始めないといけない時間帯だ。

「ノエルさん、もう少しだけ進んで……何も無ければ、引き返そう」「……はい」

残念そうなサークスの声。無理も無い事だろう。この海底洞窟に、彼はたとえ一人でも挑戦したいと言っていたのだ。何の成果も無く引き返すなど、相当に後ろ髪引かれる物があるに違いない。

この洞窟は以前より、伝説の武具に纏わる噂の絶えない場所だった。

た。その為、五年ごとにある大潮の日には多くの冒険者が訪れ、彼らによって入り口近辺は隅々まで探索し尽くされている。

今回、二人が訪れているのは入り口から更に一步奥へと踏み込んだ深層部。未探索で、地図もろくに書かれていない未知の領域だ。危険だが、それ故に何かがあるのでは？ と期待してしまう。

「すまない、ノエルさん。せっかく来てもらったのに、無駄に終わるかもしれない」

ノエルが放つ光を頼りに、更に奥へ。天井が低くなり、道が細くなってきた。

これまでの経験から、こういった道は行き止まりになっている事が多い。サークスの言葉は、それを感じての物だったのだろう。

「いいえ、無駄だなんて……私は見聞が狭いので、良い経験になります」

「そう言ってくれと、ありがたいな」

道は細くなりつつもまだまだ続き、気温も更に下がる。

付近の岩にはフジツボも、海草の類さえも付いていない。いま二人が歩いている場所は、普段ならば海の底にあって、本当に深く暗く、太陽の明りも温もりさえも届かない場所なのだろう。

「ノエルさんは、いつもヤマト君と一緒に活動しているの？」

「ええ……実を言うと、ヤマト以外と組んでコンビで冒険に出たのは、これが初めてです」

ノエルの答えに、サークスが意外そうな声を上げる。天使ならば引く手数多だろうに、これまでに一度もパートナーを違えた経験が無いなんて。そう、彼は言った。

サークスの驚きは勿論だとノエルも思う。実際、とても多くの人たちからパーティーに誘われ、引抜きにあった。半ば脅迫に近い事をされた事さえある。

だがその全てをノエルは断った。ヤマトと一緒になければ、彼女にとって冒険など何の意味も無いからだ。

「それが、どうして僕と？　どういった心境の変化があったのか、聞かせてもらっても良いかな」

「ああ、それは……」

ヤマトに行けと言われそうな気がしたから。

「サークスさん、この冒険に随分思い入れがあるようでしたから。私で力になれるのなら、と」

「なるほどね……そうか」

返事をしたサークスの声には、どこか残念そうな響きが混じっていた。

「まあ確かに、この冒険……というか伝説の武具という存在について、かなり強い執着を自分でも感じている」

「目標や夢という事ですか？」

「うん。正確には僕の夢では無いけれどね」

そうして会話を交わす内、終着点が訪れる。

「行き止まり……ですね」

先細りの通路は、人が一人立てる程度の広さだけを残して途切れていた。あるのは、足元の水溜りだけ。

「残念ですけどサークスさん、引き返し……」
「いや、ちよつと待ってくれ」

ノエルを避けて前に出て、サークスが行き止まりにしゃがみ込む。そして剣を抜くと、足元の水溜りへ差込んだ。すぐ底にぶつかるかと思われた剣だったが、その刃はスルスルと水に飲み込まれ、柄の部分を水上に残してもまだ底には届かない程だ。

「これは……深いな。ノエルさん、明りを！」

眩い明りによって照らし出される水溜り。水の透明度は高く、かなり深くまで視線が通るようになる。だがノエルの光をもつとしても、その底は未だ暗闇に閉ざされていた。そして微かに、横道が更に奥へと続いているように見える。

「まだ、この向こうに道が続いてるんだ！」

ここは行き止まりでは無かった。多くの冒険者は水溜りの中に続く通路に気付かず、あるいはここで時間切れとなり、引き換えしたのでは？ もしくは水の中を進めず諦めたのでは無いか？

サークスが熱の籠った声を上げる。

「行こう、ノエルさん！ 隠されて何かに、僕らは近付いている！」
「でも……」

既に半日が過ぎている。今から大急ぎで引き返したとしても、潮が満ちるまでに入り口まで戻れるかどうか微妙な所だ。それに、この水中の道がどこまで続いているかわからない。そもそも何かがあ

るとは限らない。だからここは安全策を……とは思っ

「だがサークスは行く気だ。止めたとしても振り切って行くだろう。どうしても行きたいと、強い意志を湛えた彼の目が雄弁に語っている。」

「……わかりました、行きましょう。でもサークスさんはここで待っていて下さい。私が行ってきます」

「えー!? いや、しかし……」

ノエルの意見に驚きの声を上げるサークス。そんな彼へ、天使の少女は落ち着いた声で、諭すように言葉を紡ぐ。

「私ならばらくの間呼吸をしなくても平気ですから、水路が長くても大丈夫。それに明りの問題ありません。水中でも光子を噴射して、普通に泳ぐよりも速く移動できます。ですから……」

最後の言葉を飲み込むノエル。言わずとも彼女が何を言いたいのか、サークスにもわかった。

自分一人の方が良い。貴方がついて来ては、足手纏いだ……遠まわしに、ノエルはそう言っている。

肩を落すサークス。確かに、自分がついて行った所で、足を引く張るだけである事は火を見るより明らかだ。本当なら自ら水路を進み、隠された伝説を垣間見たい……だがその思いをぐつと飲み込んで、サークスは言った。

「ノエルさん、キミに任せるよ」

「はい、任せて下さい。朗報をお伝え出来るように、頑張りますね」

こうしてサークスの夢は、ノエルの双肩に託されたのだった。

第二十一話：深海に眠る伝説（二）

天使御用達の白いローブを脱いで下着姿となったノエルに、太陽の恵み届かぬ海底洞窟の寒さは容赦が無い。ふかふかの翼で身体を覆っても、岩肌と直に触れるつま先は冷え切って、気を抜けば歯がカチカチと演奏を開始してしまいそうだ。それに加え、今から水に入らなくてはならない。軽く触れた水面は氷のように冷たく、骨まで凍ってしまいそうだ。自分で言い出した事とはいえ、どうしてこんな事になってしまったのか……悔やんでも悔やみきれない。

「ノエルさん、本当に大丈夫かい？　なんだか寒そうにしてるよう
な……」

「い、いえ。その、ちょっと緊張で……武者震いですかね？」

少し離れた通路で、背中を向けたサークスが気遣わしげに言った。彼の目にはしっかりと目隠しが施され、天使の柔肌を見る事は叶わない。彼は、その手に握られたローブでノエルが寒そうにしている気配を感じたのだ。ローブはノエルの足首にしっかりと結び付けられており、緊急時には無理矢理にでも引っ張り上げる事になっている。

「それでは、行って来ます！」

「うん、気をつけて」

いよいよだ。覚悟を決めて足先を水に漬けると……。

「~~~~っ!!」

凍えるような冷たさが、震えと共に頭の先にまでやってきた。全

身に鳥肌が立ち、翼は羽毛が逆立って一回り大きくなる。

色々な意味でサークスに目隠しをしておいて良かった。こんなみっともない姿、とても見せられない。そう思いながら、今度こそ本当に覚悟を決めて、ノエルは水中に身を投げ出した。

「……えいつ！」

どぶん、と空気と水が混じる音の後、突然訪れる静寂。そして下着や髪、翼に入り込んでいた空気が抜けて行くカプカプともコプコプともつかぬ音が聞こえ、今度こそ本当に、長い静寂が訪れる。

水は冷たかったが、だからといって支障をきたすような身体でも無い。ぐっと我慢して意識を集中、光を操って視界を確保した後、身体を反転させて水路を潜り始める。

入り口こそ狭い水路だったが、水中にはそれなりの広さがあつた。両手、両脚を伸ばしても壁までかなりの余裕がある円柱の内側……その苔さえ生えないゴツゴツとした黒い岩壁が、ノエルの光を反射して不気味に輝く。一応周囲に警戒しながら慎重に縦穴の底まで潜りきると、そこには水上からも微かに見えていた横穴が存在していた。

（かなりむこうまで続いている。ロープ、足りるかな？）

ロープを手繰り寄せて長さに余裕を持たせると、ノエルは横穴へと身体を滑り込ませる。これも縦穴と同じく、入り口こそ狭いが進入してしまえばそれなりの広さがあつた。進む先の末端までは光が届かず、闇に閉ざされている……随分と長い。

それにしても奇妙な光景だった。蒼い海の中であるにも関わらず、そこには何の生命も見当たらない。魚はおるか、海草の類も皆無だ。何度か海に潜った経験のあるノエルだったが、こんな場所は初めてだった。

（ヤマトに見せたら、どう言っただろ？）

不意に、そんな考えが頭を過ぎる。

もう彼とは半月ほど顔を合わせていない。幼い頃に、とある木の下で出会って以降、こんな事は初めての経験だった。それ故に、顔や声を時々は思い出さないと忘れてしまうのでは無いかと不安になっってしまう。

最後にヤマトを見たのは、彼がエルフの隠里へと旅立つ日の朝だ。忘れ物は無いか、薄めたポーションは水筒に入っているかと問い質す自分に、ヤマトは言った。

「俺の事はいいんだよ。お前こそ、早く戻って来い」

あの鈍い彼の事だ。何かを意図して言った言葉では無かっただろう。だが戻って来いとの言葉が、無性に嬉しかった。

だが同時に、辛くもあった。

ヤマトの肩越しに、こちらを見つめるアデリーネの姿を見止めたからだ。彼女は自分へと一礼し、申し訳無さそうな笑顔を見せた。不安にさせてごめんなさいと、彼女の目は言っていた。

（違う……謝らないといけないのは、私の方だ）

アデリーネは気付いていた。ノエルが見せた、微かな不信任に。万人に無限の愛を与えなければならぬ天使が見せた、僅かな偏見に。

かつての主人であるノーウェイにそうしていたように、アデリーネがその美貌と身体を武器にヤマトに近付くのでは？ 一瞬ではあるが、ノエルはそう考えてしまった。

（天使、失格だよ……）

生きる為に頑張っていたアデリーネ。その生き様を蔑むような事があつてはならない……絶対に。だが他ならぬヤマトが対象だった為に、一瞬の嫉妬心が呼び起こした後ろ暗い気持ち。それをアデリーネは敏感に感じ取っていたのだ。

天使といえば、世間的には悪魔以外の全ての生命を慈しむ聖なる存在として知られている。そんな天使に疑いの目を向けられる事が、どれほど彼女の心を傷つけたろう？ であるにも関わらず、アデリーネには気を使われ、太郎丸にまで気を回されて、自分の未熟さを痛感したノエル。

（ヤマトもきつと、私が手を出すたびに、こんな気持ちになつてたんだろうな……）

考えるうち、真横に向つていた水路は次第に斜め上へ。そして、程無くして垂直に昇り始める。

行く先に、揺らめく水面が見えた。自分の放つ光とは別の輝きも見える。ゴールはもうすぐだ。

「……ぷはっ！」

水面を突き破つて飛び出した先。そこは岩壁によつて形成された、ドーム状の空間だった。球を半分に切つたような構造で、水の無い部分だけでちよつとした部屋くらいの広さがある。空気が溜まつており、何故か部屋全体が薄っすらと輝いていた。

「これ……魔法の明りだ」

羽ばたいて水から上がり、光を操ろうとして気付く。熱を伴わず

薄く青みがかった光は、魔法の力によって生み出された、照明の為にだけ存在する光の特徴だった。

その青みがかった光の発生源。それが部屋の中央にある、小さな石だ。

大きさは5センチ程。手の中に握りこめる程度の、いびつな形の石。部屋の中央で何の支えも無く空中に浮かび、虹のように表面の色彩を変えながら光の魔力を放っている。

「何だろう？ 魔法の品物なのは間違いなさそうだけど……？」

小石に近寄るノエル。その時、ふと見た自らの翼に、何か文字が浮かび上がっている事に気が付いた。驚いて良く観察すれば、翼だけでは無い。肌や髪、身に付ける下着や、滴る水滴にさえ同じような文字が！

「この石の光……この光が文字になって……距離や色に応じて、見える文字が変わってる！」

驚きの声を上げ、翼に映る文字に目を凝らすノエル。そこには現在では使われていない古代語で、何かの隠し場所についての記述がある。ノエルの知識では詳細まではわからなかったが、サークスの話と総合して考えれば……。

「これが伝説の武具の在り処……とか？」

これはもしか、大発見なのでは？ 十年近く冒険者をしていて、初めての経験だった。ノエルの頭に明るい未来が想像される。

この石を持って帰り、謎の言語を解読して、みんなで宝探し！ サークスさんは念願の伝説的武具を手に入れて夢を叶え、太郎丸さんも同じように装備を充実させる。同時に金銀財宝も手に入って、

アデリーネさんは平穩で優雅な生活を。そしてヤマトも何か、生存率が上がるような魔法の御守りを手に入れて、毎日気楽に冒険しながら充実した生活をして……それで私も……！

凄く良い。とても素敵な生活だ。きつとみんな喜ぶ！

ニヤけた表情のまま、石に手を伸ばすノエル……と、これまで虹色だった表面が、突然深い青色に変化した。その途端！

「キャツ……！！」

あつ！ と思った時、ノエルは硬い岩壁に叩きつけられていた。魔法の小石から放たれた凄まじい衝撃波……というよりは絶え間なく押し寄せる圧力によって、彼女は弾き飛ばされたのだ。

「ぐっ……うぐぐ……！」

信じられない程の圧力。ミノタウロスの怪力を押し返した天使の力を持つてしても、抗う事が難しい。叩きつけられた岩壁が徐々に砕け、身体がめり込んで行く。空気や光さえも部屋の中央から押しのけられて壁際で圧縮され、濃い青色の輝きを放つ。上昇した空気圧によって呼吸は出来ず、光と共に視界さえも歪む。とてもではないが、普通の生物が耐えられる圧力では無い。だが……。

「てやああああッ！」

天使としての能力を全開にしたノエルが、押し寄せる圧力を押し返した！

純白の翼と天使の光輪から放たれる白い光。それを身体の前面で盾のように展開し、青色の光として認識できる圧力波を防ぎ、相殺して行く。

「んぐぐぐっ……！　このくらいっ……！」

大瀑布の如く押し寄せる光の奔流を押し退けながら、ノエルは部屋の中央に輝く小石に手を伸ばす。

これがあれば、きつとみんな幸せになれる。私だって満ち足りた生活を……ヤマトと一緒に……！

「てっ……天使、なめるなあぁあっ……！」

純白の光が爆発するように広がり、全てが眩い輝きを放ち、影が消え失せた。そして何もかもが白一色で塗りつぶされる。岩壁も、水面も、魔法の石も　ノエルの意識さえも。

そして、どれほどの時間が経ったのだろうか？

彼女が意識を取り戻した時。目の前には緑の木々と、抜けるような青空。そして見知った男性の顔があった。

「……ルさん！　ノエルさん！？　良かった、気が付いた！　本当に良かった……！」

「あれ……サークスさん？　ここは？　私、何を……？」

安堵の表情を浮かべるサークスに、ノエルは尋ねた。まるで寝起きであるかのように頭がボンヤリとして、考えが纏まらない。

どうやら毛布の上に寝かされていたようだ。身体にはサーコートが掛けられており、近くから打ち寄せる波の音が聞こえて来る。

「ここは、海底洞窟の外。入り口の近くにある砂浜だよ。ええと、行き止まりの水路へノエルさんが潜った　そこまでは覚えてる？」
「ええ、確か足にロープを結んで……」

手渡された水を飲む内、ノエルもようやく頭がはつきりとしてきた。

「キミが潜ってしばらく後、物凄い地震があつたんだ。その直後、洞窟の中に水が入ってきて……」

順を追って、丁寧に説明するサークス。

どうやら地震が起つたのは、ノエルが石の圧力に弾き飛ばされたのとはほぼ同じタイミングであるようだった。危険を感じたサークスは慌ててノエルに繋がったロープを手繰り寄せ……。

「そうしたら驚いたよ。ノエルさん、ぐったりして意識が無いんだもの！ その場では口くな応急処置も出来なくて、悪いとは思つたけど肩に担いで脱兎の如く……ってわけさ」

「そ、そうだったんですか、助かりました……そっか、私あの時に気絶して……」

良くわからないが、石に拮抗しようと力を振り絞つた結果、意識が飛んでしまったようだ。

サークスには感謝しなくてはならない。もし自分一人であつたら、死ぬ事はないにせよ、誰も訪れなぬ冷たく寒い水牢へ、半永久的に閉じ込められる羽目になつていたかもしれないのだから。

「本当にありがとうございます、サークスさん。助けて頂いたのはこれで二度目ですね」

「いや、お礼を言いたいのはこっちの方さ！ 一つは……これ！」

サークスが取り出した小さな革袋。その中に、見覚えのある小石が入っていた。

「ノエルさんが、大事そうに握ってたんだ。この輝き……魔法の品だ。水路の奥で手に入れたんだよね？ きつと、何か伝説の武器に纏わる物に違いない」

満面の笑顔で、サークスが言った。まるで子供のような、無邪気な表情だ。

魔法の小石は初め見たような淡い蒼の輝きを湛え、静かに革袋の中で転がっている。ノエルを壁に叩きつけた、荒れ狂う光の奔流が嘘であるかのようなようだ。

「それと、もう一つ……お礼というか、役得というか……これも二度目かな？」

「……？」

首を傾げるノエルへ、顔を背けながら、綺麗に折り畳まれた衣服を手渡すサークス。

「ゴメン。急いだから、着せる暇が無かった。それにまさか、丸裸になつてるとは思わなくて……」

「……えっ？」

小石のあつた部屋で受けた岩さえも粉碎し得る強烈な衝撃と圧力に、薄く柔らかな下着が耐えられるはずも無い。

ノエルの素肌へと掛けられたサーコートの下は、まさしく一糸纏わぬ姿。サークスと出会った日、スライムから助け出された時と同じ、完全なる素っ裸だ。

「天使って、ピンチになると服を脱ぐ習性でもあるのかい？」

「きつ……！！」

良く晴れた砂浜に。

「キヤアアアアアアッ!」

ノエルの甲高い悲鳴と、ビンタの快音が鳴り響いた。

第二十二話：色々あっても山河あり

どこまでも続く新緑の草原。爽やかな風が駆け抜けると、ざわめきが波となつて草木に見事な波形を描き出す。

そんな野原の小さな丘の上に建つ、小ぢんまりとした木造の一軒家。軒先に干された少量の洗濯物。玄関横に置かれた小さな農具。裏手には簡素な柵で仕切られた農場があり、太った牛が一頭、のんきに草を食んでいる。

「……ん、誰か来たのかな？」

家の中。

夕飯の準備に勤しんでいた幼い少女は、遠くから聞こえて来る足音を耳聡く聞き取つて、不意の来客を予感した。

近隣の村からも遠く離れ、見る物も何もないこんな場所までわざわざ来る者は、そう多くない。今は町に出て働いている兄か、物騒な物取りか。このどちらかだ。

草を踏みしめて近づく足音はテンポが良く、しつかりとした足取りの若者を想像させる……それが複数だ。しかも足音の一つは、やけに重そうな音をさせている。きっと大柄な体型なのだろう。

小さな頭をフル回転させて考える少女。この家にやって来るのは、兄か、物取りかのどちらかだ。そして兄は小柄であり、いま聞こえている足音は大柄な人の物。という事は……間違い無い、これは物取りだっ……！

少女は肩口まで伸びた茶色の髪を素早く頭上にまとめると、火に掛かっていたフライパンを手に、戸の影に隠れる。

どんどん近付いてくる足音。その音はやがて玄関前で止まり、ドアがノックされ……。

「御免。こちらに、スダ……」

「せえい!!」

「ぶぐオ……ッ!?」

先手必勝、不意打ち上等! 少女は、戸口から現れた人影に、良く焼けたフライパンを目一杯叩き込んだ。

鼻先に会心の一撃を受け、よろめき、跪く人影。良く見れば全身を包む真つ黒な体毛と、がっちりとした身体が目に入る。前に兄から聞いた、獣人の一種だろうと思った。だとすれば……!

「た、食べられて、たまるもんかーっ!」

「い、痛っ! ちょ……暫し待たぐはっ、ぎゃんっ!? きゃいんっ!」

物取りだけならまだしも、命まで取られてたまるものか!

少女は必死でフライパンを振り下ろし、黒毛の獣人(犬っぽい顔をしている)を叩いて叩いて、叩きまくった。

その回数が、果たして二桁に届いた頃だろうか?

「あわわわ……ちょっと待って下さい! 私たち、怪しい者ではありません! 私たちは……!」

「えいっ! ていっ! このっ!! ド変態! 犬畜生!! 糞外道っ!!」

「聞いて下さいっ! 私たちは、ヤマト様のっ……!」

長身でスラリとした美しい女性が、獣人と少女の間に割って入った。知的な雰囲気漂わせる、少女の憧れる女性像そのものの女性である。唯一気になる点といえば、尖った耳……そうか、この人はエルフだ! だが、こんなに綺麗な女の人がウチに何の用があると云うのdarou? 死ぬ、死ぬっ! と連呼していた為に良く聞き取

れなかったが、一瞬間き覚えのある名前が出たような気もした。

「ぜえっ、ぜえっ……な、何のご用ですか？　　うちは貧乏で、盗って行くような物は何もありませんから！」

いい加減疲れた事もあり、とりあえず手を止めて、フライパンを構えたままで問う少女。

そんな警戒心丸出しの少女を刺激しないように、エルフの女性はゆつくりと、丁寧に話し掛ける。

「貴女はスダチさん……ですね？　　私たちはヤマト様と一緒に旅をしている者です」

「……！　お兄ちゃんのお友達……？」

「そ、そうです！　　ああ、良かった……」

やっとわかって貰えた！　多くの尊い血が流れたが、やはり話せばわかるのだ。

エルフの女性ことアデリーネはホッと安堵の息を吐き、ようやく警戒心の和らいだ少女スダチに事の次第を話せる喜びに包まれていた。

「実は貴女のお兄様なのですが、この近くで動けなくなってしまいました……」

事情を話すアデリーネ。

そして、数刻程の後　　。

「う……うめんなさいっ！」

草原の一軒家にて、深々と頭を下げるスダチの姿があった。

彼女の前には、フライパンで殴られまくった黒毛の獣人こと、人狼の太郎丸。その隣ではアデリーネが苦笑し、更にその隣では、ヤマトがベッドに横たわりながら可笑しそうに笑い続けている。

「顔を上げられよ、スダチ殿。この程度、某にとっては何でもないお気に召されるな」

スダチの前に膝を付き、低い声で語りかける太郎丸。本人としてはなるべく穏やかに喋ったつもりなのだろうが、どこか威圧的な響きがあるのは如何ともし難い。

恐る恐る顔を上げたスダチは潤んだ目で太郎丸を見上げ、口元をワナワナさせながら呟く。

「だ、だつて鼻が……」

「む……いや、皆まで言われるな。委細構わず、武士に二言無し。大丈夫、何でも御座らん」

豪気なる太郎丸。だが彼の鼻の先には、少しだけ赤い物が滲んだ白い布が当てられている……フライパンの一撃を受けて、鼻血が出たのだ。

「おいスダチ、そんなに気にする事ねえよ。さっきから言ってるけど、太郎丸は丈夫なんだつて。それに本人が大丈夫って言ってるんなら、大丈夫だろ」

「でも……」

ようやく笑いが治まったのか、ベッドの上から声を掛けるヤマト。だが元氣そうな声とは裏腹に、顔色はあまり良くない。

半身を起こし、よろめきそうになるのをアデリーネに支えられながら、彼は精一杯の元氣でもって妹のスダチに軽く頼みを伝える。

「それよりさ、俺たちみんなハラ減ってるんだ。適当に何か作ってくれねえか？」

「え……？」

「何でもいいからさ。な、頼むよスダチ」

「う、うん……わかった。ちよつと待ってて！」

跳ねるようにして起き上がり、軽く歪んだフライパンを手に台所へと駆けて行くスダチ。その後姿を見送ると、ヤマトは深く息を吐いて、再度ベッドへと横になった。

「……大切な妹さんなのですね」

ベッドの端に座り、氣遣わしげに、優しい微笑を湛えるアデリーネ。

「そんなんじゃないけど、あんま心配させんのも悪いかと思ってよ……」

ぶつきらばうに言つて、視線を逸らすヤマト。その肩には幾重にも包帯が巻かれ、今も血が滲み出している。

彼はシルフと戦った際、背中に深い傷を負った。応急処置だけを行い帰路に付いたものの、深い森の中で予後が悪化。手持ちのポーションは既に使い切っており、立ち往生してしまったのだ。

太郎丸やアデリーネも傷が完全には回復しておらず、動けないヤマトを連れての長距離移動は難しい。仕方なく、最も近くの知り合い……つまりはヤマトの実家であるこの場所へ、妹のスダチを頼りやってきたというわけだ。

「仕送りはしてつけど、ずっと留守にしてんだ。たまに帰ってきた

兄貴がズタボロじゃ、安心してらんねえだろ？」

「うむ、全くだな。だが、それ故にスダチ殿は逞しく成長されているようだ」

「ははっ。悪かったな、太郎丸。うちのお転婆が無茶しちまって」

鼻の頭をさすりながら、太郎丸がニンマリと口の端を歪める。殴られた事を気にはしないようだが、相当痛かったようだ。

「まあ、流石にフライパンの角でしたからね……」
「うむ」

情け容赦の無い一撃だった。と、遙か後まで太郎丸は語り継いだと言う。

そうこうしていると、どこからか良いニオイが漂って来た。

「はい、お待たせ。出来たよお兄ちゃん」

スダチがボロ板に載せて持ってきたのは、柔らかく煮た豆とニンジンに少量の肉を加え、甘い味付けで整えた定番の田舎料理だ。

「こんなので良かったら、お二人も……」

「あら、有り難う御座いますスダチさん」

「かたじけない」

ヤマトのベッドを囲み、暫し食事に興じる四人。

スダチの手料理は簡素ではあったが中々の味わいで、保存食に飽きた冒険者の舌を楽しませるには十分すぎる物だ。

「へえ、お前料理上手くなったんじゃない？」

「本当、とても美味しいです。スダチさん、良いお嫁さんになれるそ

うですね」

「うむ……相違ない」

口々に料理を褒める三人にスダチは赤面し、モジモジと身体を揺り動かす。そして口の先を尖らせ、多少の不満を込めて言った。

「お兄ちゃん、いつも急に帰って来るから……先にわかってたら、何か用意するのに」

「無茶言つなよ。ノエルだったら定期的に来るんだから、良いじゃねえか」

その台詞に、ますます不満の表情を深めるスダチ。

この男はまた、何もわかっていない。そんな思いを胸に抱きながら、苦笑を噛み殺す太郎丸とアデリーネ。どれだけ自分に対して無関心なのかと呆れ返る。

「そういえば、お兄ちゃん。今日はノエルさん一緒じゃないんだ？」

「ん……まあな。アイツは別件で出張中だ」

「ふうん？ 珍しいね、いつも一緒なのに。何してるか気にならない？」

そう無邪気に問われ、一瞬言葉に詰まるヤマト。

気になるかと言われたら、そりゃあ気になる。だが、自分が気にしてどうこうなる事では無い。何故ならノエルは、自分には不釣り合いな……生きとし生けるもの全ての財産とも呼ぶべき、希少な天使なのだから。引き止められるならそうしたいし、これまではそうして来たのだが……。

「いや、まあ気になるって言うか……こっちにも色々と事情が……」
「ノエルさんはきつと寂しがってると思うよ？ 帰ってきたら、優

しくしてあげてね」

「……………」

言葉を失い、口をパクパクとさせるヤマト。

お前に言われなくても！　と言いつ返そうか、そんな事ねえよ！
と怒鳴ろうか。

好き勝手言いやがって、こっちも何かと考える所があるんだよ！
……と思ったヤマトだったが、口には出せない。下手な事を言って
素直に突っ込まれると、それこそ困ってしまう。

「ぶつ。どうやらスダチ殿の方が、ずっと大人であるようだな」

太郎丸が可笑しそうに、軽く噴出す。

「そのようですね……ヤマト様、優しくしてあげて下さいね？」

口元を押さえ、クスクスと肩を揺らしてアデリーネも笑った。

「う……うるせえよお前ら！　メシ食ったら、さっさと寝やがれ！
！」

ヤマトの怒鳴り声と他三人の楽しげな笑い声は、草原の風に乗って
夜遅くまで響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7526w/>

英雄予備軍冒険譚

2011年10月7日10時18分発行